

以テ法律上有効ノ者トナス

姓名變更ヲ公示スルノ要ハ姓名ニ關スル法律規則自身ノ本姓ニ出ル
モノニシテ更ニ喋々ノ説明ヲ待タヌシテ明カナル所以ハ羅馬法ニ於
キテモ已ニ之レヲ云ヘリ

佛國ニ於キテハ共和九年萌月二日ノ法律第四條ヨリ第九條迄ヲ以テ
故障申立ヲ許シ且ツ其ノ期限ヲ十二ヶ月間トシバーデン千八百三十
八年六月十八日及千八百六十四年九月二十日ノ法律ヲ以テ之レヲ三
ヶ月ノ期限トセリ

然レ凡只々名ノミヲ改ムルニハ相當ノ官衙ニ單一ノ通
知ヲ以テ足レリトス

佛國共和九年萌月ノ法律第一條ヨリ第三條迄バーデン千八百五十一年
年九月三十日ノ命令ヲ參看スヘシ
此ノ場合ニ於キテモ亦官衙ハ之レヲ告示シ且ツ身分簿冊ニ登記セサ

ルヘカラス

故ニ姓名ノ變更ヲ以テ國家ノ許可ヲ要ストスル現今ノ
規則ハ社會自由ノ原則ニ反スル者ナレ凡嫌惡スヘキ姓
名若クハ明カニ法律ニ反シタル姓名ハ官衙ニ於キテ素
リ之レヲ拒ムト得ル

斯ル場合ニ於キテ官衙ノ之レヲ拒絕スレハ姓名ニ關スル法則ハ公法
ノ性質ニ基クカ故ナリ(佛國共和九年萌月二日ノ法律第一條サクセン
千八百三十八年五月二十五日ノ命令)又國家ノ許可ヲ要スル原理ノ認
了シ得ヘキ場合ニハ其ノ改名ニ屬スル法則ハ之レヲ改姓ノ場合ニモ
亦通用スルコトヲ得ル故ニ人アリ若シ印度土人ニ普通ナル姓名ヲ撰フ
如キ者アラハ之レヲ許容スヘカラス

交際上其ノ姓名ヲ偽稱セル者設令ヘハ官衙ニ對シテ偽
名ヲ用ヒタル者ハ之レヲ所罰スヘキモノトス

バイエルン違警罪法第五十四條及第五十五條バーデン同上第四十四條及第四十五條千八百七十年刑法第三百六十條參看
又許可ヲ得スシテ御名若クハ皇族ノ名ヲ用ヒテ事ヲ爲シ又ハ君主皇族ニ關スル徽章ヲ用ヒタル者ハ之レヲ罰スヘキモノトス

第三十一節 身分

第二身分トハ人類自然ノ存在ニ由リテ固定セラレタル事爲ヨリシテ必然發生スヘキ人々自身ニ屬スル法律上ノ條件ヲ云フ而シテ此ノ事爲トハ即チ出產結婚及死亡ナリ

此等ノ事爲ハ必然發生スヘキ者ニテ人々之レヲ棄絶スルコトヲ得スト雖モ尙千八百六十九年七月三十一日ノ普國法ヲ見ルヘシ(此ノ法律ハ結婚セサル女子ニシテ婦タルノ稱號ヲ有シ得ヘキ許否ニ就キ提出セラル訴ニ關スル手續ヲ示ス者ナリ)

出產結婚死亡ノ外人類自然ノ生存ヨリ生スヘキ身分ノ差等ハ社會法ニ於キテ了知スルニアラス又確認ノ登記ニ關スル規則ヲ設クル者往々アリフランクフルト千八百五十年十月十九日ノ法律第二節及フリードベルヒ結婚法第七十七節ニ於ケルカ如シ

此等ノ事爲ヨリシテ各人各個ヲ識別シ得ヘキ標識及ヒ各人各個ノ法律上ニ於ケル過半ノ資格ヲ定ムヘキ人々ノ差別ヲ生ス而シテ此ノ身分ノ確真ニシテ且ツ之レヲ證明シ得ルトハ大ニ一般公益ニ關係ス

姓名ハ出產及結婚(第三十節)ニヨリテ定ムヘキ者ナルヲ以テ姓名ノ命定ト身分トハ密着ノ關係ヲ有シ二者ノ間敢テ抵觸アルヲ見ス故ニ姓名ニ關スル法則ハ其ノ基礎ヲ身分ニ關スル自然ノ法則ニ取り身分ノ登錄ト同時ニ姓名ノ登錄モ亦從テ生シ改姓改名ハ又盡ク之レヲ身分登録簿ニ記入スヘキモノトナルヘシ

故ニ又人々ノ身分ニ關係スル事實及細事ハ行政官衙ニ於キテ之レヲ公證スヘキ一般ノ必要ヲ生ス

特ニ此等ノ事務ヲ掌ルヘキ事務ノ國家官衙ヲ設置スルハ事物自身ノ本姓ヨリスレハ甚タ希望スヘキコトニアラスト雖モ之レヲ外形上ニ屬スル一般行政官衙ノ組織ヨリ考察シ又ハ宗教トノ爭議ヲ避ケントスルニ其ノ必要ナルヲ見ル蓋シ出産結婚死亡ノ三者ハ何レモ之レヲ單ニ教會寺院ノ司職ニノミ一任スヘキモノニアラサルカ故ニ從ツテ又之レヲ社會法ノ原則ニ準據セシメサルヘカラサルナリ(バイエルン千八百十八年五月二十六日ノ宗教令第六十四節及スタイン氏行政學第二卷ヲ參看スヘシ)

此ノ公證ヲナスニハ左ノ規則ニ從フ

(學國ニ於キテハ千八百三十四年七月四日ノ達千八百四十七年三月三十日ノ憲法同年五月十日ノ訓示同年七月二十三日ノ法律及千八百五

十四年四月三日ノ法律バイエルン千八百〇三年一月三十一日同四年二月四日ノ法律サクセン千八百七十年七月二十日ノ法律バーデン千八百六十年十月九日ノ法律澳國ニ於キテ其ノ主タル法律ハ千八百七十年十月二十日ノ命令及ヒ同年四月九日ノ法律トシ聯邦法律ハ千八百七十年五月四日ノ布告ニ係ル)

(第一)公證ヲ爲スニハ相當ノ官吏之レヲ公ケノ簿冊即チ身分簿帳ニ登記ス而シテ此ノ登記シタル事實ハ反對ノ證據ヲ舉クルニアラサレハ充分公ケノ信用ヲ有スヘキモノトス

(普國千八百四十七年七月廿八日ノ法律第十六節千八百七十年五月四日聯邦法律第二節)

(第二)右ノ登記ハ年月ノ順次ニ從ヒ其ノ都度一定セラレタル書式ニ依リ其ノ任ニ當ルモノ之レヲ爲サ、ルヘカ

ラス而シテ出産死亡ノ場合ニハ洗禮及ヒ埋葬ノ名ヲ命
スルノ權アル教會事務所之レヲ掌リ又結婚ノ場合ニ於
キテハ其ノ結婚ニシテ宗教上ニ於ケル者ナル片ハ教會
事務所若シ又民事上ノ結婚ナル片ハ國家ノ設置セル結
婚役所之レニ任ス然レモ此等教會ニシテ公ケノ資格ナ
キ片ハ國家ノ認了セル官衙ニ於キテ之レヲ司ラサルヘ
カラス

民事上ノ結婚ト雖モ之レヲ教會事務所ニ於キテ登記スルハ本則ノ例
外トス(バーテン民事上身分登記所ノ例外ニ關スル千八百六十年十月
九日ノ法律第二節フランクニフールト千八百五十年十一月十九日ノ法
律第四節ヨリ第六節迄)
外國ニ於キテ起リタル出産結婚死亡ノ登記ハ其ノ國在留ノ領事之レ
ヲ司ル(千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第一節及ヒ聯邦領事ノ組織

權限及ヒ義務ニ關スル千八百六十七年十一月八日ノ法律第十三節)
教會ニ公ケノ資格ナキ場合ニ此等ノ事務ヲ司ル官衙ハ多クハ此ノ登
記ヲ要スル人ノ住所アル地方裁判所トス(普國千八百四十七年五月三
十日ノ法律第一二節千八百四十七年七月二十三日ノ法律サクセン千
八百七十年七月廿日ノ法律澳國千八百六十八年五月廿五日及千八百
七十年十月二十日ノ法令)

(第三)右ノ登記ハ只々實證若クハ信據スヘキ通知アルニ
アラサレハ爲スヘカラス殊ニ結婚ノ場合ニ於キテハ其
ノ適法ニシテ有効ナル充分ノ證據ヲ要ス

特ニ外國ニ於ケル出産結婚及死亡ノ登記ニ注意セサルヘカラス故ニ
フランクフールトニ於キテハ千八百五十年十一月十九日ノ法律第十
節ヲ以テ外國ニ於キテ認了セラレタル出産結婚死亡ハ尙ホ本國裁判
所ノ認了ヲ要ストセリ(千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第十一節及

第十二節

(第四)右登記ハ凡テ同一ナル一定ノ公式ニ依リ且ツ總テ必要ナル事項ハ盡ク之レヲ記載セサルヘカラス

必要ノ事項トハ事爲姓名、性男場所、時日、證據及書類ヲ云フ(スタイン氏行政學、普國千八百四十七年三月三十日ノ命令聯邦法律第九節ヨリ第十二節迄)

又皇族ノ出産、結婚、死亡ハ特別ナル法則ニ據ルモノトス(バイエルン千八百十九年八月五日ノ皇族條例)

(第五)出産、結婚、死亡ノ届出ハ其ノ義務ヲ負タル人ヨリ正當ノ期限ニ於キテセルヤ否又ハ之レヲ放棄スル者ナキヤ否ヲ視察スルハ地方警察署之レニ任シ若シ此ノ規則ニ反シタル者アル片ハ速ニ之レヲ執行セシムヘキ手續ヲ爲ス

出産、結婚、死亡ノ届出ノ義務ヲ負フ者ハ其ノ家族ノ外、仲人、寡婦、旅宿ノ主人トス而シテ此ノ届出ヲ怠リタル者ハ警察署之レヲ處罰ス(バイエルン千八百六十二年遊警罪法第五十三條バーデン同上千八百六十三年ノ法律第四十四節)

(第六)身分簿册登記ノ任ニ當レル者ハ請求ニ應シテ公證シタル謄本ヲ附與スルノ權利義務ヲ有ス

(普國千八百四十七年七月廿三日ノ法律第十六條サクセン千八百七十年七月廿日ノ法律第十條バイエルン千八百十一年十二月二十五日ノ規則フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第三節) 内國ニ於キテ死シタル外國人并ニ適法又ハ不適法ノ結婚ヨリ生シタル外國人ニ關シテモ出産、死亡ノ證書ヲ附與ス(マクレンブルヒ千八百四十八年三月十二日及千八百六十年十一月十六日ノ規則)

(第七)身分簿册ノ登記及保存ハ相當官衙ノ管督ヲ受ク

(普國千八百四十五年六月廿七日ノ規則千八百三十七年十月三十一日ノ改正達第百九十節)

第二章 公章

パブリックデイズチングレヨンス
デイズチングレヨンス

第三十二節 公章ノ本性

社會中ノ公通上ニ於キテ公章ノ授與ハ事物自身ニ於キテハ法律上特ニ重要ノ關係ナシ故ニ競争賞與勳章旌表賞狀等諸種ノ形狀ニ於キテ公章ヲ使用スルハ事物自身ノ本性ヨリシテ別ニ其ノ能ク法律條規ニ適合スルトヲ要スル場合ヲ除クノ外之レヲ各人ノ自由ニ放任シテ碍ナシ

設令ヘハ學事獎勵ノ賞與ハ教育令ニ從ヒ出版印刷ヲ以テ公ケニ文學上ノ著書等ヲ褒貶批評スルハ出版ノ自由ニ關スル原則ニ準據セサル

ヘカラサルカ如シ

然レ此等ノ公章タル者ニ社會中ニ在リテ民人カ其ノ生活目的ヲ達スルカ爲メニハ極メテ重要ナル助力ヲ得ヘキ方便タルノミナラス兼テ又各人一己ノ力決シテ及フヘカラサル勉勵勤勞ノ報酬タルヲ得ヘキ者ナルカ故ニ公章位勳ノ授與ハ法律規則ヲ以テ之レヲ整理シテテ其ノ間ニ正義公平ノ原理ヲ保タシメ以テ適法ニシテ且ツ適理ナル方法ニ依リ常ニ人性ニ免ルヘカラサル偏倚嫉妬ノ心ヲ制セサルヘカラス而シテ特ニ此等ノ法律規則ヲ必要ナリトスル者ハ
第一公ケノ機關ヨリ授與スル公章ニシテ其ノ貴重ナル所以公共ノ輿論ニ關スル者
第二公章ヲ授與スルニ通常拔群ノ事アルヲ要シ又ハ公

章自身ノ本性ニシテ一定シタル條件ヲ充タシテ後始メ
 テ之レヲ授與シ且ツ此ノ條件ヲ充タスト同時ニ尙ホ公
 章ヲ受ケントスル人ニシテ特別ナル著名ノ事業及功績
 アルヤ否ヲ考察スヘキ者是レナリ故ニ社會法ヲ以テ支
 配スヘキ公章ハ(甲)國家ノ權力ニ依リテ授與スル位勳(乙)
 學院ヨリ授與スル學位(丙)都邑ヨリ授與スル名譽民權ノ
 稱號トス

由是觀之社會上公章榮譽ノ淵源タルヲ得ヘキ者ハ國家
 學術及都邑ノ三者トス故ニ左ノ數原則ヲ生ス

(第一)公章ニ關スル制度ハ人性ノ自然ニ基ク者ニシテ偶
 然若クハ隨意ノ性質ヲ有スルモノニアラス

位勳就中貴族及爵位ヲ廢止セントスル議論ハ數々起ル者ナレ其ノ
 基ク所ハ單ニ空想ノ論理ニ過キスシテ人類實際ノ希望如何ヲ考察セ

サルカ故ニ常ニ之レヲ實行スルヲ能ハサルナリ(クリューメル氏著獨乙
 聯邦公法ニ詳論ス而シテ現今ノ爵位制度ハ之レヲ改良セサルヘカラ
 サル所以ニ就キテハモール氏著國法萬國公法及政治論及ヒブルユン
 チュリ―氏國法汎論ヲ見ルヘシ)

獨逸國憲千八百四十九年三月廿八日ノ憲法第二條ニ依ルキハ身分ニ
 關スル凡テノ特權及官務ニ關セサル尊稱ハ盡ク之レヲ廢シ決シテ再
 興スルヲ許サス又獨逸國民タル者ハ如何ナル爵位ト雖モ外國政府
 ヨリ之レヲ受クルヲ得サルモノトセリ

(第二)公章ノ授與ハ相當ナル社會機關ニ於キテ之レヲ掌
 リ其ノ宜シク法律規則ニ準據スヘキハ勿論ナレ其ノ之レ
 ヲ自由ナル競争ニ任セサルヘカラス又夫ハ公ケハ名譽
 (即チ)ハ淵源ヲ以テ之レヲ國家君主ノミニ歸スルカ如キ
 ハ誤謬ハ見ナリトス

ツハアリエー氏國法集ニ曰ク國王ハ國家ニ勳功アル者ヲ賞スルノ權アリ而シテ此ノ賞與ノ種類ハ布告ヲ以テ之レヲ定メ且ツ國庫ノ費用ニ出ル者ハ代議院ノ承諾ヲ要スト

(第三)公章ヲ授與スルニハ其ノ都度適法ニシテ且ツ適理ナルトヲ要シ就中偏愛憎惡ナカルヘシ

設令ヘハカリギョラカ其ノ所有ノ乘馬ニ羅馬議官ノ稱號ヲ附與シ又ハ下等ノ家僕車夫等ヲ呼フニ國家高官ノ稱號位階ヲ以テスルカ如キハ全ク不適理ナル者ト云フヘシ

(第四)事物自身ノ本性ニ出ルモノニアラサレハ如何ナル公章ト雖氏決シテ之レニ附スルニ多少特別ノ權利ヲ以テスヘカラス

(千八百四十九年帝國憲法第二條千八百五十年ノ普國憲法第五十條千八百十八年ノバイエルン憲法四篇第五章千八百十八年八月二十二日

ノバーデン憲法二篇第九節

第三十三節 位勳

國家ノ名義ヲ以テ位階勳章ヲ授與スルノ權ハ獨リ國家ノ元首ニ屬スヘキ者トス

(千八百五十年ノ普國憲法第五十條施政權及執行權ノ使用ニ關スル千八百六十七年十二月廿一日澳國ノ布告第四條)

故ニ位勳ニ關スル國家元首ノ權利ハ左ノ如シ

(第一)國家元首ハ爵位及勳章ヲ制定シ且ツ之レヲ授與スルノ權ヲ有ス而シテ此ノ位勳ノ授與ハ各々其ノ條例ニ從ヒ君主ノ意見ヲ以テシ又此ノ位勳ノ授與ヲ爲スニハ數々有爵者若クハ其ノ委員ノ發議ニ係ルモノトス

各爵位ニ又各々其ノ條例アリ君主之レニ準據シテ授與ノ權ヲ執行ス設令ヘハバーデンハ千八百四十年一月十七日及ヒ千八百六十六年九

月三十日ノ條例ハ各々一種ノ勳章ヲ授與スルニ關スル條例、普國ニ在
リテハ、鍊冠章ニ關スル千八百七十年七月十九日ノ公布等ノ如シ、佛書
ブロッグ氏政治字典、オールドルド、シニバルリ」ノ部參照

君主カ位勳ヲ授與スルニハ左ノ重要ナル三種ノ公務ヲ
區別シ此ノ三種ノ差異ニ從ヒ位勳自身ノ種別ヲ生ス
(甲)軍功

(乙)學術技藝并ニ民間諸種ノ事業

(丙)王室ニ盡シタル忠義又ハ外國帝王ニ對スル尊敬及ヒ
友誼ノ證

而シテ位勳ノ制ニ關スル行政ハ半ハ位勳局半ハ特種ノ
官衙ニ於キテシ常ニ國家高等官衙ノ指揮ヲ受ク

(位勳總裁委員ノ有シタル管督權ヲ以テ内閣ニ歸シタルトニ關スル千
八百五十年一月二十二日普國公布)

(第二)國家ノ元首ハ貴族并ニ貴族ノ等級及其ノ稱號ヲ授
クルノ權アリ然レ此レ等々等級稱號ハ特別ノ任用ヲ要
スル官吏ニ屬スル者ト混同スヘカラス

澳國々憲第四條(千八百六十七年十二月二十一日)ヲ參照スヘシ又貴族
タルヘキ法律上ノ認了ハ貴族名簿ニ之レヲ登記スルニ在リ故ニ公證
ヲ得タル謄本ハ充分貴族タルノ證據タルヲ得ル(バイエルン千八百
十八年貴族令第八條)

又貴族ノ稱號ヲ授與スルニ貴族免狀グナトヲ以テスルヲアリ此ノ免狀ニハ
授與スヘキ貴族ノ等級ニ準シテ豫定シタル稅額ヲ拂フタル者ニハ其
ノ稱號ヲ授與スヘキヲ記シテ君主之レヲ發行シ且ツ公ケニ之レヲ
告示スヘキモノトス(バイエルン千八百十八年貴族令第三節)

(第三)國家元首ハ位階ヲ授與スルノ權ヲ有ス然レ此ノ
位階タル王室朝廷ニ關シテ勤勞アル者若クハ官吏ニ授

與スヘキ者ニシテ其ノ効力ハ只々帝王ニ對スル片若クハ有位者相互ノ間ノミニ止マリ社會ニ對シテハ決シテ爲メニ毫末ノ權利ヲ生セス又々義務ヲ負擔スルナシ

(クルーベル氏著獨逸聯邦公法第四百八十八節附論四及ヒリヨンネー氏著國法論ニ詳論ス)

外國ノ勳章ヲ受領シ及ヒ之レヲ佩用スルハ國家元首ノ認可ヲ要ス

(バイエルン千八百十八年憲法第十四條同追加千八百六十七年十一月八日聯邦法律第五節)

爵位稱號勳章ヲ濫用セル者ハ警察權之レヲ處罰ス

(千八百七十年刑法第三百六十條バイエルン千八百六十二年違警罪罰則第五十五條バーデン千八百六十三年同上第四十五條)

第三十四節 學位

學位就中大學博士ノ稱號ヲ授與スルハ大學教授之レヲ掌リ之ニ關スル一般若クハ特別ナル大學々制又ハ各學位ニ關スル特種ノ採用條規ニ從ヒ高等學務局ノ管督及認可ヲ經テ之レヲ行フ

○昔日ニ於キテハ博士ノ外「バッチエロル」「リサンシエー」「得業生」「マスター」「學士」ノ稱アリ未タ博士ノ稱號ヲ得ルニ至ラサル者ニ先ツ之レヲ授與シタリト雖モ今日ニ於キテハ其ノ稱漸ク廢滅シ或ハ博士ノ學位ヲ得ルト同時ニ之レヲ得タル者トスルニ至レリ然レモ今日ト雖モ宗教學專門ノ學位ニハ尙ホ「リサンシエー」ノ稱號ヲ存ス

○特別ナル大學々制ニ關スル者ハ千八百十六年ベルリン大學千八百三十七年ロストック千八百五十四年ハロー千八百四十三年ケーニツヒスブルヒ千八百十六年プレスロー千八百六十五年グライフワルド等ノ學制ヲ參照スヘシ又千八百六十四年ツルヘル大學々制第六十六節

ニ依ルキハ學位ノ附與ハ大學全體ノ掌ル所ニシテ總理之レニ捺印スヘキ者トセリ而シテ宗教及哲學科ニ關スル博士ドクトルリカンシエー「マストル」ノ學位ハ教會管長之レヲ授與スルノ權ヲ有ス(千八百三十二年十一月十二日ノ規則)之レニ反シテ技藝ニ關スル學位ハ成規ノ試験及其ノ實跡アルヲ要ス(リヨンチー氏學國教育法參照)

○特種ノ採用法ハ學科ニ依リテ各其ノ條規ヲ異ニシ又々諸種ノ大學ニ依リテ小異アルハ各々之レニ關スル條規若クハ布告ニ載ス(リヨンチー氏同上參照)

○高等學務局ノ管督スル事項ハ只々必要ナル法式上ノ證書ニ關スル行政ニ止マリ大學教授ノ當サニ掌ルヘキ學術上ノ試験ニ及フモノニアラス且ツ學位授與ノ權利ハ國家ノ權カヲ以テ決シテ之レヲ奪フコトヲ得ス

學位ヲ授與スルニ二様ノ區別アリ則チ左ノ如シ

(第一)志願者ノ願ニ由リテ學位ヲ授與スルニハ其ノ專修學科ヲ完了シタル外形及實跡上ノ證左アルヲ要ス而シテ此ノ證左ハ左ノ五條件ヲ備ヘサルヘカラス

(甲)大學若クハ之レト同等ナル高等學校ヲ卒業シタル事

(乙)學術上ニ關スル論文ヲ起草シタル事○此ノ論文ハ他人ノ助ケヲ借ラスシテ志願者自ラ起草シ其ノ專修ノ學科ニ於キテ自修シタルノ證トナスニ足ルヘキ者ナラサルヘカラス且ツ論文ハ印刷シテ之レヲ公ケニシタル者ナルヲ要ス

(丙)試験官ノ前ニ於キテ專修ノ學科ニ關スル嚴正ノ試験ニ及第スル事

著名ノ大著述等ヲ爲シ且ツ志願者ノ遠國ニ寄留スルカ又ハ其ノ身分等ニヨリ特別ノ事由アル者ハ此ノ及第試験ヲ要セス

又昔日ニ在リテハ志願者自ラ立案セル學術上ノ問題ニ付キ公ケニシテ且ツ嚴正ナル討議ヲ爲シタルコトヲ要スル習慣ハ只タ儀式ノミニ止マリテ漸々廢滅ス然レモ論文ヲ起草シテ之レヲ公ケニシ以テ博士タルノ價格アルヲ證明スルノ例規ハ依然トシテ存在ス

(丁)品行ノ方正ナル事、學業履歷并ニ身分職業ヲ證明スル事

(戊)志願者自ラ起草シタル羅旬文ノ履歷書ヲ出ス事

博士ノ學位ニ及第シタル者ハ成規ノ納金ヲ出サ、ルヘカラス而シテ此ノ金額ハ特資トシテ其幾分ヲ國庫ニ收メ其ノ餘分ハ報酬トシテ之レヲ試験官中ニ分配スル者トス

(千八百十六年柏林大學々制第九款第七節)

(第二)大學教授官ノ決議ニヨリ試験及第并ニ納金ヲ要セ

ス名譽ノ爲メニ學位ヲ授與スル事アリ此ノ場合ニ於キテハ只タ大學教授官全員ノ一致ヲ以テ學術上ニ特別ナル拔群ノ勤勞アル者又ハ大學ノ爲メニ盡力シタル者又ハ一般ノ教育進歩ヲ補益シタル者ニ授與ス(設令ヘハ著名ノ碩學、技藝師、政治家、官吏等)

千八百十六年柏林大學々制第八節ケ—ニツヒスブルヒ大學々制第十八節千八百十六年ブレスロー—大學學制第九款第七節參照)

博士ノ學位ヲ得タル者ハ博士タルノ稱號ヲ用ユルコトヲ得ル

昔日ニ在リテハ博士ノ學位ニハ特種ノ權利ヲ備ヘタリシカ今日ニ於キテハ社會法ノ法理ニ反スルモノトシテ之レヲ廢止ス(ルンデ—氏獨逸私法第四百二十節及第四百二十一節參照)
又學術ニ關スル職業ヲ爲スノ權設令ヘハ代言職、技術師、教授職等ハ博

士ノ學位ヲ得ルト否トニ關係スルヲナシ

又博士ノ學位ヲ得タル者ハ教授官ニ信義ヲ盡シ且ツ銳意熱心シテ學術ノ進歩ヲ謀ルノ義務ヲ有ス

然レモ此等ノ義務ハ事物自身ノ本性ニ基ク者ノミニシテ其ノ他ニ存スルヲナシ設令ヘハ貧困危難等ヲ救助スヘキ義務ノ如キハ已ニ今日ニ實行スルヲ能ハサルナリ

學位ト他物ノ關係ニ就キテハ往々論議ノ問題トナルトアレモ博士ノ學位ハ只タ學術上ノ區域ニ於キテ之レヲ授與シ國家ノ權力ヲ以テ授與スル位階ト併立スル所以ヲ知ラハ此等ノ疑問ハ自ラ了解スヘク且ツ此ノ二者ニシテ往々相一致シ殊ニ實際上ニ於キテハ諸種ノ職業營業等ニ於キテハ學位ノ必要ヲ見ルト極メテ多シトス
實際上諸種ノ職業營業等ニシテ學術上ノ論理ニ準據スルニ從ヒ其ノ

高尚ナル事業ニ至リテハ益々學力ヲ有スル人物ヲシテ之レニ從事セシメサルヘカラサルノ必要ヲ生シ今日ニ至リテ其ノ完全ナル人物ハ獨リ學術教育制度ニ由リテノミニ其ノ需用ニ應シ得ルニ至レルヲ理想シ得ヘシ而シテ又博士ノ學位ヲ有スル人物今日ハ其ノ夥多ナルニ過クルトスル杞憂ノ論議モ往々聽クヲナレモ是レ近世學術上諸職業ノ關係ヲ明カニセサル誤見ノミニリヨースレル氏著アダムスミス氏富國論評

博士ノ學位ハ同一ノ學科ニ於キテハ只タ一タヒ之レヲ得ルニ止マルヘシ但シ其ノ學科ヲ異ニスル片ハ二三ノ學位ヲ受領スルトヲ得ル

設令ヘハ一人ニシテ同時ニ宗教學、哲學科等ノ博士タルトヲ得ルモ數多ノ宗教博士若クハ數多ノ哲學博士ノ學位ヲ有スルトヲ得ス

第三十五節 都邑民タル名譽

都邑民タル名譽ヲ授與スルノ權利ハ都邑行政政府ニ屬シ
都邑會代議士若クハ都邑議會ノ發議若クハ承諾ヲ得テ
之レヲ附與ス

(千八百五十三年學國邑法第六節千八百三十二年サクセン邑法第五十
九節千八百六十九年バイエルン邑法第二十四節澳國邑法第八節及ヒ
其ノ學術ニ關スル者ハルンデー氏著獨乙私法フローリッヒ氏著バーデ
ン邑法マイエル氏著行政原論參照)

都邑民タル名譽ノ稱ヲ受クルニハ更ニ特別ナル要件及
ヒ試験ヲ要セス只タ都邑ニ特別ノ功勞アル者又ハ拔羣
ノ人才ニ授與シテ尊敬ト感謝ノ意ヲ表スルノミ

バイエルン千八百六十九年ノ邑法第二十四節及第十七節ニ依ルルハ
都邑民タル名譽ヲ外國人ニ贈與スルハ君主ノ認可ヲ要シ且ツ此ノ名
譽ヲ受領シ得ヘキ者ハ丁年ニシテ獨立ナルヲ要ス○又バンブルヒ

邑法ニ從ヘハ有爵者ハ此ノ名譽ノ稱ヲ受クルヲ得サル者トセリ

都邑民タル名譽ノ稱號ヲ有スト雖モ更ニ特別ナル義務
ヲ有セス又タ現ニ都邑民タル權利義務ヲ有スル丁ナシ

都邑民タル名譽ハ只タ榮譽ノ稱號タルニ過キス(バイエルン邑法及千
八百三十六年四月十五日バーデン指令參照)

故ニ此ノ名譽ノ稱號ヲ有スルトモ邑稅ヲ上納スルノ義務ナシ但シ此
ノ名譽ノ稱號ヲ授與スルニハ一定ノ稅額ヲ上納スル者タルヲ常トス
由是觀之今日ノ社會ニ於キテハ都邑民タル名譽トハ決シテ之レヲ左
ノ意義ニ於キテ用ユヘカラス

(甲)權利ノミヲ有シテ更ニ義務ナキ稱號ノ意學國千八百五十二年邑第
六節澳國邑法第十一節)

(乙)榮譽ノ稱トシテ惠與シタル現實ノ都邑民タル權利ノ意(フローリッヒ
氏バーデン邑法及マイエル氏行政原論)

第三十六節 其ノ他ノ公章

上來論述シタル公章ヨリ他ノ賞狀認了設令ヘハ學者ノ
結社集會ニ加入スル事榮譽タルヘキ贈與ヲ授受スル事
等ハ之レヲ授受スル人ノ自由ト之レニ關スル規則ニ任
ス然レモ此等ノ者ニシテ公ケノ性質ヲ有シ且ツ國家ノ
權力ヲ發顯シタル者ト思惟スヘキ片ハ之レニ關スル公
法即チ布達條例等ノ定規ニ從ハサルヘカラス
近世ニ於キテハ博覽會ニ依リテ授與スル競争賞牌及賞
狀ハ現ニ營業ノ能否ヲ定メ且ツ競争事業者ノ間ニハ常
ニ紛争ノ事項タルニ至レルカ故ニ其ノ間最モ重要ノ注
意ヲ要ス而シテ萬國博覽會ニ於キテ斯カル章標ヲ授與
スルハ國家ト國家ト協議ニ成リタル定規ニ從フヘキモ
ノトス

第三章 宗教

第三十七節 宗教自由ノ本性

人各々其ノ奉スル所ノ宗旨アリ以テ己レヲ創造シ己レ
ヲ保有シ萬物ヲ創設シ萬物ヲ統轄スル全能ニシテ且ツ
神聖ナル眞神ト心思ノ交通ヲ爲サントシ以テ他人ト共
ニ此ノ心思交通ノ冥護ニ依リ己レカ身體精神ノ自由ナ
ル發達ヲ遂ントスルカ故ニ從ツテ又之レニ應スヘキ行
政ノ法律ヲ發生シ專ラ社會上ノ論點ヨリ宗教ニ關スル
諸事項ヲ規定スヘキ法則ヲ論述セサルヘカラス

行政法ニ於キテハ專ラ社會上ノ論點ヨリ論述スルカ故ニ諸種ノ教會
個々ニ關スル内外特種ノ法律ハ別殊ノ論ニ屬ス就中認了ヲ得タル基
督教ハ皆ナ之レヲ其ノ教會法ニ一任ス

故ニ行政法ハ宗教ヲ以テ人類ノ發動ヲ表示シ文化ノ進

歩ニ欠クヘカラサル要件ナリト考量シ且ツ此ノ宗教ニ
 關スル事項タル高尚心思的ノ性質ヲ帶ヒ外部ノ強迫ヲ
 施スヘカラサル者ナルカ故ニ宗教進化ノ本性ト相關ス
 ル各人各個カ社會法上自由權ヲ恢復シテ人人奉教ノ需
 用ヲ充タス¹ヲ保護シ且ツ之ヲ増進セシムル¹ヲ勉ム
 宗教ノ本旨ハ素ト眞神ト人類トノ目ニスヘカラサル交通ヲ爲スニ在
 リト雖モ人世一般ノ情況ヨリ自ラ顯ハレテ外形ノ顯象ヲ呈シ從ツテ
 又人類自由ノ一種トシテ法律上ニ於ケル權利タルノ形狀ヲ爲ス
 如何ナル宗教ト雖モ苟モ宗教タランニハ必ス左ノ三種ノ事項ヲ包含
 ス

(甲) 教法即チ人類ノ起源、人類ト眞神トノ關係及ヒ人類ノ決意未來ヲ説
 明スル眞理ノ一体

(乙) 道德即チ人々カ眞神自己及他人ニ對スル義務ヲ説明スル眞理ノ一体

(丙) 神聖及神秘ノ事爲即チ人々眞神ト心理的ノ交通ヲ得テ其ノ宗教上
 ノ感覺ヲ満足養成スル事項

(ギソ) 氏文明史第八十九葉ワルデル氏姓法及政治論第四百七十三葉
 參照)

又タ道義教即チ自然教ノ必要如何ニ附キテハカント氏宗教理學及ツ
 ハリエー氏國家集ニ詳論ス

安心教即チ信向ヲ以テ智識ノ極點及最終目的トスル宗派ニ關スル意
 見ハツハリエー氏同上ノ著書ニ詳論ス而シテ夫ノコンスタン氏カ宗
 教ハ智者ノ發明ニモアラヌ又タ愚者ノ誤見ニモアラヌ如何トナレハ
 若シ之レヲシテ智者ノ發明ナラシメハ愚者ハ之レヲ知ル¹能ハサル
 ヘク又若シ愚者ノ誤見ナラハ智者之レニ與セサルヘケレハナリト云
 ヘルハ即チ此ノ安心派ノ議論ナリ(佛書プロック氏政治字典中宗教ト題
 スル項參照)

ダイクローキル、ドボリチフク、レエアル

又宗教ハ道德ノ重要ナル淵源ナルカ故ニ從ツテ又之レ
ヲ社會法上ヨリスルモ國內ノ法律條規ヲ維持スル必須
ノ柱梁ナリトス

ポルトリス氏曰ク假定ノ原規ナキ道德ハ宛モ法廷ナキ法律ナリ
レニユクテモサントリヲニナシ

社會法ノ總則ニ從ヒ宗教ノ範圍ニ於キテモ亦宗旨ノ差
異ニ由リテ人々ノ差等ヲ認了スルナシ然レモ宗教ノ
信仰及之レヨリ生スル外部ノ制度ハ各人各個カ自由ノ
判定及意思ニ一任スヘキ者トス故ニ宗教ト社會トノ關
係ニ於キテハ沿革上今日人民文化ノ程度ニ照シテ之レ
ヲ實行シ得ヘキ限リヘ宗教ノ自由ト云ヘル法律上ノ一
大原則ヲ生ス

宗教自由ノ原則ハ已ニ千七百八十八年七月九日普國ノ有名ナル宗教
令ニ於キテ認了セリ其ノ他同國千八百四十七年三月三十日新ナル教

會設立ニ關スル特許ノ令同千八百五十年ノ憲法第十二條バイエルン
ニ於キテハ千八百十八年ノ宗教令第一條パーデンニ於キテハ千八百
十八年ノ憲法第十八條澳國ニ於キテハ千八百六十七年十二月廿一日
ノ國法書第十四條參照)

法律上ニ於ケル宗教自由ノ原則ハ萬種ノ教會ヲ以テ同等ナリトスル
道德上又ハ宗教上ノ意義ニ解スヘカラス(佛人ラブーラエー氏改進黨
論第四十三葉參照)故ニ宗教自由ノ原則ヲ以テ國家カ安寧秩序ヲ保維
スルノ目的ヲ以テスル立法ヲ拒絕スルヲ能ハス即チ此ノ點ニ於キテ
ハ宗教ハ單ニ各人各個ノ私事ト言フヘカラサルナリ夫ノ自由ノ國家
ニ自由ノ教會アリト云ヘル近世著名ノ格實カブールノ言ヲ以テ宗教
ト社會法トハ全ク相分離スヘキ者トスルノ意義ニ解スルヲ能ハス只
タ社會上自由權ノ原理ヲ以テ人類宗教上ニ於ケル活動ニ適用シタル
ノミ

ウエスト、フリヤノ平和條款ニ從ヒタル古代ノ意義ニ於ケル宗教ノ自由及思想ノ自由ノ如何ナル者ナリシカハリヒテル氏著教會法ヘルマン氏著國內教會論ニ詳ニス

然レ凡各人各個カ信仰ノ宗旨ハ一般人類活動ノ必需及社會一般ノ發達ニ必要ナル條件ト背馳スルヲアルヘカラス故ニ國家主トシテ社會活動ノ諸範圍ニ於キテ之レヲ監察ス

上來述フル所ノ原理ニ由リ宗教自由ノ法理ニ於キテハ左ノ三大原則ヲ生ス今此ノ順序ヲ追フテ下條ニ之レヲ詳論セン

第一、思想ノ自由

第二、教會ヲ以テ一般法律ノ原理ニ服從セシムル事

第三、宗旨ノ異同ヲ問ハス各人各個ヲ以テ法律上同等ナ

リトスル事

第三十八節 宗教自由ノ沿革畧

獨逸帝國古代法ニ於キテハ只タ「ローマン、カトリック」即チ耶蘇舊教ニ屬スル者ノミ國民タルノ權ヲ有スルヲ得タリシカ先ツ「宗教平和ノ決議」ニ由リ耶蘇新教ニ屬スル帝國モ同等ノ權利ヲ有スルヲ定メタレ凡尚ホ宗教ノ異同ニヨリテ政權ヲ異ニスルノ制ヲ存シ次テ各主權者ニ附スルニ改革權即チ新舊ノ宗派共ニ民權自由ヲ許スノ權ヲ以テセリ然レ凡其ノ宗教ニ屬スル自由ハ未タ完カラサリシナリ而シテ此ノ情況ハ獨逸ニ於キテハ十九世紀ノ初メニ至ルマテ依然トシテ存在シ現ニライン聯合ノ時ニ及ンテモ此ノ原理ノ廢滅セサリシトハ當時祭祀ヲ行フノ權及ヒ教正ノ有スル民權政權ハ新舊兩教同

等ナルヤ否ヲ討議シタリシトアルヲ以テ知ルヘギナリ」
 千八百十五年六月八日獨逸聯邦法第十五條ヲ以テ初メ
 テ獨逸各邦内ニ於キテハ基督教派ノ異同ハ民權政權ト
 關係ナシトスル原理ヲ定メタリ然レ此ノ法令ニ由リ
 テ認了シタル原理ハ古代ヨリ當時ニ至ルマテ現ニ獨逸
 國ニ於キテ公然認了セラレタル宗派ノミニ止マリ其ノ
 他ノ基督教派ニ及ハス且ツ此ノ法令ハ只々民權及政權
 ヲ保護スル者ニシテ完全ナル宗教信仰ノ權利ヲ許容シ
 タル者ニアラス

(ツェーブル氏著獨逸國法論、リンデー氏著獨逸國內新舊兩派ノ同等論參照)

千八百四十八年各邦憲法ハ各人各個ニ許スニ已ニ認了
 セラレタル基督教派若クハ後來認了セララルヘキ教會ニ

許スニ公然奉教ノ自由ヲ以テシタルノミナリシカ千八
 百四十九年三月二十八日帝國憲法以來ノ法律ハ一切ノ
 制限ヲ用ヒス家屋内ニ於ケルト公然ナルトヲ問ハス凡
 テ教儀ヲ執行スルノ權利ヲ明許セリ

(リヨンネー氏著普國々法論、ツェーブル氏著獨逸國法論、ツァハリエー氏獨逸及聯邦法律參照)

第三十九節 思想自由(第一)

思想自由ノ原理ハ第一信仰ノ自由第二教會加入及創設
 ノ自由第三祭祀ノ自由トス今マ之レヲ下條ニ分論セン

第一、信仰ノ自由
 宗教ノ信仰トハ其ノ信仰ノ事項并ニ人々各其ノ欲スル
 所ノ宗教ヲ信仰シ得ルノ點ニ於キテハ自由ナルヘキト
 ヲ言フ

信仰ノ自由中ニハ全ク無宗教タルヘキ各人各個ノ權利ヲ包含ス然レ
是レ實ニ假想ノ場合ニシテ全ク無宗教ナル者ハ極メテ稀ナラム即
チ寧ロ之レヲ公然一定ノ宗教ヲ信仰セサルノ自由權ト云フヘシ(ゲ
子ル氏變宗論參照)

獨逸根本法律第五條百四十四節ニ曰ク各獨逸人ハ信仰及思想ノ完全
ナル自由ヲ有ス故ニ何人ト雖モ其ノ信仰セル宗旨ヲ公示スルノ義務
ナシト(ヘルマン氏著國內教會論參照)

然レモ信仰ノ自由中其ノ信仰ノ事項ニ屬スル者ト雖モ
其ノ國法就中刑法及ヒ公認セラレタル道德ノ原理(第十節參考)
ト抵觸スヘカラサル制限アルヘキハ當然ナリトス而
シテ第二ノ點即チ人々各々其ノ欲スル所ノ宗教ニ入
ルハ全ク各人ノ自由ニシテ國家ハ決シテ之レヲ強制ス
ルト能ハス

故ニ又此ノ理ニ從ヒ如何ナル教派ト雖モ強迫又ハ詭計ヲ以テ他人ヲ
其ノ宗派ニ加入セシムルヲ得ス(千八百十八年バイエルン宗教令第
八節 澳國千八百六十八年法律第七條參照)

宗教上ノ強迫ハ又間絶ト雖モ之レヲ用ユルヲ得ス設令ヘハ變宗シ
タル者ハ危害ノ將サニ其ノ身ニ及ハンヲヲ説キテ以テ其ノ變宗ヲ威
赫スルカ如キ行爲ヲナスヘカラス(バイエルン氏同上第十一節 澳國同
上第五條 普國千八百四十七年三月卅日官令參照)

尙ホ信仰ノ自由ニ關スル細規ハ左ノ如シ
何人ト雖モ辨別齡ニ達シタル者ハ其ノ信仰ノ宗旨ヲ撰
定スルハ全ク自由ナリトス

辨別齡ハ法律上種々ニ之レヲ定メ十四歳ヨリ丁年迄ノ間ニ位ス(バ
テン幼兒ノ宗教ニ關スル千八百六十年十月九日ノ法律第五節 澳國千
八百六十八年法律第四條)サクセン身分登記ニ關スル千八百七十年ノ

法律第二十節バイエルン千八百十八年宗教令第五節ヨリ第七節迄普
國千八百四十七年三月卅日ノ官令參照)

變宗シタル片ハ其ノ本籍アル地ノ法廷ニ於キテ自ラ其
ノ旨ヲ公述セサルヘカラス否ラスンハ法律上之レヲ變
宗シタル者ト認メス又新ニ加入シタル宗派ノ管長ノ前
ニ於テモ其ノ新宗ニ變シタル旨ヲ公言セサルヘカラス

(澳國同上第六條サクセン同上第二十節普國同上第十七節)

千八百十八年バイエルン宗教令第十條ハ教會ヲ變シタル者ハ新ニ撰
ミタル教會ノ管長并ニ脱出シタル舊教會管長ノ面前ニ於キテ自ラ其
ノ旨ヲ陳述スヘキ事ヲ定メタリ

幼兒ノ宗旨ヲ撰定スルハ一般ニ之レヲ論スレハ父タリ
母タリ兩親中幼兒ノ教育權ヲ有スル者ニ屬スルヲ常ト
ス然レモ斯カル定規ニシテ更ニ存セサル場合ニハ正統

ノ子ハ父ノ宗旨ニ從ヒ私生ノ子ハ母ノ宗旨ニ從フヘキ
モノトス若シ又幼兒ニシテ他ニ一定シタル宗旨ナク且
ツ兩親已ニアラサル場合ニハ後見人タル者官衙ノ承諾
ヲ得テ之レヲ決ス

(幼兒ノ宗旨ヲ撰定スルノ權ヲ以テ教育權ニ屬スル場合ハハーデン千
八百六十年十月九日ノ法律第五節ハンブルヒ異宗者ノ結婚ニ關スル
千八百五十一年十月廿四日ノ法律第六節サクセン千八百七十年六月
二十日ノ法律第二十節ヲ參照スヘシ)

○正統ノ子私生ノ子ヲ以テ區別スルハ父母其ノ宗旨ヲ異ニスル場合
ニ於キテ實際ノ適用ヲ見ルヘシ如何トナレハ父母若シ同一ノ宗旨ヲ
奉スル片ハ其ノ子ニシテ兩親ノ宗旨ニ從フヘキハ當然ナレハナリ(パ
ーデン同上第一節澳國同上第一條バイエルン千八百十八年宗教令第
十二節普國千八百〇三年ノ布告○又澳國及バイエルンニ於キテハ男

子ハ父ノ宗旨ニ從ヒ女子ハ母ノ宗旨ニ從フヘキモノト定メタリ
○(後見人ノ決定スル場合ハバーデン同上第二節バイエルン同上第二十二節參照)

又々此ノ場合ニ於キテハ實際幼兒ノ生存スル地方住民多數ノ宗旨ニ從フヲ常トス(シルベルナル氏著バイエルン教會憲法及行政法參照)
契約ヲ以テ幼兒ノ宗教々育ヲ定メタル場合ニハ契約法ノ原理ニ從ヒ何時タリトモ兩親ノ承諾ヲ以テ之レヲ變更スルトヲ得ル然レモ一方ノ者之レヲ承諾セサル片ハ此ノ限ニアラストス

初メ父母各々其ノ宗教ヲ異ニシタルモ父其ノ宗旨ヲ變シテ父母同一ノ宗旨ヲ奉スルニ至ル片ハ其ノ子ニシテ未ダ宗旨確認ノ式ヲ了ヘタルニアラサレハ其ノ子ハ兩親ノ宗旨ニ從フ(バイエルン同上第十八節、ワルテル氏著教會法第二百七十七節、リヒテル氏教會法第二百五十八

節參照)

幼者ノ親族并ニ其ノ教會管長ハ幼兒ノ宗教々育ニ關スル事項ニ就キテハ其ノ能ク法律ニ適合シ又ハ契約ノ條項ニ背カサルヤ否ヲ監察スルノ權利ヲ有シ且ツ爲メニ紛議ヲ生スルトアラハ之レヲ整理スル爲メニハ官衙ノ助力ヲ請フトヲ得ル

(バイエルン同上第二十三節、澳國同上第三條參照スヘシ)

第四十節 思想ノ自由(第二)

第二、人々各々其ノ奉スル所ノ宗旨ニ從ヒ教會加入并教會新設ノ自由ハ思想自由中ノ一ニシテ一般ニ之レヲ言ヘハ更ニ認可ヲ要スヘキ者ニアラスト雖モ寧口之レヲ嘯昔ニ於ケル君主ノ宗教革命權ヲ廢止シ且ツ憲法集會條例若クハ其ノ他ノ法律ヲ以テ教會設立ノ自由權ヲ固

定シタル者ト言フヘシ

(普國教會新設ニ關スル千八百四十七年三月三十日ノ特令同千八百四十八年ノ憲法第十一條同千八百五十年ノ憲法第十二條及三十條バーデン千八百六十年十月九日ノ教會法第三節澳國千八百六十七年十二月廿一日ノ國憲第十四條ヨリ第十六條迄參照)

バイエルンニ於キテハ新設ニ係ル教會ニ在リテハ其ノ組織及祭祀ニ至リテハ特別ノ驗査ヲ要スヘキモノトセリ(千八百十八年ノ憲法第二附則第二十六條第二十七條參照)

然レ此等ノ自由權ハ左ノ數則ニ從ハサルヘカラス
第一、教會ノ組織及宗旨ノ信仰ハ國法及ヒ已ニ社會中ニ認了セラレタル道德ノ原理ニ反對スヘカラス
凡ソ教會ナル者ハ其ノ信徒ニ諭スニ眞神ヲ尊敬シ法律ニ服從シ國家ニ忠節ヲ盡シ同胞人民ニ情切ナルヘキ事ヲ以テスヘキハ其ノ一義務

タリ(バーデン同上第三節澳國同上第十六條及ヒ身分簿冊等ノ登記ニ關スル千八百七十一年サクセン法律)

第二、凡百ノ諸教會ハ必スシモ同等ノ權利ヲ有スル者ニアラス其ノ沿革上ノ事實ヨリ左ノ數種ノ差等ヲ生ス

凡百ノ教會ハ必スシモ同等ノ權利ヲ有スヘキモノニアラサレハ現ニ千八百四十九年獨逸國憲第五條ハ此ノ理ニ反對セリ曰ク各教會ハ各々自立シテ其ノ事務ヲ掌理シ只タ一般ノ國法ニ服從スヘキ義務アルノミ故ニ何レノ教會ト雖ヒ他ノ教會ニ超過セル特權ヲ有セス又國教ナル者ナシ故ニ教會ノ新設ハ全ク自由ニシテ更ニ國家ノ認可ヲ要セスト

澳國千八百六十七年十二月廿一日ノ一般ノ國民タル權利ニ關スル國憲第十五條及第十六條ハ教會ヲ分ツテ二種トナシ一ヲ法律上ニ認了シタル教會トシ一ヲ法律上ニ認了セサル教會トセリ而シテ此ノ第二

ノ教會會員ハ法律及ヒ道徳ニ反セサル以上ハ只々家中ニ於キテノミ
祭祀ヲ舉行スルヲ得ルノミ

バイエルンニ於キテモ亦教會ヲ分ツテ公私ノ二種トナシ(宗教令第三
十二節及三十八節)千八百六十年十月九日バーデン教會法第二節ハ尙
更ニ細密ニシテ保護ヲ與フル教會ト束縛ヲ解キタル教會トノ區別ヲ
爲セリ

(甲)基督教即チ新舊兩教ニ屬スル教會ニ限リ特ニ獨立シ
タル公會タルノ權(即チ無形ノ一個人タル資格)及ヒ祭祀ヲ公行スルノ
權ヲ有ス是レ基督教會カ古來ノ沿革及ヒ條約ニ基キテ
得タル特權ナリ

(普國千八百四十七年三月卅日ノ特令同千八百五十年ノ憲法第十五條
バイエルン宗教令第二十八節)澳國千八百六十七年十二月廿一日國憲
第十五條參照)

故ニ基督教會ハ其ノ本性單ニ一個ノ集會ニアラサルカ故ニ集會自由
權ノ原則ヲ以テ之レニ適用スヘカラス(リヒテル氏著教會論第九十九
節及ツェーブル氏著獨逸國法論第二卷第五百二十八節參照)

(乙)特別ナル法律上ノ資格ナキ宗教ノ結社ニハ集會條例
ヲ適用シ得ヘシ

(普國同上憲法第十二、三十八、三十一條)バイエルン同上三十二節)バー
デン千八百六十年十月九日教會法第三節參照)

(丙)私立ノ教會即チ保護ヲ與フル教會若クハ束縛ヲ解カ
レタル教會ニ屬スル特權ハ特別ノ許可ヲ得ルニアラサ
レハ之レヲ行フヲ得ス

(普國同上特令バーデン同上教會法第二節)バイエルン同上第三十二節
及第三十七節參照)

此ノ種ニ屬スル教會ニシテ其ノ教法宗旨ノ特ニ「ウエストファリヤノ平和」

ニ由リテ認了シタル基督教會ト符合シ且ツ教會中ニ事務所ヲ設ケタル者ハ所謂教會管領權ナル者ヲ得ルカ故ニ祭祀ヲ掌リ宗教々育ニ任スル僧正ハ公ケノ官吏タル尊敬權利ヲ受ケ洗禮結婚葬儀等々ノ身分ヲ定ムルニ必要ナル簿冊登記ノ事務ヲ執ルノ特權ヲ有ス蓋シ此等ノ事務ハ法律ニ由リ教會事務所ニ屬スル者ニシテ法律上ノ効力ヲ有ス且ツ又此ノ種ニ屬スル教會ハ尙他ニ多少ノ特權ヲ有ス設令ヘハ祭祀ニ供スル堂宇ハ一般公ケノ建物ト同様ナル保護ヲ受ケ其ノ所有權ハ國家之レニ特別ノ保護ヲ與フルカ如シ普國同上特令バイエルン宗教令第二十九節參照

然レ^(乙)ノ場合即チ宗教ノ結社ニ適用スルニ集會條例ヲ以テスルニハ最モ注意スヘキ者ニアリ^(第一)宗教上ノ結社ハ政治ニ關スル集會ト同視スヘキモノニアラサルカ故ニ政治上ノ集會ニ關スル制限ノ規則ヲ適用スヘカ

ラス^(第二)此種ノ結社ニ素リ會社タルノ資格ナシト雖モ只タ一般若クハ特別ノ法律ニ由リテ之レヲ許可シ得ヘシ
又教會ノ創設組織ハ一般國家ノ認了ヲ要ス

^(バイエルン)宗教令第七十六節^(バーデン)同上教會法第十一節^(普國)同上憲法第十三條^(澳國)千八百六十七年十一月十五日ノ集會條例第三節^(ルンチー)氏著國法汎論第二卷及^(リヨネ)氏著普國々法論參照

第四十一節 思想ノ自由^(第三)

第三、禮拜ノ自由 思想ノ自由中第三種ハ禮拜ノ自由トス蓋シ人々ノ信仰ハ必然他人トノ間ニ於ケル交際ノ關係ヲ發生シ各人宗旨ノ執行ハ自然社會上ノ形狀制度ノ外面ニ顯ハルヘキモノトス

^(リヨネ)氏著普國々法論第一卷參照

嘯昔ノ法律ニ於キテハ第一公ケノ祭祀ヲ行ヒ又ハ之レヲ行ハサル家中ノ禮拜及ヒ第二家中ノ禮拜ニ止マラスシテ社會一般ニ舉行スル祭祀トノ區別ヲ爲シ而シテ此ノ第二ノ種類ニ屬スル權利ハ尙ホ多少之レヲ特別ナル法律ニヨリテ支配セリ

(リヒテル氏著教會法第九十八節參照)

然レ此此ノ二種ノ區別ハ古代邦土ノ制ニ胎孕シ當時國家ノ元首カ其ノ臣民ノ宗旨禮拜ニ關スル事項ニ於キテモ亦主權者タル權利ヲ得ントニ汲々タリシ情勢ニ出テタル者ニシテ此ノ制度ノ廢滅及ヒ宗教自由ノ原理ノ發達以來法律上ニ認了スヘキ原則タルトナキニ至レリ

○嘯昔ノ法律ニ於キテ此等ノ事項ハ澳國國憲第十五條及第十六條ヲ參照スヘシ(千八百六十七年十二月廿一日)而シテ今マ此ノ條ノ大意ヲ

言ハ、公共ノ祭祀ハ國家ノ認可及ヒ其ノ宗旨ニシテ法律上之レヲ認了セラレタル者タルトヲ要ス故ニ法律上未タ認了セラレサル教會ハ集會條例ヲ以テ之レニ適用スヘキモノトセリ

又サクセンニ於キテハ祭祀ヲ舉行スル集會結社ハ教務及ヒ文部卿ヨリ其ノ認可ヲ與ヘ而シテ此ノ認可ハ其ノ宗教ノ原理及ヒ法則ニシテ眞神ヲ敬シ法律ヲ遵奉シ且ツ一般道徳ニ適合スルモノニアラサレハ之レヲ與フヘキモノニアラストセリ(千八百七十年六月廿日ノ身分簿冊登記ニ關スル法律第二十一條參照)

○宗教自由ニ關スル法律ハ千八百四十七年三月三十日普國ノ特令及千八百五十年同國憲法第十二條ヨリ第十九條迄參照

千八百四十八年ノ獨逸憲法ハ已ニ認了セラレタル基督教又ハ後來認了セラルヘキ教會ニ屬スル祭祀舉行ノ權利ヲ保護セリ但シ思想ノ自由ニ關シテハ只家中ニ於ケル單一ノ禮拜ノミヲ許シタリ

故ニ宗教ノ如何ヲ問ハス其ノ信徒ハ各々禮拜祭祀ノ自由ヲ有スヘキモノトス
然レモ禮拜ノ自由ニ關シテハ尙ホ左ノ數項ニ注意セサルヘカラス

(甲)凡百ノ教會祭祀ハ公安道德等ニ關シテハ一般官衙ノ管督ヲ受ク

(澳國千八百六十七年十二月廿一日ノ國憲第十六條パーテン千八百六十年十月九日ノ法律第三條普國千八百五十年ノ憲法第十二條及ヒ第三十條參照)

(乙)自由權ノ執行ヨリ生スル犯罪ハ一般國法ヲ以テ之レヲ所罰ス

(普國同上同條及ヒツェーブル氏著獨逸國法論第二卷參照)

(丙)宗教上ノ集會結社ト雖モ其ノ政治ニ關スル事項ヲ論

及スル者ハ政治ニ屬スル法律規則ニ服從セサルヘカラス

(リヨンキー氏著普國々法論第三卷參照)

(丁)祭祀公行ノ權中ニハ宗教ニ屬スル公會タルノ權ヲ包有スルナシ(第四十節參看)

(ペーツル氏著バイエルン憲法論第四卷參照)

(戊)公認セラレタル教會ノ祭祀禮拜ハ特別ナル國家ノ保護ヲ受ケ且ツ此等ノ祭祀ニ關スル制度(設令ヘハ休日祭日等)ハ其ノ原理ニ於キテ一般思想ノ自由ヲ妨害スルナカルヘシ

バイエルン千八百十八年宗教令第二十九條及第三十條同千八百五十年憲法第十四節參照)

又國家元首タル者ハ祝意ヲ以テ教會事務所ニ命スルニ公ケノ祈禱及

感謝祭ノ舉行ヲ以テスルヲ得ル千八百十八年バイエルン宗教令第五十五條參照)

第四十二節 國法ニ服従スヘキ事

凡ソ宗教ハ社會法ノ原理ニ基キタル國法ニ服従セサルヘカラス是レ宗教自由ニ關スル第二ノ原則ナリ而シテ此ノ原則ハ二様ノ關係ヲ有ス即チ

(第一)宗旨及其ノ執行ヨリ他人ヲ妨害スル丁アルヘカラストスル各人各個ノ一國民タル義務

(第二)諸教會自身并ニ凡テ結社及特別ナル集會モ亦國家ノ立法及ヒ司法ニ服従スル事

普國千八百五十年ノ憲法第十二條バイエルン千八百十八年ノ憲法第四篇バーテン千八百六十年十月九日ノ教會法第三及十三條澳國千八百六十七年十二月廿一日一般國民タルノ權利義務ニ關スル國憲第十

四條及第十五條參照)

民生社會ニ關係ナキ事務ニ於ケテハ教會ハ全ク獨立ノ位地ヲ占ム故ニ教會管長及教會々員ハ其ノ私法上ニ於ケル關係設令ヘハ契約遺囑相續法等ニ於ケテハ一般法律ノ條規ニ由ル(ワルテル氏著教會法第四十三節參照)

右二者タル共ニ必要ノ條件タリ如何トナレハ宗教ノ事項ニ關スル社會上ノ自由權ハ只々各人各個カ一般人類發達ノ社會及國家ニ對シテ負擔スル義務ト相待ツテ初メテ之レヲ執行シ得ヘキ者ナレハナリ而シテ宗教ノ斯ク國法ニ服従スヘキ事ハ法律ノ臣民ニ命スルニ其ノ義務ノ執行ヲ以テスル場合(兵役、租稅、出庭、宣誓ノ義務等)并ニ國家カ公安道德及ヒ法律ヲ保護スルカ爲メニ設クル禁制條規ヲ遵奉スルノ場合トヲ包括ス

(リヨンネー氏著普國々法論第一卷參照)

然レモ若シ國家ニシテ信徒ノ信仰ノ方向ヲ指揮シ又ハ信徒ヲシテ全ク其ノ思想ニ反對スル義務ヲ負擔セシムルカ如キ事アラハ宗教自由ノ權利ハ有名無實ニ歸スルニ至ルヘシ故ニカ、ル場合ニ於キテハ單ニ膠柱ノ見ニ據リ法律上萬民ヲ以テ同等ナリトスル原則ヲ固守スルハ決シテ國家ノ義務ニアラス故ニ其ノ實際ニ之レヲ舉行シ得ヘキ限りハ宜シク公正義ト國家ノ利益トヲ満足スヘキ他ノ方法ヲ用ヒテ平等ヲ保持スルトヲ務メサルヘカラス設令ヘハ代務兵役寛恕又ハ政教二者ノ間ニ存スル細密ノ區劃ヲ爲スヘキ立法ノ改良等ノ方法ニ據ルカ如シ

○代務兵役ヲ許スノ場合ハ設令ヘハ普國ニ於キテハ「メン」ニツト宗

ノ信徒ハ自ラ兵役ニ服スルヲ望マサル者ハ代人料ヲ上納セシムテ兵役ノ義務ヲ免シタルノ類ナリ然レモ千八百六十七年十一月九日ノ聯邦法律第一節ニ由リ國家保護ノ義務ハ國民一般之レヲ負擔スヘキ者トナシ「メン」ニツト「宗」并ニ「ク」エ「イ」カ「宗」ノ信徒ニ屬スル特權ヲ廢止セリ

○寛恕ノ方法ニヨリタル場合ハ「ハ」ノ「ブル」ニ於キテハ千八百五十六年十月十六日ノ法律ヲ以テ「メン」ニツト「宗」并ニ「ス」ラ「ヒ」ア「ン」ス「宗」ニ屬スル信徒ハ法庭ニ於キテ宣誓ヲ爲サシムルノ義務ヲ寛恕シ之レニ換ニルニ確認ノ方法ヲ以テセルカ如キ又サクセンニ於キテハ身分證書等ニ關スル千八百七十一年一月二十日ノ法律第二十一節ヲ以テ「ディ」シ「デ」ント「宗」ノ信徒カ宣誓式ヲ定メタルカ如キ是レナリ

○法律改良ノ場合ハ「バイ」エ「ル」ン「ハ」千八百十八年ノ憲法同年宗教令第五十、六十二、七十六節ノ如キ「澳」國「ハ」千八百六十一年基督新教法第五節

ノ如キ是レナリ

教會事務ニ任スル役員ハ其ノ執ル所ノ事項ニシテ信仰又ハ教會ノ規律ニ出テ全ク現世ニ關スル性質ヲ帶ヒサル者ハ國家ト獨立シテ分離スヘキ者ナレモ若シ宗教ニ關係ナキ現世ノ事項ニ係ル者ハ國家ノ立法及管督ニ服シ國權ノ指揮スル所ニ從ハサルヘカラス

宗教ニ任スル役員管長等ハ其ノ教會事務ヲ執行スル地ノ警察規則及刑法ニ服從セサルヘカラス而シテ往々此等ノ事項ニ關シテ特別ナル法律ヲ設クルノ場合ナキニアラヌ(バーデン千八百六十年十月九日ノ法律參照)

就中右役員ニシテ其ノ職務ニ係レル説教、文書ヲ以テ國法ヲ誹毀シ又ハ宗教事務ノ權限外ニ於ケル處斷ヲ爲シタル如キアラハ國法ヲ以テ宜シク之レヲ罰スヘキモノ

トス

(バーデン千八百六十年十月九日ノ法律バイエルン千八百十八年宗教令第五十七節參照)

第四十三節 同上

教會ハ國家ノ立法及管督ニ服從セサルヘカラサルノ原理ヨリシテ國家ハ(第一)宗教諸派ノ間正當ノ關係ヲ維持シ就中其ノ平和靜寧ヲ保存セシムルヲ監督スルノ權(第二)教會管長ノ不當ナル請求及束縛ナカラシメンカ爲メニ各臣民ヲ保護スルノ權ヲ有ス

(バイエルン千八百十八年五月廿五日ノ宗教令第八十節參照)

而シテ此等ノ事項ニ關シテハ主トシテ左ノ數則ニ注意スルヲ要ス

(第一)教會員ハ何人ト雖モ他ノ教會ニ屬スル信徒ヲシテ

禮拜ヲ爲サシメ又ハ教會ノ保護ヲ受ケシムルヲ得ス
但シ此ノ權利ヲ有スル人若クハ適當ナル他教會管長ノ
請求アル場合ハ此ノ限リニアラス

(バイエルン千八百十八年五月廿六日宗教令第八十二、八十五、八十七、八十九及百〇二節 澳國千八百六十八年五月廿五日ノ法律第八條參照)

(第二)何人ト雖モ他ノ教會ノ公祭若クハ恩惠ノ目的ヲ以テ金錢物品勞役事業ヲ寄附スルノ義務アルトナシ但シ特別ノ權利若クハ法律上確タル請求權アルモノハ此ノ限リニアラス

(澳國同上第九條及千八百六十一年基督新教法第十三節參照)

(第三)何レノ教會管長ト雖モ税金又ハ手数料ヲ徵收スルノ權利ナシ但シ他人ノ請求ニ由リテ實行シタル業務ニ對スル報酬ハ法律ノ條規ニ從ヒ之レヲ受クルノ權アリ

(澳國千八百六十一年基督新教法第十三節バイエルン千八百十八年宗教令第八十六節參照)

此ノ條ハ學校維持ノ目的ニ出テタル出金ニモ亦之レヲ適用スルヲ得ル但シ相異リタル數種ノ教會ニ屬スル信徒ニシテ法律ニ由リテ一個ノ學區ヲ成サシメタルノ場合ト雖モ他ノ宗旨ニ屬スル學校ニ在リテハ強迫干涉ヲ爲スコトヲ得ス(澳國千八百六十八年ノ法律第十條參照)

(第四)休日祭日ヲ守ラシムルカ爲メニハ決シテ之レヲ強迫スルコトアルヘカラス就中此等ノ日ニ於キテ業務ヲ營ムカ如キハ敢テ禁制スヘカラス然レモ祭祀ヲ舉行スル寺院ノ近傍ニ於キテハ此祭祀ノ妨害トナルヘキ行爲ヲナスヘカラス其ノ祭祀ノ行列市街若クハ廣場ヲ通行スル場合ニ於キテモ亦然リ

(澳國千八百六十八年ノ教法第十三條第十四條バイエルン千八百十八

年宗教令第八十一節及第八十二節同千八百六十二年七月三十日日曜
日及祭日ニ關スル布達

日曜及休日ノ祭祀ヲ妨害シタル者ハ刑法ヲ以テ之レヲ罰ス(千八百七
十年刑法第三百六十六節バイエルン千八百六十一年違警罪法第百〇
五百〇六條バーテン千八百六十三年同上第六十九節參照)

(第五)凡ソ教會ハ其ノ教會ニ屬セサル信徒ノ死體ト雖モ
左ノ場合ニ於キテハ其ノ墓地内ニ適當ノ埋葬ヲ拒ムト
ヲ得ス

(甲)家族ノ墓地内ニ埋葬セントスル者アル片ハ其ノ墓地
ヲ管轄スル教會ハ之レヲ拒ムトヲ得ス

(乙)地方管轄内ニ於キテ別ニ死者ヲ埋葬スヘキ相當ノ墓
地ナキ片ハ死去ノ場所若クハ死體ヲ發見シタル場所ノ
教會ハ其ノ埋葬ヲ拒ムトヲ得ス

(ウエストフリア平和條款第五條バイエルン千八百十八年ノ宗教令第百
條ヨリ百〇三條迄同千八百六十二年十二月五日ノ指令澳國千八百六
十八年教法第十二條普國千八百四十五年六月二十七日布達バーテン
千八百三十八年十一月六日ノ布達同千八百〇八年四月廿六日建築條
例同千八百六十三年違警罪法第九十六節バイエルン千八百六十一年
同上第百十節ワルテル氏著教會法第三百二十六節リヒテル氏著同上
第二百九十一節參照)

(第六)他ノ教會ニ屬スル信徒ハ教會之レヲ強迫シ又ハ術
計ヲ用ヒテ變宗セシムルトヲ得ス

(澳國同上第七條參照)

(第七)教會々員タル者ハ各々其ノ教會ノ教法ニ從ハサル
ヘカラスト雖モ教會ハ決シテ之レヲシテ強テ儀式ヲ履
行セシメ又ハ其ノ信仰ヲ強迫スルト能ハス然レモ若シ

會員ニシテ公然ノ行爲ヲ以テ禮拜祭祀ヲ誹毀シ又ハ他人ヲ妨害スルトアラハ教會ハ之レニ參會出席ヲ禁スルトヲ得ル

(千八百四十九年獨逸國憲第五條千八百十八年バイエルン宗教令第四十節參照)

(第八)教會ニシテ法律ノ定規ニ背キ各會員ヲ妨害スル片行爲若クハ處分ヲ爲シタル片ハ此ノ會員ハ國家ノ保護ヲ請求スルノ權ヲ有ス

バイエルン同上第五十二節同千八百五十二年四月八日ノ布達ツェブル氏著獨逸國法第二卷第五百三十六節ベーツル氏著バイエルン憲法第九十六節リヒテル氏著教會法第百〇一節ブルンテリ―氏著國法汎論第二卷第九款參照)

(第九)教會ノ規則ハ國法若クハ時々國家ノ許可ヲ得タル

者ニアラサレハ各人各個カ民事及ヒ政治上ニ於ケル事項ト關係スル所ナシトス故ニ自由刑及財産刑ヲ施シ得ヘキ規則ハ其ノ公布ト同時ニ國權ニヨリテ之レヲ許容シタル者ニ限ル之レニ反シテ全ク宗教ノ性質ヲ帶ヒ官衙ノ認許ヲ要セサル宗教上ノ懲罰(設令ヘハ懺悔破門宣罰等)ハ國家決シテ之レニ干涉スルノ理由アルヘカラス
(バイエルン同上宗教令第三十八節パーテン千八百六十年十月九日教會法第十五條及第十六條澳國千八百六十一年基督新教法第十節等參照)

第四十四節 宗旨ノ異同ヲ問ハス法律上萬民同等ノ權ヲ有スル事

宗教自由ノ第三點ハ宗旨ノ異同ヲ問ハス法律上萬民ヲ以テ同等ナリトスルニ在リ然レ此ノ原則ハ實ニ近世

社會法律ノ制度ニ發生シタル者ニシテ夫ノウエストフリヤノ平和條款ノ時代ニ於キテハ新舊兩派ノ基督教ハ法律上同等ナリトシタレ只々王國全體ノ資格ニ關スル者ノミニ止マリ其ノ各地方ニ關スル者ニ在リテハ千六百二十四年ノ制規ニ從ヒ各君主ハ所謂革命權ナル者ヲ有シテ單ニ其ノ認許シタル宗派ニ許スニ幾分ノ權利ヲ以テシタルニ過キス而シテ千八百〇三年二月二十五日王國會議ノ議決ヲ以テ新ニ得有シタル邦土ニ於キテハ尚ホ他ノ宗派ヲ認了スルノ權ヲ以テ各君主ニ與ヘ且ツ此等ノ宗派ニ屬スル信徒ニ民權ヲ得有シ得ヘキ權ヲ附與セリ降ツテライン聯合ノ時ニ及ンテ彼ノウエストフリヤ平和條款ニ棄却シタル事項中其ノ基督教ニ關スル者ハ盡ク之レヲ改良セルヨリ先ツ獨逸ニ於キテハ千八百

十五年ノ聯邦法律第十六條ニヨリ此ノ理ヲ實行シテ曰ク基督教派ノ異同ハ獨逸聯邦國內ニ於キテハ民權及ヒ政權ノ得有如何ニ毫末ノ關係ヲ有スルナシト

(此等沿革ノ事跡ハリヒテル氏著教會法及ツェーブル氏著獨逸國法論ニ詳述ス)

然レ此ノ聯邦法律ハ舊教(カトリキ)新教(ルーテル派及革命派)ノ三種ノ認了セラレタル基督教派ニ關スルノミニシテ萬民同等權ノ原理ハ未タ其ノ他ノ基督教派及ヒ基督教ニアラサル宗旨ニ及ハス而シテ斯カル狹隘ナル萬民同等權ノ原理ハ聯邦議會ニ於キテモ大ニ其ノ勢力ヲ占メ現ニ千八百四十八年以前ニ成リタル各邦ノ法律ニ確認セリ

(千八百十八年バイエルン憲法第四款パーデン同年同上第九節千八百

三十一年サクセン憲法第三十三節其ノ他ウルテンブルヒ、ヘツセン等ノ法律モ亦同シ）
 千八百四十八年後ハ諸邦憲法若クハ特別ノ條例ヲ以テ萬民同等ノ原理ヲ基督教派ハ勿論其他ノ宗教就中猶太教徒ニ及ホセリ

（普國千八百四十七年七月二十三日ノ法律バイエルン千八百五十一年六月廿九日ノ法律バーデン千八百四十九年二月十七日ノ法律フランクフルト千八百五十三年九月十二日ノ法律ハノーブル千八百四十二年九月三十日ノ法律等ハ皆ナ猶太教徒ニ關スル事項ヲ定メタリ而シテ其ノ他尙一般ノ教派ニ關スル者ハ千八百五十年ノ普國憲法第十二條ハノーブル千八百四十八年九月五日ノ法律第六條オルデンブルヒ千八百五十二年ノ憲法第三十三條等ヲ參照スヘシ）
 近世ニ至リテハ宗旨ノ異同ニ基キタル民權（社會權）政權

ニ關スル制限ヲ漸減シ特ニ邑會縣會ノ撰舉權及ヒ官吏タルノ權ニ在リテハ更ニ宗派ノ區別ヲ論セサルモノトセリ

獨逸憲法第五條第百四十六節ニ曰ク民權及ヒ政權ハ宗派ノ異同ニ關シ又ハ之レニ制限セラルヘキモノニアラスト（其ノ他千八百六十九年七月三日ノ聯邦法律千八百六十一年澳國新教法第十七條同千八百六十七年十二月二十一日ノ國憲等參照）

其ノ他此ノ原理ハ特別ノ法律ヲ以テ移住自由ノ權、不動產所有權、營業組合ノ自由權ニ關スル重要ノ事項ニモ亦之レヲ適用スルニ至レリ是レ啻ニ沿革上ノ事跡ニ出テタル必要ナルノミナラス宗派ノ區別ヲ論セス萬民ヲ以テ同等ナリトスル丁ハ其嘗テ基督教旨ニ危害ヲ及ホスヘキモノヲ見サルナリ

千八百六十七年十一月一日聯邦法律第一條千八百六十九年六月二十一日ノ營業規則第一條千八百六十八年一月卅日バイエルン營業條例第一條參照

第四章 結婚

第四十五節 結婚ノ本性

婚姻ハ成年ニ達シタル男女ノ永遠ニシテ且ツ分離スヘカラサル結合ニシテ敢テ一定シタル特種ノ目的ヲ有スル者ニアラス只タ天然及道德上ノ原理ニ依リ共同生活ヲ基トスル完全ナル婚姻ノ性質ト抵觸セサル以上ハ凡テ配偶者ノ生活目的ニ從フヘキモノトス

(按特種ノ目的トハ或ハ人口繁殖子孫永續等ヲ以テ婚姻ノ目的トスルヲ云フ然レモ現ニ老年者ノ如キ此ノ目的ヲ達スルヲ能ハサル者ト

雖尙其ノ結婚ヲ許スヲ以テ見レハ斯カル目的ナキハ明カナリ而シテ古來婚姻ノ何物タルニ付キテハ議論頗ル數多ニシテ其ノ定義モ亦一様ナラストス或ハ婚姻ヲ以テ生活ノ共同及ヒ神聖ノ權利人爲ノ權利ヲ併セテ之レヲ一体ニ合同スル男女ノ結合トスルモテヌチニユス氏(羅馬法)ダイゼスト(第二十三節第二章)ノ如キアリ或ハシセロタシタス(ゼルマニカノ書)ノ如キ各々種々ノ定義ヲ下シ或ハカント氏ノ如キハ婚姻ハ終身男女兩性ノ性情ヲ保有スル爲メニセル男女ノ結合ナリト云ヘリ(同氏著心理法學第一卷尙ホフリーデルベルヒ氏ノ結婚法第百五十三葉ケンクレル氏獨逸私法論第八百〇七葉佛人レルミニエー氏法理論第六十六葉同ブラドリ―フオデレー氏法律原論第百十六葉ヲ參照スヘシ)

結婚ハ素リ單純ナル天然ノ事項ニシテ其ノ淵源タル畜ニ人類男女ノ間ニ於ケル器械的ノ關係中ニ存スルノミ

ナラス各人各個ノ爲メニハ之レヲ必須欠クヘカラサル要件ナリト云フヘシ(按)以上私法上ヨリセル論點然レモ結婚ハ人類共同ノ性質ヲ帶ヒ從ツテ又相愛ノ情ヨリシテ變遷進化ノ勢力ニ依リ配偶者ノ精神及道德上ノ性狀ニ影響ヲ及ホスヘキモノナルカ故ニ之レヲ單ニ人類天然上ノ區域及ヒ各人一個ノ私意ノミニ止マルヘキ事項ト爲スヘカラス(按)社會法上ノ論點ヨリス

結婚ヲ以テ單ニ契約ナリトスルカ如キハ甚シキ誤謬ナリ特ニ前世紀ニ於キテハ此ノ說最モ盛ナリキ(ゲングレル氏著獨逸私法書第二卷八百十二葉サヒニ一氏及ヒヘーゲル氏著結婚法及ヒ沿革法理家學ノ學國結婚法改革上ニ於ケル勢力論第十七葉ヨリ第二十四葉迄參看)
(按)結婚ノ沿革ヲ考フレハ上古ニ於ケル同種族共婚ノ法ヨリ奪掠賣買贈與ニ及ヒ男女承諾ノ結婚ニ至リテ始メテ真正ノ結婚タルノ本性ヲ

有スルヲ得タリ故ニ現ニ佛國民法ニ於キテモ結婚ヲ以テ契約ナリトスレモ本文ニ述ヘタル如ク結婚ハ決シテ契約ナルニアラス故ニ又儘ク之レヲ民法中ニ論スヘキモノニアラストス凡テ結婚ハ男女ノ承諾ヲ要スルハ勿論ナレモ承諾ハ結婚ニ必要ナル一條件ニシテ結婚自身ハ決シテ契約ナルニアラス若シ結婚ニシテ果シテ契約ナラハ結婚ニ關スル一切ノ事項ハ凡テ契約ノ原理ヲ以テ之レヲ論シ私人相互ノ意ニ一任シテ自由ニ之レヲ結ヒ或ハ自由ニ之レヲ解除スル等ヲ許サ、ルヘカラス此等ノ議論ニ就キテハ極メテ重要ニシテ且ツ有益ナル精密ノ議論古來極メテ多シ其ノ英書ニ屬スル者ニ在リテハホワートン氏國際私法ニ論ス簡ニシテ盡セリ讀者就テ見ルヘシ又結婚ノ契約ナル者アレモ是レ本來契約ニアラサル結婚ヲ後日ニ取結ハントノ契約ニシテ結婚自身ヲ以テ契約ナリトセル者ニアラス

斯ク婚姻ハ各人各個并ニ人民全體ニ對シテ最モ重要ニ

シテ且ツ深遠ナル結果ヲ生スル者ナルカ故ニ之レヲ人々ノ生活ニ關スル事項中ノ重要ニシテ且ツ著大ナルモノト爲サ、ルヲ得ス今マ此等結婚共同ノ生活ヨリ生スル重要ノ結果ヲ舉クレハ左ノ如クナルヘシ

第一、人民中男女ノ間柄能ク常規ニ從ヒテ整序スル事

第二、健全ニシテ且ツ規律ニ從ヒタル人口繁殖ノ安全ナル事

第三、身體精神、道德ノ點就中其ノ職業及家事ニ關スル營生ノ點ニ於キテ配偶者相互ニ發達及ヒ保助スル事

第四、家族及ヒ親族ニ屬スル關係ノ基本及永續ノ安全ヲ致ス事

第五、一定シタル教育權及ヒ家内權ノ基立ツ事

第六、財産ノ所有ヲ永續シ及ヒ配偶者相互ノ死亡ノ時ヲ

思慮シテ財産ノ所有ヲ保全スル事

婚姻ハ右ニ掲ケタル如キ結果アルヲ以テ結婚ハ大ニ社會及ヒ國家ノ利益ナリ故ニ宗教上ノ偏見又ハ社會ノ原理ヲ誤解シタル意見等(設令ヘハ衣食ノ欠乏説)ヨリ自然結婚ヲ避止スルカ如キハ尤モ禁スヘキ事柄ナリトス

故ニ夫ノ人々可成丈結婚ヲ謹ムヘキモノトスルノ説ハ之レヲ宗教上ノ本據ヨリスルモ國家經濟上ノ論理ヨリスルモ又特ニ人口過多ノ杞憂ヲ基トスル説ヨリスルモ共ニ事實ニ適セサル誤謬ノ見タルヲ免レ

ス就中有名ナルマルサス氏人口説ノ如キハ誤謬中ノ甚シキ者タリ同氏著人口論(ブレイクレーン)オフボツテイヒニム氏著婚姻制限論第五條モール氏著警察學第一卷九十三葉スタイン氏著行政學及行政法必携第四百八十四葉ヲ參看スヘシ之レニ反シテマルサス氏ノ人口説ヲ駁撃スル諸説ハ米人ケレーン氏著社會學原理第三卷(ブレイクレーン)サイヤンスヲ參

照スヘシ又々進化ハ説ヲ取リタル國法上結婚ニ關スル諸説ハゲンゲ
レル氏著獨逸私法論第二卷ウンゲル氏著結婚進化ノ沿革論第百〇一
葉ミッテルマイエル氏獨逸私法論第二卷ヲ參照スヘシ

結婚ハ男女兩性ノ完全ナル共同生活ノ爲メニ必要ナル
形式ナルカ故ニ之レヲ各人自由ノ撰擇ニ一任スヘキ事
項ニアラス只タ之レヲ各人各個ノ生活ヨリ生スル必要
ノ結果ナリト云フヘキノミ

結婚ノ性質上ヨリシテ結婚ハ必ス規則ニ從ヒ公ケニ之
レヲ報告シ且ツ法律上確實ニシテ更ニ争フヘカラサル
明白ノ者タラサルヘカラサルノ必要ヲ生ス

結婚ハ公ケノ性質ヲ有スヘキモノタルノ原理及ヒ秘密ノ婚姻ヲ禁ス
ヘキモノトセルハ已ニカロリンゲルノ時代ニ於テ認了セリ(アイヒホ
ルン氏著獨逸法律沿革史第一卷及ヒゲンクレル氏同上參照)

故ニ結婚ハ之レヲ私法上ニ屬スル一事ト見做スイアル
ヘカラス宜シク之レヲ社會法上ヨリ論シテ人民全體ニ
關スル利害ニ及ハサルヘカラス要スルニ結婚ハ行政法
中ニ屬スヘキモノニシテ私法ハ只タ結婚ノ關係ヨリ生
シタル配偶者ノ各人各個ニ固有ナル事項及財産ヲ整理
スルニ過キス然レモ婚姻ノ宗教上ノ性質ニ關スル法則
ハ教會法之レヲ定メ且ツ婚姻ノ結了及ヒ離縁ニハ教會
長之レニ參與シテ人々ノ宗旨ニ關スル事項ヲ規定スル
モノトス

(アイヒホルン氏著獨逸法律沿革史第一卷ゲンクレル氏著獨逸私法第
二卷參照)

婚姻ハ斯ク法律上ノ形式ニ從ヒタル男女カ共同生活ニ
基ク者ナルカ故ニ適法ナル婚姻ニアラスシテ男女其ノ

生活ヲ同フスル者(即チ妾)ハ警察上之レヲ制シ且ツ之レヲ罰ス

(ウルテンブルヒ千八百三十九年違警罪法第四十六條
バイエルン千八百六十一年同上第九十三條
バーデン千八百六十三年同上第七十二節
參照)

第四十六節 結婚ノ自由

結婚ニ關スル近世ノ法律制度ハ結婚ノ本源ヲ以テ完全ナル人身ノ自由及平等權ノ原理ニ基ク者トセリ

結婚ハ素リ人類天然ノ刺衝ニ發生スル者ナリト雖モ結婚ノ自由權ヲ以テ天赋ノ人權中ニ計算スヘカラス蓋シ結婚ハ社會ノ事項ニ屬スル者ナルカ故ニ其ノ法律上ノ結果タル決シテ之レヲ單ニ各人各個ノ欲スル所ニ一任スヘキモノニアラサレハナリ故ニ空想ノ理論ハ暫ク之レヲ措キ所謂結婚ノ自由ナル者ハ一般共同ノ社會法律ノ制度ニ從フ

ヘキモノニシテ此ノ社會法律ノ思想ニ抵觸スル結婚ノ制限ハ決シテ之レヲ許容スヘキモノニアラス

故ニ結婚ノ自由ノ原理ハ左ノ如シ

第一、人身ノ自由ヲ束縛スヘキ制限ハ結婚上之レヲ廢止スル事

此種ノ束縛ニ屬スル者ハ臣民タル者結婚税金ヲ納メテ君主ヨリ結婚ノ權利ヲ買取り若クハ君主ノ承諾ヲ得ル事又地領主ノ權カヲ以テ其ノ配下ノ結婚ヲ強迫シ若クハ地主ノ意ヲ以テ其ノ結婚ノ契約ヲ爲ス等ノ事トス(モーレル氏借地法沿革史第三卷
ルンデー氏著獨逸私法論第五百四十四節
ツェーフル氏著獨逸法律沿革史第三百八十八葉
ダンツ氏著獨逸私法論第五百四十四節
ハーゲルマン氏著經濟法第百八十八葉參看)

第二、結婚ノ權利ヲ以テ都邑民タル權利ノ有無如何ニ關

セシメ又ハ都邑官廳ノ承諾ヲ要セシムルノ制度ヲ廢止スル事

(結婚上警察ノ制限ヲ廢シタル千八百六十八年五月四日ノ聯邦法律第一節警察署若クハ都邑ノ承諾ヲ必要トスル制ヲ廢止シタル千八百六十八年九月二十日ノ澳國法律結婚ノ制限ヲ弛メタル千八百七十年五月五日ノバーデン法律參照)

然レモ刑罰ニ處セラレ救貧院若クハ後見人ノ支配ニ屬シ又ハ出產地ノ都邑ニ盡スヘキ義務ヲ充タサ、ル者等ノ場合ニ於キテハ尙ホ都邑ハ此等ノ結婚ニ對シテ故障ヲ爲スノ權ヲ保有ス(千八百六十八年四月十六日バイエルン法律第三十六條ツタイヒュム氏著結婚制限法論第二十七葉スタイン氏著行政學及行政法必携第七十五葉參照)

第三、自由ノ結婚ヲ抑制スル成規即チ國家ノ警察權臣民ノ後見者タルノ意ヲ以テセル制限ヲ廢止スル事

千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第一條及ヒ第二條ニ依リ官衙カ婚姻ヲ許スルノ權利ハ一般ニ之レヲ廢止シ尙ホ特ニ左ノ條款ヲ定ム
日ク配偶者ノ老年ニ過キ又ハ定マリタル住所充分ナル財產若クハ職業ヲ欠キ又ハ懲罰ヲ蒙リタル事品行不良ナル事現在貧困若クハ後來貧困タルヘキ事等保護又ハ其ノ他警察上ノ事理設令ヘハ配偶者ノ幼少若クハ年齢ノ不相當又ハ遺傳病等ヲ以テ人民結婚ノ權利ヲ制限スルイナシト

然レモ陸海軍、武官、官吏、僧徒、教官等ニ關スル結婚上特別ナル制限ハ此ノ原理ヲ適用スヘキモノニアラストス(リヨンチー氏著學國々法論第二卷、モール氏著ウルテムブルヒ行政法第百六十二節ステューベンラウハ氏著澳國行政法第二卷、ベーツル氏著バイエルン憲法第三十節參照)
第四、結婚ノ本性ハ其ノ無形ノ道義上ニ於キテハ自由ニシテ其ノ有形ノ實物上ニ於キテハ有益ナル者ナルカ故

ニ配偶者ノ心意ニ係ル活動モ亦思想自由ノ原則ニ基キ
不公平ナル教會及ヒ官衙ノ制規ヲ離レテ自ラ自由ヲ得
ルニ至ルヘキモノトス

故ニ結婚者ハ年齢父母ハ承諾宗旨ハ異同等左ノ三項ニ係ル制限ハ一
定ノ標準ナキ規律ニシテ決シテ許容スヘカラサル者ナリ

第一一定シタル結婚ノ年齢ヲ定ムル事○サクセン千八百二十六年九
月二十日ノ命令ニハ男女ノ年齢ヲ二十一歳以上トシ普國々法第二篇
第一款第三十七節ニハ男ハ十八歳女ハ十四歳以上ト定メ澳國民法ニ
ハ男女共ニ十四歳以上ニ限リツルヘル法律書第七十節ニハ男子ヲ二
十歳女子ヲ十六歳以上トシ又メクレンブルヒ、シュウエリン千八百六十九
年二月十日ノ達ニハ丁年ニ達セサル者ハ結婚スルヲ得サルモト
セリ

第二兩親又ハ其ノ代表者ノ承諾ヲ得ルニアラサレハ結婚ヲ爲スヲ能
セリ

ハストスルノ成規○婚姻ハ廣ク萬國ニ共通スル事項ナルカ故ニ之レ
ヲ以テ父母ノ承諾ヲ得サシメントスルカ如キハ到底行ハルヘキモノ
ニアラス故ニサクセン民法第千五百六十八節ニ凡テ婚姻ヲ結了スル
ニハ尊屬親ノ承諾ヲ要スト言ヘルハ實ニ其ノ度ヲ失シタル者ト云フ
ヘシ(佛人プラデーエー、フオデレー氏著法理論プロラシニッブ、ゼキ
ゲンクレル氏著獨逸私法論第二卷參照)

第三宗旨ノ異同ヲ以テ結婚ノ障碍トナス事○パーデンニ於キテハ千
八百六十年十月九日ノ法律クールヘツセンニ於キテハ千八百四十八
年十月廿九日ノ法律ヲ以テ之レヲ廢止シ獨逸ニ於キテハ根本憲法第
五條第十二節ヲ以テ宗旨ノ異同ハ民事上結婚ノ障碍トナルヲナカル
ヘシト明言セリ(宗旨ノ異同ヲ以テ結婚ノ障碍トナシタル古來ノ法律
ハ普國々法第二篇第一款第三十六節澳國民法書第六十四節バイエ
ル千八百十三年六月十日ノ猶太令及ヒ猶太人ノ民權ヲ定メタル千八

百五十一年六月二十九日ノ法律ヲ参照スヘシ又異宗旨ノ結婚就中猶
 太宗旨ノ人ト基督教旨ノ人トノ結婚ノ事ニ關シテハリンダー氏著異
 宗者結婚論第四卷及ヒ第十卷リヒテル氏著教會法第二百七十五節マ
 ンモン氏著異宗結婚論ロート氏著バイエルン民法キャンツマン氏著異
 宗結婚論キャンツシケル氏著同上ヒルセー氏著民事上結婚及異宗結婚論
 第四百十葉等參照

第五結婚ハ夫婦兩造共ニ充分ナル法律上ノ結果ヲ有ス
 ヘキ唯タ一種ノ婚姻ニ限ルヘシ夫若クハ婦ノ一人ノミ
 法律上ノ結果ヲ有スル者又ハ男女ノ結合ニ係レル共同
 ノ生活ト雖モ之レト共ニ生スヘキ法律上ノ結果ナキ者
 ハ公ケノ德義ヲ破ルノミナラス大ニ社會法上同等權利
 ノ原則ニ反スルモノナリトス

不同等ノ婚姻即チ所謂モルガナチツクノ結婚ハ父母及ヒ幼兒ノ身分

并ニ相續ニ關スル權利ヲ異ニスルカ故ニ社會法理ノ容ル、所ニアラ
 ス(佛書ブロッグ氏ノ政治字典中婚姻ト題スル項クルーヘル氏著獨逸聯
 邦公法第二百四十五節ゲンクレル氏著獨逸私法第二卷參看)

(按)モルガナチツクノ結婚トハ獨逸ニ於キテ皇族ト下等ノ人ト取結ビタ
 ル婚姻ノ義ニシテ妻タルモノハ皇族ノ位階ヲ享有スルヲ能ハス其ノ
 子タル者モ父ノ遺産ヲ相續スルヲ能ハサルモノナリ或ハ又之レヲ左
 手ノ結婚ト稱ス

斯ク婚姻ハ配偶者ノ身分ニ關スル總體ノ生活ヲ以テ共
 同一體ノ中ニ收メ不公平ナル差等アルヘキ者ニアラサ
 ルカ故ニ結婚ハ只タ々々社會ノ進化及ヒ必需ノ本旨ニ
 出テタル一般ニシテ公平ナル文化ノ條件ニ從ツテノミ
 法律上ニ之レヲ制限シ得ヘキモノトス故ニ結婚ハ社會
 行政法中ニ論スヘキ事項ニ屬シ其ノ適法ナル効力ハ行

政官衙ニ於キテ之レヲ認了セサルヘカラス(即チ民事上ノ結婚)然レトモ已ニ法律上有効ナル結婚ハ配偶者カ信仰セル宗旨ニ從ヒ尙ホ宗教上ノ認了ヲ得テ之レニ神聖ナル性質ヲ帶ハシムルハ妨ケナシ

獨逸ライン地方ヲ除クノ外民事上ノ結婚ハ民法ニ於キテ之レヲ許セリ(フリーデルブルヒノ結婚法獨逸根本法第三條及ヒ外國ニ於ケル聯邦民ノ身分及結婚法ニ關スル千八百七十年五月四日ノ聯邦法律參照)獨逸ヨリ他ノ邦國ニ於キテモ亦民事上ノ結婚アリ即チ佛國ハ千七百九十二年九月二十日ノ法律以來白耳義ハ千七百九十五年以來和蘭ハ千八百三十三年以來意大利ハ千八百六十年以來存立セリ(尙民事上ノ結婚ノ必要ナル所以ハフリーデルブルヒノ結婚法ニ詳説ス)

第四十七節 結婚結了ノ法則

前節ニ論述シタル理由ニヨリ婚姻ノ結了ニ關シテハ左

ノ數則ヲ考察セサルヘカラス

第一、新夫新婦ノ身分并ニ其ノ人ニ相違ナキ事ノ公ケニシテ且ツ規則ニ從ヒタル眞實ノ證據ヲ呈出シ又々往々此ノ證據ニ添ユルニ其ノ取結ハントスル婚姻ハ民法上若クハ警察上差支ナキ丁ノ證書ヲ以テスル丁ヲ要ス

結婚者ノ身分并ニ其ノ人ニ相違ナキ丁ノ證據ヲ呈出スル丁ニ就キテハ千八百五十年十一月十九日ノフランクフルト婚姻法第五節千八百五十五年五月三十一日ノオルデンブルヒノ法律第十九條ヨリ第二十一條迄千八百五十五年五月一日ノウルテンブルヒノ法律第八條千八百五十二年四月廿七日ノリュベック法律第三節千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第三節及ヒ民事上若クハ警察上差支ナキ丁ノ證書ヲ添ユル丁ニ就キテハ千八百六十八年四月十六日バイエルン法律第三十三條及第三十四條ベールツル氏著バイエルン憲法第三十節參照)

○内國ニ於ケル外國人ノ婚姻ハ各々其ノ本國ノ法律ニ從ヒ結婚ノ權利アルモノナラサルヘカラス(千八百五十四年三月十三日普國達參照)

○婚姻前ニ於ケル結婚ノ契約ハ法律上敢テ之レヲ必要トセス又有効ナリトセスワルテル氏著教會法第三百○三條參照然レ此ノ結婚契約就中一定シタル明了ノ書式ニ從ヒタル契約ヲ必要ナリトセシ場合ハ斯クノ如キ有効ノ契約ハ他ニ手數ヲ要セス只々男女兩造肉體ノ共同ヲ以テ直ニ之レヲ適當ナル婚姻ニ變化スヘキモノトセル原理ノ行ハレタリシ諸邦ニ在リ(ヒール氏著ロストック府結婚契約法論參照)

第二、結婚者ノ住所ノ地ニ於キテ結婚ヨリ生スル故障ノ有無ヲ調査センカ爲メニ寺院ノ宣告裁判所ノ張札新聞紙上ノ記載等ノ方法ニ依リ婚姻ヲ取結ハントスル者アル趣キ數度ノ公告ヲ爲シ一定シタル時日内ニ此ノ婚姻ニ對シテ故障ヲ申立テ得ヘキ旨ヲ知ラシムルトヲ要ス

此ノ公告ハ一定ノ日限(ニヶ月ヨリ六ヶ月迄)ヲ過ヤテ尙ホ結婚ヲ爲サレハ其ノ効力ヲ失フヘシ(澳國民法第七十節フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第六節ヨリ第十節迄ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律第五條バーテン千八百六十年十月九日ノ法律第一節普國千八百四十七年三月三十日ノ達第五節リニベッキ千八百五十二年四月廿七日ノ法律第二節千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第三節第四節サクセン千八百七十年六月廿日ノ法律第七節參照)

然レ此至急非常ノ場合ニ於キテハ此等ノ公告ヲ要セサルコトアリ(澳國千八百六十八年五月二十五日ノ結婚法第五條ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律第十四條フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第十三條參照)

第三、新夫新婦ハ二人ノ證人ト共ニ規則ニ從ヒ結婚役所(寺院)又ハ例外ノ場合ニ於キテハ其ノ住所ニ於キテ其ノ

自由ニシテ且ツ熟慮シタル意思ヲ以テ相互ニ婚姻ノ共同ヲ爲シタル旨ヲ自ラ陳述セサルヘカラス

フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第十一節ハンブルヒ千八百六十一年ノ法律第三節ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律第七條ヨリ第九條迄バーデン千八百五十一年一月十六日ノ法律第七節澳國千八百六十八年五月廿五日ノ法律第七節ルベック千八百五十二年四月廿七日ノ法律第六節サクセン千八百七十年六月二十日ノ法律第十條千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第七節參照
民事上ノ結婚ナキ邦國ニ於キテハ國家ノ認了シタル宗教ノ公會ニ屬スル者ハ凡ソ宗教上結婚ノ儀式ニ從ヒ婚姻ヲ爲スヘキ場所ノ教正之レヲ掌ル(ベーツル氏著バイエルン憲法第三十節參照)

第四(右夫婦ノ陳述ハ結婚役所ニ記錄シ結婚契約ノ存在及其ノ條項ヲ公認シ且ツ結婚證書ニ配偶者雙方ノ署名

捺印ヲ爲サシムヘシ

(ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律第十一條バーデン千八百六十年十月九日ノ法律第二節澳國千八百六十八年五月廿五日ノ結婚法第八節サクセン千八百七十年六月廿日ノ法律第十一節千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第九節參照)

第五(結了シタル婚姻ハ之レヲ官衙ノ結婚簿冊(寺院簿冊)ニ登記ス

此ノ登記ハ結婚者ノ身分ヲ明カニセサルヘカラス又外國ニ於キテ取結ヒタル婚姻モ亦登記スルコトヲ得ル澳國民法第八十節フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第十三節及第十四節ハンブルヒ千八百六十一年ノ法律第五節ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律第十二條バーデン千八百六十年十月九日ノ法律第二節普國千八百四十七年五月三十日ノ達第一節千八百七十年五月四日ノ聯

邦法律第九節サクセン千八百七十年六月廿日ノ法律第九節參照此ノ登記ト共ニ民事上結婚ノ効カヲ有ス

此等ノ手續了ラハ配偶者自ラ其ノ屬スル所ノ宗旨ニ從ヒ眞神ノ前ニ於キテ其ノ結婚ノ式ヲ爲ストヲ得ル是レ各人各個ニ固有ナル信仰ノ自由ニシテ官衙ノ權力決シテ之レニ干渉シ得ヘキモノニアラス又教會ハ有効ナル婚姻ノ民事上ノ權利ニ關スヘキトヲ爲ストヲ拒ム等方法ニヨリ外部ノ強迫ヲ用ヒテ配偶者ヲ強制スルト能ハス

(フランクフルト千八百五十年十一月十九日ノ法律第十二節ハンブルヒ千八百六十一年ノ法律第六節普國千八百四十七年三月三十日達等參照)

第四十八節 民事上ノ結婚

婚姻ハ民事上ノ制度ニ屬シテ宗教上ノ關係ハ敢テ其ノ効力ノ有無如何ニ關スル事アルヘカラサル所以ハ上來已ニ之レヲ論述シタリト雖此ノ原理タル今日ニ於キテハ大ニ其ノ勢力ヲ有スル者タルニ係ハラズ容易ニ圓滑ナル立法上ノ認了ヲ得ルノ度ニ達スル丁能ハサリシナリ然レモ今マ其ノ沿革ヲ尋ヌレハ此等ノ原理タル古來全ク存スルトナキニアラサリシヲ知ルヘシ即チ基督舊教ノ教會ニ於キテハトレントノ評議ノ議決ニ從ヒ婚姻ハ必スシモ宗教上ノ結婚ニシテ教會ノ認了アル者タルヲ要セス只タ相當教會管長及二人ノ證人ノ面前ニ於キテ新夫新婦相互ニ其ノ婚姻ヲ承諾スル旨ヲ陳述スルヲ以テ足レリトシ基督新教ニ於キテハ宗教革命ノ首唱者ナルルーテル氏ノ如キ素リ往々自家撞着ノ誤謬ニ陷

リタルトナキニアラサルモ明カニ婚姻ハ民法上ヨリ考察スヘキモノニシテ國家主權者タル者ノ、當ニ法律ヲ布キ判決ヲ下スヘキ事項ナリトシ結婚承諾ノ陳述ノ如キモ之レヲ官衙ニ於キテスルヲ以テ尤モ重要ノ事柄ナリトセリ且ツ又實際上ニ於キテモ現ニ此等ノ原理ヲ實行シタルノ例甚タ少ナカラストス故ニ婚姻ヲ以テ民事上ノ制度ニ歸セシムルノ原理ハ前世紀以來教法ナリ輿論ナリ立法ナリ實際ナリ更ニ新ナル原理ヲ採用シテ婚姻ノ効力ハ宗教上ノ結婚及認了如何ニ關スヘキモノニアラストセリ

(フリーデルベルグ結婚法第二百〇三條ヨリ第二百〇十條第二百六十二條ブルンチーリ氏著獨逸私法論第二卷第四百十六節モーレル氏著獨逸作地法沿革史第四卷第二百九十六條及第三百十三條澳國聯邦法

律第七十五節及キルヒステール氏同上註釋第四十八條參照

故ニ近世ニ於キテハ一方ニ於キテハ宗教ノ教旨ニ基キタル結婚ノ例規ト一方ニ於キテハ人民中ニ存スル發達進化ノ意思就中宗教ハ國家ト併立シテ相侵スヘカラサルモノトスル法理ト二者ノ間ニ存セル權限ノ爭ハ如何ナル理由ヨリスルモ決シテ之レヲ久シキニ保スル丁能ハサルニ至リタレハ斷然國家ノ立法權ヲ以テ速ニ之レヲ全廢ニ歸セン丁敢テ望ミナキニアラス蓋シ事斯クノ如キヲ得テ後始メテ婚姻ノ制度ヲ以テ社會發達進化ノ事項トナシ國家ノ官衙モ亦宗教ノ勢力ヲ離レテ自由ヲ得ルニ至ルヘシ而シテ夫ノ民事上ニ於ケル結婚ノ制度ハ國家ガ教會ヲ保護スヘキ本義務ヲ破ルモノトナシ或ハ之レヲ以テ人民ノ宗教信仰心ヲ滅殺スルノ徵トナシ

或ハ教法ノ明條ニ反スルモノトナシ或ハ一般ノ道德及結婚ノ本性ヲ毀ツモノトスルカ如キハ決シテ其ノ明證ヲ得カタキ空論タルニ過キサルナリ

(フリードベルク結婚法第七百五十五條及第七百六十一條參照)

第四十九節 民事上ノ結婚ノ種類

現時ノ法律ニ於キテハ民事上ノ結婚ヲ分ツテ三種トス即チ左ノ如シ

第一切迫ノ民事上ノ結婚 切迫ノ民事上ノ結婚トハ只タ已ムヲ得サル場合ニノミ民事上ノ制度ニ從ヒ舉行シタル結婚ヲ云フ即チ其ノ場合ハ左ノ二様ニ歸ス

(甲)國法上ニ定メタル故障ナキ婚姻ナレモ宗教上ノ主旨ヨリ相當教會管長ノ拒ム所トナリ宗教上ノ認了若クハ教會ノ結婚公告ヲ得ル丁能ハサル時

(乙)只タ束縛ノミヲ解カレタル教會(按)即チ基督教會ニアラサル者ニシテ公會ノ性質ニ屬スル信徒ナルカ又ハ教會長ニシテ管長タルノ權ナキカ又ハ結婚ノ事ニ付キテハ教會更ニ之レニ關係セサルモノナル時

(普國千八百四十七年三月三十日ノ教會新設ニ關スル法律ルベッ千八百五十二年四月廿七日ノ法律ウルテンブルヒ千八百五十五年五月一日ノ法律バーデン千八百六十年十月九日ノ法律ハノーブル千八百六十七年九月廿九日達バイエルン千八百六十年五月二日ノ法律埃國千八百六十八年五月廿五日ノ法律千八百七十年五月四日ノ聯邦法律フリーデルブルヒ結婚法第六百七十八條リヨンネー氏普國々法論第一卷第一款參照)

第二、隨意ノ民事上ノ結婚 隨意ナル民事上ノ結婚トハ宗教上ノ結婚ナリ民事上ノ結婚ナリ二者何レニテモ結

婚者隨意ニ之レヲ撰ミ得ルモノニシテ何レノ方法ニ由ルモ共ニ充分ナル法律上ノ効力アル者ヲ云フ

(ハンブルヒ千八百六十六年七月一日ノ法律第一節及第二節オルデンブルヒ國法第三十三條及千八百五十五年五月三十一日ノ法律第一節及第二節千八百七十年五月四日ノ聯邦法律第一節參照)

第三、**強制ノ民事上ノ結婚** 強制ノ民事上ノ結婚トハ如何ナル結婚ヲ問ハス又々結婚者ノ撰ム所如何ヲ論セス結婚ハ凡テ民事上ノ制度ニヨラサレハ其ノ効ナシトスル者ヲ云フ但シ此ノ民事上ノ結婚ト共ニ教會ノ認了ヲ受クルハ妨ナシト雖モ法律上ノ効力ニハ關係スルナシトス

(普國千八百四十八年十二月五日ノ憲法并ニ千八百五十年一月三十一日同上修正第十九條參照グールヘッセンニ於キテハ千八百四十八年十

月廿九日ノ法律ヲ以テ之レヲ實行シタレト千八百五十三年四月十三日ノ達ヲ以テ再ヒ之レヲ廢シタリ)

右三種ノ中第三種即チ**強制ノ民事上ノ結婚**ニ於キテノミ能ク宗教ノ信仰ト結婚ノ本性ニ帶フル所ノ社會ノ發達進化ノ性狀トヲ區別シ千差萬別ナル宗教上ノ制度ニ反シテ社會法ノ統一ヲ完全ナラシメ人身ノ自由就中思想自由ノ原理ヲ貫通スルニ足ルヘキモノトス蓋シ第一種ノ結婚法ハ或ハ未タ盡ク其ノ必要ナリトスル場合ノ全體ヲ包括セス或ハ結婚ニ關スル民事上ノ制度ノ重要ナル所以ノ義ヲ損シ結婚ノ本性ヲ卑下シテ人民ノ德義ヲ害スルノ弊アリ之レニ反シテ第二種ノ結婚法ニ於キテハ其ノ民事上ノ結婚ト宗教上ノ結婚トヲ撰フハ全ク之レヲ結婚ノ自由ニ任シ二者何レカ法律上有効ノモノ

トスルモノナルカ故ニ國家教會二者併行ノ原理ニ抵觸
シ國家ノ制度ト教會ノ例規トハ相并ンテ共ニ同等ノ權
利ヲ有スヘキ者タルトテ拒ミテ婚姻ノ本性中ニ存スル
重要ナル宗教ノ本旨ヲ微弱ナラシメ法律上ノ制裁ハ教
會ノ權利如何ヲ顧ミサルモノナリ

(フリーデルベルク結婚法第七百六十二條參照)

第五章 國民タル權利

第五十節 國民タル權利ノ本性

如何ナル邦國ヲ問ハス其ノ本國人ナル者ハ法律上一種
ノ資格ヲ有シ外國人即チ他邦ノ人民ニシテ法律上及事
物自身ノ本性ヨリ之レヲ享有シ能ハサル者ヨリ云ヘハ
之レヲ一種ノ特權トモ稱スヘキ者アリトス

外國人ト本國人トノ區別ニ從ヒ斯ク權利ノ差等ヲ認了
シタル事實ハ已ニ古代ノ羅馬法ニ存シ古代ノ獨逸法律
ニ於キテモ亦尙ホ一層甚シキ區別ヲ爲シタリ

羅馬固有法及普通法ニ此ノ區別ヲ爲シタリ又此等ノ權利ハ往々之レ
ヲ民權ト稱ス(佛國民法第七條及第八條普國千八百五十年ノ憲法第六
十八條リヨンネー氏著普國々法論第一篇第二款第五葉附論第一參照
又々獨逸ノ古代法ニ就キテハツエベル氏著獨逸法律沿革史第二卷第
百十六節モーレル氏著作地法沿革史第二卷第九十六葉參照)

此等ノ權利ハ國民タルトヨリ生スル各人各個ニ屬スル
法律上ノ資格トシテ又之レヲ本國民タルノ權ト稱シ其
ノ狹義ノ意ニ於キテハ國民ニ屬スル參政權ノ一體ヲ指
シ本國人タリトモ盡ク之レヲ有シ得ヘキモノニアラス
只タ或ル條件ニ適合スル者ノミニ固有ナルモノトス設

令へハ丁年ノ男子ニシテ一定ノ住所等ヲ有スル者ニ限
ルカ如シ

(リヨンキー氏著學國々法論第一篇第二款第八十六節第四葉ペーツル
氏著バイエルン憲法第二十節及第二十節參照)

臣民ト云ヘル語ハ各人民ヲシテ國家ノ權力ニ服從セシムルノ意アル
モノニシテ本國在留ノ外國人(即チ一時ノ臣民)ニモ亦此ノ語ヲ用ヒ得
ヘシト雖國民ノ稱ニ至リテハ國家ノ許與シタル本國民ノ權利ノ意ア
ルカ故ニ社會ノ範圍ニ於キテモ亦輕々看過スヘキモノニアラス(リヨ
ンネー氏著同上第五葉ペーツル氏著同上第二十四節參照)

本國民タルノ資格ハ私法國法行政法上ノ三點ヨリ考察
シ得ヘシ即チ私法上ノ關係ニ於キテハ本國民タル資格
ハ一種ノ定マリタル人民ノ後裔タルヲ指スモノニシ
テ天然上ニ於ケルノ事項タルニ外ナラサルヘク又之レ

ヲ國法上ノ關係ヨリ論スレハ國家ノ範圍内ニ屬スル權
利ノ得喪ニ影響スル事項ナルヘシト雖モ今更ニ社會上
ノ範圍ヨリ之レヲ論スレハ本國民タル資格ハ全ク國家
ノ範圍ヨリ離レテ直接ニ各人各個ニ法律上ノ資格ヲ附
與シ且ツ社會ノ發達進化ノ活動ニ基キタル法律制度ニ
屬スヘキ者ナルカ故ニ國民タル資格ハ左ノ二點ニ關シ
テハ行政法律ノ制度ニ關係スヘキモノトス
(緒論第一章參照)

第一國民タルノ權利ヨリ生スル法律上ノ關係ハ過半行
政官衙ノ活動作用ヲ要ス

(マイエル氏著行政法原理第十六節及第十八節參照)

第二今日ニ於ケル文化ノ現狀ニ於キテハ社會法上ノ各
人平等權スラ未タ完全ノ度ニ達セサレ氏社會ノ範圍内

ニ於テ本國人ト外國人トノ間ニハ尙更ニ著シキ權利ノ
差等アリトス

(第二節參照)

第五十一節 聯邦民タル權利アンサスインディアンナト

獨逸ニ於キテハ其ノ政治上ノ沿革ヨリ一般ノ國民タル
權利ト都邑民タル權トヲ區別セサルヘカラス而シテ一
般ノ國民タル權利ハ今日ニ在リテハ帝國ノ各獨逸人ニ
屬スル者即チ帝國民タル資格ヲ指シ即チ千八百十五年
六月八日獨逸聯邦條例ノ効力ヲ有スルノ時ニ稱シタル
所謂聯邦民タル權利ナリトス

(リヨンネー氏著普國々法論第一節第二款ツァハリエー氏著獨逸及聯邦
國法第一卷第八十六節ツェーブル氏著獨逸國法第二卷第二百八十七
節參照)

聯邦民タル權利ハ左ノ數種ヲ包括シタリ

(ツェーブル氏著同上千八百十五年聯邦條例第十六條及第十八條參照)

第一、民權及政權ヲ享有スルノ權利ハ基督教ニ屬スル諸
派ハ凡テ同等タル事

第二、各人住スル所ノ各邦外ニ於キテハ其ノ本邦人民ヨ
リ更ニ多分ノ租稅ヲ拂フナクシテ土地ヲ得有シ及ヒ
所有スルノ權并ニ此ノ土地ヲ所有スルカ爲メニ外邦ニ
住居スルノ權

第三、聯邦中此ノ邦ヨリ彼ノ邦ニ移住シ得ヘキ自由權

第四、本邦ニ於キテ現ニ兵役ニ服スルノ義務ナキ限りハ
他邦ノ官務若クハ兵役ニ入ルノ權

第五、聯邦中ノ各人ハ其ノ物品ヲ運搬シテ他邦ヲ通過ス
ルモ一切加稅ヲ免ル、ノ自由但シ此ノ自由權ハ各邦相

互ノ特約ヲ以テ制限スルコトヲ得ス

(ツェーブル氏著同上第二卷第二百八十九葉千八百十五年同上第十八條參照)

第六、裁判不當ニシテ法律上ノ手續ニヨリ充分ノ救濟ヲ得ルコト能ハサル場合ニハ聯邦會議ノ開庭ヲ請求シテ其ノ救濟ヲ得ルノ權

(千八百二十年五月十五日ウヰネル決議法第廿九條參照)

第七、出板ノ自由及ヒ無形財産權(按)版權專賣權ノ類ニ關シテハ聯邦一般同一ノ法律ニ依ル事

(千八百十五年聯邦法律第十八條ツェーブル同上第二百八十八節參照)

第五十二節 帝國民タル權ライヒス、インザイムナート

前節ニ記載シタル僅々ノ聯邦民タル權利ハ千八百六十六年ノ事變ニヨリ獨逸聯邦ノ瓦解ト共ニ廢滅ニ歸シ各

聯邦國民相互ノ關係ハ宛モ獨逸外ノ國民トノ關係ニ於ケルカ如クニシテ只タ關稅聯合等ノ如キ特別ナル條約ノ存スル者アリシノミ

(ツァイクヒニム氏著北獨聯邦憲法第二葉及第三十九葉參照)

然レ其ノ後北獨聯合ノ成ルニ及ンテハ北獨聯邦民タル資格ヲ生シ普國ノ君主再ヒ獨逸帝國ヲ立ツルニ至リテハ獨逸帝國民タル資格ヲ發生セリ而シテ此ノ帝國民タルノ權タル敢テ新ナル法律ノ範圍ニ屬スルモノニアラス概テ從來ノ國民タルノ權ト異ナルコトナシト雖モ聯邦各國內ニ於ケル邦民タルノ資格ヲ擴張シテテレハナル全國民ノ一體ニ及ホシ各邦ノ區域如何ヲ論セス凡テ獨逸人民ニ許スニ社會上同等ノ權利ヲ以テセリ

(千八百六十七年四月十六日北獨聯邦憲法第三條ツァイクウム氏著同上

第六十六葉ヒルト氏第四年報(千八百七十一年)中リヨンネー氏ノ說第二十二葉千八百七十一年四月十六日ノ帝國憲法第三條リヨンネー氏普國々法論第一篇第二欸參照)

○聯邦ノ範圍ハ普國ローレンブルヒ、バイエルン、サクセン、ウルラムブルヒ、バーデン、ヘッセン、メクレンブルヒ、シュエリン、サクセン、ワイマル、メクレンブルヒ、ストレリッツ、オルテンブルヒ、ブランシュワイグ、サクセン、マインゲン、サクセン、アルテンブルヒ、サクセン、ユブルク、ゴタアンハルト、シュワルツブルヒ、ホルドルススタット、シュワルツ、ゾンデルスハウゼン、ワルテック、大ロイス、小ロイス、シャウムブルヒ、リッペ、リッペ、ルベック、ブレメン及ヒハンブルヒノ二十六邦ヨリ成ル

○帝國立法ニ關シテハ第七節ノ附論、北獨聯邦ト南獨各邦トノ關係ハヒルト氏第四年報千八百七十一年(第三百五十七葉參照)

帝國民タル權利ハ左ノ如シ

(千八百七十一年帝國憲法第三條參照)

此ノ權利中ニハ地方ノ都邑組合又ハ救貧法ニ關スル者ヲ包含セス但シ病者ノ救護死者ノ埋葬及ヒ追放セラレタル邦民ヲ受理スル事項ニ限リテハ各邦相互ノ間ニ取結ヒタル條約ハ尙其ノ効力ヲ有スルモノトス即チ追放セラレタル邦民ヲ救護スルコトニ關スル千八百五十一年六月十五日ゴートノ條約及ヒ病者ノ救護死者ノ埋葬ニ關スル千八百五十三年七月十一日アイセンナッハノ條約是レナリ

第一、各聯邦ニ屬スル人民ハ他ノ聯邦中ニ於キテモ亦之レヲ内國民トシテ取扱ヒ住所、營業、仕官、土地所有ノ權、民權及其他凡テノ社會權ハ本國人ト等シク之レヲ許可シ又法律上ノ手續及保護ニ至リテモ亦同様タルヘシ

(訴訟權ニ關スル千八百六十九年六月廿一日ノ法律參照)

第二、獨逸人ニシテ右等ノ權利ヲ執行スルハ其ノ自由ニ

シテ本邦又ハ他ノ聯邦ノ權力ニ依リテ制限セラ、ル、
ナカルヘシ

第三、外國ニ對シテモ獨逸人タル者ハ凡テ帝國ノ保護ヲ
受クルノ權アリ

此等保護ノ事務ハ主トシテ帝國領事ノ任スル所トス(領事館ノ組織ニ
關スル千八百六十七年十一月八日ノ聯邦法律參照)

斯カル一般ナル獨逸帝國國民タルノ權利ハ他ニ重要ナル
實際上ノ結果ヲ來タシタリ即チ重大ナル社會發達ノ事
項ハ各地方ニ特別ナル立法ヲ離レテ全帝國ノ立法及管
督ニ歸シ獨逸帝國ヲ通シテ近世文化ノ程度ニ基キタル
法律ノ統一ノ原理ヲ實行シ全國共通ナル文化發達ノ思
望ヲ満足セシメタリ

(千八百七十一年帝國憲法第三條參照)

今マ此等ノ全國共通事項ヲ枚舉スレハ即チ左ノ如クナルヘシ

- 第一、居住及移住、參政權通行權營業及外國人ニ關スル警察等
- 第二、關稅及商業ニ關スル立法及ヒ帝國ノ爲メニ要スル租稅
- 第三、度量權衡貨幣ノ制度及ヒ兌換若クハ不換紙幣ノ發行
- 第四、銀行ノ成規
- 第五、新發明ニ係ル物品ノ專賣權
- 第六、無形財產權ノ保護(按、版權、商標權等)
- 第七、外國交易事務航海法、及ヒ領事館ノ設置等ニ關スル制規
- 第八、國家ノ保護及ヒ一般交通ノ便ニ供スル鐵道及海路陸路ニ關スル
制規
- 第九、河海ノ租稅ニ關スル限リハ公ケノ河海ニ於ケル運送營業ノ規則
- 第十、郵便及電信ノ制度
- 第十一、民事上相互ニ裁判判決ヲ執行スル成規

第十二、公文ノ公證ニ關スル成規

第十三、契約法、刑法、商法、爲替法及ヒ訴訟法ニ關スル同一ナル立法

第十四、帝國陸海軍ニ關スル制度

第十五、醫事及獸醫警察規則

第十六、出版及集會條例

然レ凡獨逸帝國國民タル權利ハ一聯邦ノ邦民タル資格ノ有無如何ニ關ス故ニ聯邦民タル資格ヲ欠キタル者ハ併セテ獨逸帝國國民タルノ權利ヲ失フ

(千八百七十年六月一日聯邦法律第一條ヒエールセメンツェル氏著北獨聯邦憲法第二卷第百五十六葉千八百六十七年十一月一日ノ法律第一節及第二節コーレル氏著北獨聯邦及關稅聯合第一卷第五十〇葉及第五十二葉ヒルト氏第一年報第四百七十六葉及四百七十七葉參照)
○一ツノ聯邦ヨリ他ノ聯邦ニ移リ一定ノ年月ヲ經過スルトモ尙其ノ

邦民タルノ資格ヲ得ルヲ能ハサルモノハ又帝國國民タル權利ヲ有スルモノト見做スヲナシ(普國千八百六十八年十二月廿三日ノレスクリプト千八百六十七年十月廿一日ノ帝國會議ニ於ケル聯邦議官長ノ說明リヨント)氏普國々法論第一卷第二款第九葉附論第一參照)
○然レ凡帝國國民タル權利ハ都邑民タル資格ノ有無ニ關係スルヲナシ(マイエル氏著行政法原論第十六節參照)

第五十三節 國民タル資格ノ得喪

帝國中ノ一邦民タルノ資格ノ本性(即チ廣義ニ於ケル生國民タルノ權)及ヒ此ノ資格ニ附屬スル權利ハ帝國國民タル資格ト抵觸スルヲナク又爲メニ其ノ本性ニ於キテ變動アルヲナシ

帝國國民タル資格ト一邦民タル資格トノ區別ハ主トシテ地方ノ都邑民タル權及救貧制度ニ關スル權利ノ有無ニ關係ス千八百七十一年ノ帝

國憲法第三條リヨンキ一氏著普國々法論第一卷第二款第八十六節第八十八節ニ至ルペーツル氏著バイエルン憲法第二十五節第二十六節マイエル氏著行政法原論第十六節參照)

然レ凡一邦民タル資格ハ左ノ關係ヲ有ス

第一、帝國民タル資格ヲ得有シ及ヒ其ノ權利ヲ執行スルニ豫メ必要ナル條件ナリトス

(千八百七十一年帝國憲法第三條參照)

第二、本邦又ハ他邦ニ於キテ參政權ヲ得有シ及ヒ其ノ權利ヲ執行スルニ豫メ必要ナル條件ナリトス

(千八百七十一年帝國憲法第三條千八百五十年普國憲法第三條千八百十八年バイエルン憲法第四款第二節同年五月廿六日同上邦民タルノ權ニ關スル命令第一節參照)

○國民權タルノ權ヲ得ルニ就キ必要ナル特別ノ條件設令ヘハ丁年以

上ニシテ男子タルヲ要スルコトハ同上普國憲法第六十八節バイエルン同上第八節參照)

第三、事物自身ノ本性若クハ法律明文ヨリ只タ本國出生人ノミニ屬スル權利ヲ得有シ及ヒ之レヲ執行スルニ豫メ必要ナル條件ナリトス

然レ凡此ノ諸權中ニハ左ノ二種ノ權利ヲ包ムコトアルヘカラス

第一、單純ナル私權

第二、民權即チ社會權

蓋シ社會權ハ勿論國家ノ保護スル所ノ者ナレ凡其ノ本性タル必スシモ一國內ニ止マルヘキモノニアラス廣ク文化社會ニ共通スヘキモノナルカ故ニ(緒論第二節第三節第八節參照)之レヲ本國出生ノ人ノミニ限ルヲ能ハス然レ凡或ハ未タ社會法ノ何物タルヲ明知スルヲ能ハサルニ由リ或ハ國家ノ利害就中彼我ノ權衡ヲ基トシ(按彼我ノ權衡トハ社會法上ノ權衡トハ)

文化ノ及フ所何レノ國ト雖共通スヘキ者タリトモ彼ノ國ニ於キテ之
 レヲ本國出生ノ人ニアラサレハ之レヲ許容スルコトナクハ我ニ於キ
 テモ亦之レヲ許容往々此ノ原理ニ反シタル例外ナキニアラサルナリ
 スルコトナキヲ云フ往々此ノ原理ニ反シタル例外ナキニアラサルナリ
 本國出生ノ人ニアラスト雖決シテ之レヲ拒絕スルコト能ハサル權利ハ
 スク二種ナルカ故ニ夫ノ公權即チ社會權ヲ論外ニ置キ單ニ私權利ノ
 ミヲ以テ本國出生ノ者タルト否トニ關セストスルハ大ナル誤見ナリ
 蓋シ社會上ノ制度ハ本來國家ト分離シテ獨立ナルヘキハ私法ニ於ケ
 ルト異ナル所アルヘカラサルモノナリ(リヨン子一氏著普國々法論第
 一卷第二款スタール氏法理論第二卷第二章第十四節ツァハリエー氏著
 行政法第一卷第二百二十八葉參照)
 ○社會法ト私法トノ區別ハ往々明切ヲ欠キツエープフル氏同氏著獨
 逸國法論第二卷第二百九十八節ペーツル氏同氏著バイエルン憲法第
 二十五節等カ一國民タル權利ヲ枚擧セル者ノ如キハ一定ノ標準ナキ
 分類ノミナラス尙ホ此等ノ權利ヲ盡シ得タルモノニアラサルカ如シ

本國民タルノ權利ハ或ハ法律自身ノ作用ニ依リ或ハ特
 別ナル法律上ノ行爲ヨリ發生ス即チ左ノ如シ
 第一、獨逸人ノ父母タル者ノ子孫但シ獨逸國民ノ子ハ其
 ノ外國ニ於キテ出生シタルト本國ニ於キテ出生シタル
 トヲ問ハス

(千八百七十年六月一日ノ帝國法律第二節及三節參照私生ノ子其ノ母
 タル者ノ國民タル資格ヲ襲フ)

第二、獨逸人ト結婚シタル外國ノ婦女

(同上帝國法律參照)

○此ノ場合ハ歸化ニアラサルカ故ニ歸化ニ關スル法律ニ適合スルヲ
 要セス(千八百四十三年七月十七日及ヒ千八百四十五年八月五日ノ普
 國法參照)

○外國ノ婦女ヨリ出生シタル私生ノ子ハ外國ノ籍ニ入ルヘキモノト

ス(ペーツル氏著バイエルン憲法第五十四葉參照)

第三、私生ノ子ト雖氏夫ノ之レヲ適法ノ子ナリト見留ムル者

此ノ場合ハ私生ノ子ノ父ハ獨逸人ニシテ其ノ母タル者其ノ國民タル資格ヲ異ニスル時ニ生ヌ又適法ノ子ト見留ムルコトハ養子ニ適用スヘカラヌ(千八百七十年六月一日帝國法律第二節及第四節ゲルヘル氏著獨逸私法論參照)

第四、聯邦ノ政府中央若クハ高等行政官衙ヨリ命シ若クハ其ノ許容ヲ得テ國家、教會、學校、都邑ノ公務ニ奉職スル事

但シ此ノ場合ハ別ニ之レニ反對セル明條ナキキヲ指シ若シ一ツノ外國人ニシテ聯邦ノ官吏ニ採用セラレ其ノ地位ヲ得タルキハ公務ヲ奉スル住所ノ聯邦ニ於キテハ其ノ國民タルノ資格ヲ得有スヘキモノト

ス(千八百七十年六月一日ノ帝國法律第二條及第九條參照)

第五、明許即チ他ノ聯邦國民ヲ許可スル事及ヒ外國人ノ歸化ヲ許ス事是レナリ而シテ他ノ聯邦民ニシテ本國民タラントスルニハ必ス其ノ邦内ニ住所ヲ定ムルコトヲ證明スルコトヲ要ス

(千八百七十年六月一日ノ帝國憲法第二節第七節千八百十五年六月八日ノ聯邦法律第十八條參照)

歸化ニ關スル必要ノ條件ハ左ノ如シ

(甲)歸化セントスル者ハ自ラ之レヲ處置スルノ能力アル事ヲ要ス但シ此ノ能力ノ足ラサル者ハ其ノ父又ハ後見人ノ承諾ニヨリ之レヲ完全ナラシムルコトヲ得ル

(乙)履歷上不行跡ナキコトヲ要ス

(丙)移轉シタル地方ニ於キテ居住シ若クハ活業ヲ有スル

丁ヲ要ス

(丁)自立ノ生計ヲ營ミ又ハ國民タルニ堪ユルノ能力アル者ヲ要ス

(千八百七十年六月一日帝國法律第二節及第八節參照)

高等ノ行政官衙ヨリ發スル他聯邦民移籍ノ許容及ヒ歸化證ハ其ノ附與ト同時ニ其ノ國民タルノ權利義務アルトヲ證スヘキモノトス

(千八百七十年六月一日ノ帝國法律第六節及第十節參照)

又此ノ證ヲ得ルニハ其ノ他ノ聯邦中ニ居住セス單ニ住所ヲ有シ若クハ都邑組合ニ許容セラレタルトヲ以テ充分ナリトセス

(同上帝國法律第六節及第十節澳國民法第二十九節及千八百六十年四月廿七日達及ヒ下條第百〇一節附論參照)

本國民タル資格ハ左ノ數件ニヨリテ消滅ス

第一(左ノ兩件ヲ充タシタル者ハ願ニ依リテ除籍ス
(甲)一定シタル兵役ヲ了リタル事

(帝國法律同上第十三節及第十五節參照)

平時ニ於キテハ左ノ場合ニ相當スル者ハ國民ノ籍ヲ脫スルヲ得ス

一、滿十七歳ヨリ滿二十五歳マテノ男子ニシテ州ノ委員ヨリ其ノ脱籍スル所以ハ兵役ヲ免ル、ノ目的ニアラサル旨ノ證書ヲ得サル者

二、未タ其ノ官ヲ罷メサル海陸軍武官及官吏

三、官吏ニアラサルモ海陸後備軍ニ屬スルモノニシテ現ニ其ノ役ニ服スル者(千八百六十八年十二月五日ノ澳國徵兵令第五十四節千八百六十八年二月十二日ノバーアン徵兵令第七十五節千八百六十八年一月三十一日バイエレン徵兵令第七十三節千八百六十八年五月十二日ノウルテンブルヒ徵兵令第九十九條ヨリ第百〇二條ニ至ル參照)

戰時若クハ開戦ノ情況アル場合ニハ帝國々權ヲ以テ特別ノ法令ヲ布ク(千八百七十年帝國法律第十七節千八百六十八年バイエルン徵兵令第七十四條及千八百六十七年十一月九日同上戰時服務條例第十四節及第十五節參照)

(乙)他ノ聯邦ノ國民タル資格ヲ得タル確證ヲ有スル事

(帝國法律同上第十五節及第二十二節參照)

第二(左ノ條項ニ係ル者ハ官衙ノ判決ニ依リ脱籍セシム) (甲)戰時若クハ開戦ノ模様アル片ニ際シ外國在留ノ獨逸人ニ對シテ歸國スヘキ旨ノ招喚ヲ爲シタル片一定ノ期限内ニ之レカ應答ヲ爲サ、ル者

(乙)政府ノ許可ナクシテ外國ノ官務ニ從事シ且ツ其ノ本國政府ヨリ其ノ職ヲ罷ムヘキ旨ヲ命スルモ尙ホ一定ノ期限内ニ之レニ應セサル者

(帝國法律同上第十三節第二十節第二十二節參照)

本國政府ノ許可ヲ得テ外國ノ官務ニ奉職スル者ハ尙其ノ本國民タル資格ヲ保有ス(同上第二十三節參照)

第三(適法ノ子ト見留メラレタル私生ノ子ニシテ其ノ父タル者其ノ母タル者ト異ナリタル他ノ國民ノ籍ニ屬スル者

(帝國法律同上第十三節參照)

第四(獨逸人ニシテ外國人又ハ他ノ聯邦ノ人民ニ嫁シタル者

(帝國法律同上第十三節參照)

第五(外國即チ帝國ノ範圍外ニ十年以上引續キ住居スル者

(帝國法律同上第二十一節リヨンチー氏著普國々法論第一卷第二款第

二十七葉附論第四參照

此ノ期限ハ聯邦ノ範圍外ニ出立シタルヨリ起算ス但シ若シ此ノ者ニシテ旅行券ヲ所有スルキハ券面ニ記シタル年月満期ノ時ヨリ起算シ且ツ此ノ年月期限ハ聯邦領事ノ登記ニ由リテ中斷セラレヘシ外國ヨリ歸國セル者ハ願ニ由リ其ノ住居セントスル聯邦ヨリ再ヒ其ノ國民タル資格ノ許可ヲ受ケサルヘカラスト雖モ未タ他ノ國民タル資格ヲ受ケサル者ハ再ヒ此ノ許可ヲ與フルヲ要セス

他國ニ於キテ五ヶ年ヲ以テ其ノ本國民タル資格ヲ得ヘキ期限トスルキハ條約ヲ以テ此ノ十年ヲ減縮シテ五ヶ年トスルヲ得ル設令ヘハ千八百六十八年二月廿二日北米合衆國トノ條約(ヒルト氏第一報第九百六十葉參照)及ヒ同年五月廿六日ノバイエルント北米合衆國トノ條約等ノ如シ

右ニ記シタル國民タル資格消失ノ場合ハ之レニ反スル

特別ナル例外アルニアラサレハ婦及尙ホ父ノ權内ニ屬スル幼者ニモ亦適用ス

(帝國法律同上第十九節及第二十一節參照)

第六章 住所

第五十四節 住所ノ本性

住所トハ人々各々其ノ文化ノ事項ヲ此ノ地ニ設立シ其ノ治生ノ計畫ニ從事スル發達作用ヲ此ノ地ニ發揚センカ爲メニ居住スル場所ヲ云フ

斯ク一定ノ住所ヲ固定スルハ何人ノ爲メニモ瞬時モ欠クヘカラサル必要ニシテ各人各個カ自然的ノ存在ノ性質自身ヨリ發生スヘキ事項タリ然レモ各人ノ住所ハ他人ト數多ノ關係ヲ保維スルカ故ニ住所ハ各人ノ生活目

的ニ取リテハ重大ナル社會進化ノ事項中ニ屬シ且ツ自由ニ住所ヲ撰定變更スルハ社會法上人身ノ自由ト相對スル者ニシテ重要ナル文化ノ制度中ニ屬スヘキモノトス

各人各個ハ其ノ發達目的ヲ達センカ爲メニハ適當ナル住所ヲ撰定シ又タ何時ニテモ其ノ住所ヲ變更スルコトアルカ故ニ其ノ住所ハ強大ノ勢力ヲ有スヘキ交通ノ道ヲ開キ其ノ相互ノ交際助力ニ依リテ發達ノ力ト進歩ノ方法トヲ發生シ大ニ一般ノ文化發達ヲ増進スヘキ者ナリ

故ニ住居ノ自由(即チ移住ノ自由)ハ近世ノ社會法律制度中ノ極メテ重要ナル者ナリ然レモ此ノ移住ノ自由ニ關スル立法ハ實ニ近世ニ始マリタル者ニシテ嚆昔ニ在リテハ人身ノ不自由警察上ノ束縛及町村組合法ノ制限ニ

依リテ移住ノ事項ニ於キテモ亦充分ノ自由ヲ得サリシナリ

○人身ノ不自由ヨリ生スル結果ハ設令ヘハ人身所有即チ奴隸ノ制度ニ在リテハ奴隸ハ其ノ主ノ承諾ヲ得スシテ他方ニ移住スルコトヲ得サリシカ如キ是レナリ(ルンデール氏獨逸私法論第五百四十五節及第五百四十六節參照)又古代ノ獨逸法ニテハ「アドブチ」ト唱ヘ他地方ヨリ入り來リタル者ハ必ス或ル「セニオルト」ト稱スル主人ノ配下ニ屬シテ其ノ保護ヲ仰キ自己ノ權利ハ完ク空シキ者ナルカ故ニ其ノ主人ノ保護ヲ受クルノ權利ナク又タ生來其ノ地ニ居住シタルモノニアラサレハ其ノ他ノ「アドブチ」ハ其ノ本質若クハ以前ノ主人ニ送附セリ而シテ住所ヲ定メタル「アドブチ」ハ其ノ土地ニ固着シテ他ノ地方ニ出ツルコトヲ得ス且ツ其ノ主人ナキ「アドブチ」ハ更ニ保護ヲ受クルコト能ハサル無籍ノ徒ナリシ(モーレル氏著獨逸借地法沿革史第一卷第三十七葉第

九十六葉ルンデー氏著獨逸私法論第三百十五節ヨリ第三百二十六節迄
スタイン氏著行政學及行政法必携第七十一葉參照、

○警察權ヲ以テ人民ノ主人及人民ノ幸福ヲ照顧スル者トスル誤謬ノ原理ヨリシテ内國人并ニ外國人ノ移居轉居ノ交通ハ一般ノ安寧秩序ニ關スル利害上ヨリ其ノ視察ヲナシ其ノ都度官衙ノ許可ヲ要スヘキモノトスルノ原則ヲ發生シ從ツテ又々通行免狀旅行免狀及ヒ他地方ニ移住スルニ官衙ノ免許ヲ附與スルノ制度起レリ而シテ今マ此ノ制度カ今日ニ於キテモ尙ホ其ノ影響ヲ及ホシタル重要ノ事件ハ左ノ如シ

(第一)外國人ハ法律ニ從ヒタル通行券ヲ有スルニアラサレハ國境內ニ入ルヲ禁止シ其ノ内地旅行ヲ爲サントスル者ハ其ノ制度特別ナル内地旅行券ヲ得サルヘカラス

(第二)内國人ノ國內旅行ハ法律上必スシモ其ノ旅行免狀ヲ携フルヲ

要セスト雖ヒ官衙ノ請求ヲ受ケタルキハ何時タリトモ其ノ身分ヲ證明スルノ義務ヲ有ス然レモ本國外ニ出ントスルニハ豫メ通行免狀ヲ受ケサルヘカラス

(第三)他ノ地方ノ人ニシテ三月以上寄留セントスル者ハ特別ナル寄留免許ヲ得サルヘカラス

(第四)一地方ニ來リテ宿泊スル者ハ其ノ地所轄ノ警察署ニ通報スルヲ要ス

(普國千八百十七年六月廿二日ノ通行規則バイエルン千八百三十七年一月十七日ノ通行令同上同年同月二十日ノ訓示リヨンチー氏著普國々法論第二卷第三百三十三節澳國千八百五十七年二月五日ノ達スツーベンラウハ氏著澳國行政法第一卷第百八十五節ペーツル氏著バイエルン行政法第八十節スタイン氏著行政必携第七十一葉モール氏著豫防警察論第十一節參照)

○古代ノ獨逸町村ノ法ニ於キテハ「マルク」ト稱セシ地主組合アリテ嚴正ナル封鎖ヲ爲シ此ノ「マルク」ノ組合外ノ者ニシテ此ノ組合ニ加入セント欲セハ組合一同一致ノ上免許金若クハ加入金ヲ上納セシメテ後初メテ之レヲ許可スヘキモノトセリ（モーレル氏著獨逸マルク組合沿革史第百十二葉參照其ノ後ノ町村法ハ營業及ヒ共同救済ノ精神ニ出テタル團結ノ勢力ヨリ發生シタル制度ニシテ組合外ノ者ハ其ノ組合團結ノ町村ニ永住スルヲ禁シ又ハ民權ノ得有加入金ノ上納共濟ノ能力アル證據等種々困難ナル條件ニ適合スル者ノミノ加入ヲ許シタル如キハ皆曠昔町村團結法ノ制限ニ由リテ移住ノ自由未完カラサリシ事實ヲ證スルニ足ルヘシ千八百二十七年七月六日ノ「ハノーブル」戶籍法千八百三十四年十月二十三日ノ「クルセツセン」町村法千八百五十四年七月廿六日ノ「ナツソー」町村法リヨンネー氏著普國々法論第一卷第二章第九十節第四十九葉附論第一ヒルト氏ノ北獨聯邦第一年報第

四百七十五葉參照普國ニ於キテハ已ニ千八百四十二年十二月三十一日ノ法律ヲ以テ移住自由ノ大要ヲ認了シ「バイエルン」ニ於キテモ亦千八百二十五年九月十一日ノ戶籍法ヲ以テ移住自由權ノ幾分ヲ許容セリ

第五十五節 通行移住ニ關スル成規

狹義ニ於ケル住所ト暫時若クハ一定セサル滞在トハ之レヲ區別シテ混同スヘカラサルモノトス而シテ滞在ノ場合ニ於キテモ曠昔ハ種々ノ制限就中通行免狀ノ如キ制度アリタレトモ今日ニ於キテハ全ク移轉ノ自由ナルヲ得タリ

（千八百六十七年十月十二日ノ旅行券ニ關スル聯邦法律千八百六十七年十二月九日同上「バイエルン」達及獨逸根本法第一條「ベーツル」氏著「バイエルン」行政法第九十節第九十二節參照）

佛國ニ於キテハ移住ハ一般全ク自由ナレモ巴黎リヨン兩府ニ於キテハ府知事ハ内務卿ノ認可ヲ得テ二年間以内府内ニ住居スルコトヲ禁スルコトヲ得ルブロッグ氏政治字典中滞在ト題スル項参照

今マ移住ニ關スル細目ノ制限ヲ畧舉セハ即チ左ノ如シ内國人(帝國人民)ト外國人トヲ問ハス凡テ帝國ノ範圍内ニ出入シ又ハ居住旅行セントスル者ハ一切通行若クハ旅行券即チ官衙ノ許可ヲ經タル免狀ヲ要セス然レモ官衙ノ請求アルニ際シテハ其ノ身分ヲ證明スルノ義務ヲ有ス

(千八百六十七年十月十二日旅行券ニ關スル聯邦法律第一節ヨリ第三

節迄同年五月十日澳國達スマイン氏著行政必携第九十三葉リヨネ

氏著普國々法論第二卷第三百三十三節等参照)

外患内憂ノ時ニ際シテハ公ケノ安寧秩序ヲ保タンカ爲

メニハ帝國ノ權力ヲ以テ通行免狀ノ制限ヲ設クルコトヲ得ル

(千八百六十七年十月十二日聯邦法律第九節参照)

然レモ何人ニテモ尙一層通行ノ安全堅固ヲ得ンカ爲メニ官衙ノ免許ヲ得ルハ妨ケナシトス而シテ斯カル免許券ニシテ聯邦中相當ナル官衙ヨリ受ケタル者ニ係ル時ハ全帝國ノ範圍内ニ於キテハ充分ノ効力ヲ有ス

(同上聯邦法律第一、四、六條参照)

通行券及旅行券ニ關スル公證稅并ニ下附手数料共一「タ」
「レル」以上ノ金額ヲ超過スヘカラス但シ公使及領事ハ一切ノ費用ヲ納メスシテ通行券ヲ受クルコトヲ得ル

(同上聯邦法律第八節参照)

居住證票ノ制度ハ決シテ之レヲ再興スルヲ得ス又々現

ニ此ノ制度ヲ行フタル地方ニ於キテハ尙之レヲ存スル
トヲ得ス然レモ此ノ原則ハ新ニ移住シタル者及ヒ外國
人ニ關スル管督及ヒ無宿者送致等ニ關スル制規ト抵觸
スルトナシ

(同上聯邦法律第十節千八百六十七年十一月一日移住條例第三節參照)
此ノ制規中ニ屬スル者ハ就中怪ムヘキ風體ノ旅人旅宿ニ宿泊シタル
外國人等ハ旅人宿主又ハ其ノ他ノ人民ヨリ所轄ノ警察署ヘ通報セシ
ムルカ如キ規則ノ類ナリ(リヨンチー氏著普國々法論第二卷第三百三
十四節ペーツル氏著バイエルン行政法第九十節スツーベンラウハ氏
著澳國行政法第百八十五節參照)

旅行券ヲ携帯セス又ハ贋造ノ旅行券ヲ所持シ若クハ贋
造ト知ツテ之レヲ使用シタル者ハ法律上之レヲ罰ス
(千八百七十年刑法第三百六十三節バイエルン千八百六十一年違警罪

則第七十八條參照)

第五十六節 內國人移住

住所ハ其ノ內國ニ止マルモノト外國ニ及フモノト及ヒ
聯邦民ニ關スルモノト聯邦民ニアラサルモノトノ區別
ヲ爲サ、ルヘカラス

(千八百六十七年十一月一日聯邦移住條例普國千八百四十二年十二月
三十一日新住者ノ住所ニ關スル法律バイエルン千八百六十八年四月
十六日ノ生産婚姻住所ニ關スル法律バーデン千八百七十年五月五日
移住法澳國千八百六十七年十二月二十一日國憲第四條及第六條ヒル
ト氏第一年報第四百六十九葉リヨンネー氏著普國々法論第一卷第二
節第九十節ペーツル氏著バイエルン行政法第九十節參照)
右第一ノ場合ニ於キテハ內國ノ居住ハ今日全ク自由ニ
シテ制限スルトナシ故ニ各聯邦民ハ聯邦ノ範圍内ニ於

キテハ何レノ處ニテモ居住滞在スルノ權如何ナル不動
産ヲ問ハス皆ナ之レヲ所有シ得ルノ權本國內有効ナル
法律ニ從ヒ如何ナル營業ト雖モ之レヲ爲シ得ヘキ權ヲ
有ス而シテ此ノ權利ノ有無ハ何人ト雖モ苟モ聯邦民タ
ランモノニハ宗旨ノ異同各邦民若クハ都邑民タル資格
ノ差異ニ關係スル所ナシ

(千八百六十七年十一月一日聯邦法律第一節バイエルン千八百六十六
年一月三十日ノ法律第一條及第二條ヒールセメンツェル氏著北獨聯邦
憲法第二卷第百五十八葉參照)

○本文ニ本國ト稱スルハ國民タル資格及都邑民タル資格ヲモ包有ス
(ヒルト氏第一年報第四百七十六葉參照)

○故ニ居住滞在土地所有ニ關スル現存ノ法律上ノ制限ハ其ノ法律上
明許セラレタル營業ニ於キテハ凡テ之レヲ廢止セサルヘカラスヒル

セメツェル氏著同上第百五十八葉千八百六十九年六月二十一日ノ聯邦
營業條例參照)

新住者届出ニ關スル警察上ノ制限ハ之レヲ各邦ノ立法
權ニ委任ス然レモ此ノ届出ヲ怠リタル者ハ違警罪ヲ以
テ之レヲ罰スルニ止マリ居住ノ權利ヲ奪フニ至ルヘカ
ラス

(千八百六十七年十一月一日ノ聯邦法律第二節又第十節バイエルン千
八百六十八年四月十六日ノ法律第四十四條リヨンネー氏著普國々法
論第一款第二節第六十四葉ペーツル氏著バイエルン行政法第九十節
及ヒ本書第五十五節參照)

○警察權ヲ以テ直接ニ居住ノ權利ヲ奪フヘカラサルノミナラス或ハ
居住ノ權利ヲ以テ有名無實トナラシメ或ハ適當ナル疑ノ存セサルニ
聯邦民タル資格ノ證據生産證書ヲ提出セシムルヲ命スル等ノフニ

ヨリ此ノ權利ノ使用ヲ妨クルカ如キコアルヘカラス又居住證票ヲ附
 與スルノ制度ハ法律ヲ以テ嚴禁スヘキモノタリ(千八百六十七年十月
 十二日通行免狀ニ關スル聯邦法律第十節千八百六十七年十一月十八
 日普國勅命リヨンチー氏著普國々法論第一卷第二款第五十四葉參照)
 入籍金ハ其ノ都邑ニ入ルモノト救貧組合ニ加ハル時ト
 ヲ間ハス凡テ之レヲ徵收スルコトヲ得ス然レモ三ヶ月以
 上居住スル者ハ其都邑稅ヲ負擔セシムルコトヲ得ル

千八百六十七年十一月一日ノ聯邦法律第八條及第九條參照)

移住自由ノ權利ハ各人之レヲ有スト雖モ單ニ住居シ及
 ヒ住所ヲ定メタルノミニテハ其ノ他ノ權利即チ都邑民
 タルノ權各地方民ニ特別ナル權利都邑財產及救貧組合
 ニ加入スルノ權ト關係スルコトナシ但シ各邦法律ニ從ヒ
 住居若クハ住所ヲ定ムルト同時ニ本籍ニ屬スル權利ヲ

得ヘキモノナル片ハ此限ニアラストス

(千八百六十七年十一月一日聯邦法律第八節及第九節バーデン千八百
 七十年五月五日ノ法律第一節ヒールセメンツェル氏著北獨憲法第二卷
 第百六十七葉ヒルト氏第一年報第四百八十六葉參照)

公ケノ秩序ニ關スル利害又ハ救貧事務ニ關スル成規ニ
 ヨリ移住自由ノ原理ニ反スル例外ノ場合ナキニアラス

(バイエルン第千八百六十八年四月十六日ノ法律第四十五條バーデン
 千八百七十年五月五日ノ法律第一節參照)

左ノ場合ニ於キテハ居住ノ權ヲ拒絕シ又ハ剝奪スルコト
 ヲ得ル

第一處罰セラレタル者ハ國法ニ從ヒ之レニ住所ニ關ス
 ル制限ヲ施スコトヲ得ル

(千八百六十七年十一月一日ノ聯邦法律第三節バイエルン千八百六十

八年四月十六日ノ法律第四十五條普國千八百四十二年十二月三十一日ノ法律第二節參照)

此ノ制限ヲ適用スルハ主トシテ刑事裁判ニ依リテ移住ノ自由ヲ制限セラレシ者及ヒ主刑ヲ了リタル者ト雖モ尙ホ公ケノ安寧道義ヲ保スルカ爲メニ之レヲ警察ノ監視ニ附スルノ場合トス(リヨン子一氏著パリエルン行政法第八十九節千八百七十年刑法第三十八節及第三十九節參照)

第二十二ヶ月來各聯邦内ニ於キテ常ニ乞食流浪ヲ事トシタル爲メニ處刑セラレタル者

(千八百六十七年十一月一日聯邦法律第三節參照)

第三自分并ニ其ノ家族ヲ養育スルカ爲メニ日常ノ衣食ヲ得ヘキ充分ノ能力ナキ旨ヲ所屬ノ都邑ニ證明シタル者

(同上聯邦法律第四節參照)

現在赤貧ニ陥リタルニアラス後來貧困ニ迫ルヘキ患ノミニテハ未タ此ノ成規ヲ適用スヘキ者ニアラス

○充分ナル能力トハ體力并ニ精神力ヲ包含ス然レモ道德ノ不完全ナルヨリ其ノ能力ヲ使用スルヲ能ハサル旨設令ヘハ常ニ多飲ノ癖アル者ノ如キハ此ノ成規ヲ適用スヘキモノニアラストス(普國千八百四十三年七月九日及千八百六十年二月二十三日ノ勅命リヨン子一氏著普國々法論第一卷第二章第六十葉參照)

第四(定)マリタル宿所若クハ家屋ナキ者

(同上聯邦法律第一節參照)

宿所ナキ者トハ眞ニ一定シタル營業若クハ職業ナキ者ヲ指スモノニアラス只々適當ノ寢食スヘキ所ナキ者ヲ云フ又警察官衙ハ確定シタル宿所ヲ検査指定スルノ權ナシ(普國千八百六十八年八月三十一日ノ

内閣命令リヨンチー氏著普國々法論第一卷第二章第五十二葉參照
第五久シク職業ニ就ク丁能ハスシテ未タ本籍ニ入ル丁
ヲ得サル以前ニ公ケノ救助ヲ受クル者

(同上聯邦法律第五節參照)

單ニ救助ヲ要スヘキモノト公ケノ救助ヲ受クル者トヲ同視スヘカラ
ス此條ヲ適用スル場合ハ斯カル公ケナル救助法ニヨリテ公ケニ認了
セラレタル者ニ限ルヘシ(リヨンチー氏同上第六十二葉參照)

第六幼者婦女子等ニシテ其ノ父母後見人又ハ夫ノ拒絕
スル所トナリシ者

(同上聯邦法律第二節參照)

公ケノ救助ノ制ニ關スル紛議ハ聯邦法律ノ成規ニ從ヒ
及各邦ノ立法權内ニ委任セラレタル法律ニ從ヒ之レヲ
判決ス然レモ救助ヲ受クヘキ者ニシテ其ノ救助ヲ受理

セントスル都邑ノ認可若クハ此ノ救助ヲ受理スヘキ旨
ノ裁判アリタル後ニアラサレハ現ニ之レカ放逐ヲ實行
スル丁アルヘカラス

(リヨンチー氏著普國々法論同上第六十八葉千八百七十一年十一月八
日ノ帝國法律ヒルト氏第一年報第四百七十八葉同第四年報第四百三
十一葉千八百六十七年十一月一日聯邦法律第六節及第七節參照)

法律ニ於キテ明許シタル場合ノ外苟モ聯邦民タル以上
ハ警察權ヲ以テ之レヲ其ノ永住若クハ滞在ノ場所ヨリ
立退カシムル丁アルヘカラス

(千八百六十七年十一月一日聯邦法律第十二節リヨンチー氏著普國々
法論第一卷第二章第五十七葉參照)

第五十七節 外國人移住

外國人(聯邦民ニアラサル者)ニシテ聯邦内ニ入りテ居住

セントスルニハ豫メ官衙ノ許可ヲ要セス又々通行券若クハ其ノ他ノ免狀ヲ携帯スルノ義務ナキモノトス

(千八百六十七年十二月十二日通行券ニ關スル聯邦法律第二節バイエルン千八百六十八年四月十六日本籍住所等ニ關スル法律第五十條參照)

然レ臣官衙ノ請求アル場合ニハ適當ニ其ノ身分ヲ證明スルノ責ニ任シ且ツ其ノ目的ニシテ單ニ内地旅行ニアラスト思慮スヘキ時ハ之レヲ差留タル上尙其ノ本籍證書ヲ差出サシムルヲ得ル

(千八百六十八年四月十六日ノバイエルン法律第五條千八百六十七年十月十二日聯邦法律第三節參照)

又單ニ聯邦民タル者ノミニ屬スル移住自由ノ權利(第五十六節參照)ハ一邦内ニ於キテ各邦民タル資格ヲ得有シ

タルモノニアラサレハ之レヲ有スルヲナシ

(リヨンチー氏著普國々法論同上第五葉ペーツル氏著バイエルン行政法第九十二節參照)

然レ臣外國人ト雖臣警察及刑法ニ服從セサルヘカラス而シテ警察及法衙ノ保護ハ内國人同様ノ規則ニ依リテ之レヲ受クルヲ得ル(但シ内外人ノ保護ニ關スル差異ハリヨンチー氏同上第六葉ヲ參照スヘシ)佛國民法第百〇二條ニ於キテハ住所ヲ以テ民權ヲ行フヘキ首タル住居ノ場所ナリト云ヒ而シテ此ノ民權ナル者ハ本來只々佛國人ノミニ屬スヘキモノトスレ臣民權ト國民タル權利トハ素リ別種ノ者ニシテ二者更ニ相關係スル所ナシ

移住權中ニ包有スル格段ナル權利設令ヘハ營業權、不動產得有權、居住權ノ如キハ或ハ特別ノ法律ニ依リ或ハ諸國條約ニ依リテ許容シ此等權利ノ使用權ハ或ハ彼我ノ

權衡條約ノ條件ヲ基シテ之レヲ許否スルモノナリトス

○特別ノ法律ニ依リタル場合ハ千八百六十九年六月廿一日ノ聯邦營業條例第一節第十二節第五十七節千八百六十八年一月三十日バイエルン營業條例第二條參照)

○諸國條約ヲ以テ規定スル場合ハ主トシテ營業商業航海ニ關スル者トス(設令ヘハ千八百六十七年七月八日ノ聯合關稅法第二十六條及第二十八條千八百六十八年三月九日澳國條約第十二條同年同月三十日西班牙條約第七條ヨリ第九條迄千八百六十五年八月十六日普英條約等ノ如シ)

○彼我ノ權利ニ基キ此ノ權利ヲ外國人ニ許否スル場合ハ千八百六十八年一月三十日ノバイエルン營業法律第二條及ヒ佛國民法第十一條等ノ如シ(同法同條ニ曰ク佛國ニ於ケル外國人ハ其ノ本國ト佛國ト取結ヒタル條約ニ因リ其ノ國ニ於テ佛國人ニ授ケ又ハ後來授クヘキ者

ト等シキ民權ヲ有スト

然レモ外國人ハ内國人同様ノ諸事由(第五十六節)アル場合ニノミ其ノ住所ヲ逐放スル事能ハス而シテ之レヲ聯邦範圍外ニ逐放スルニハ公ケノ利害即チ公安秩序ヲ保スル爲メ之レヲ要スル理由アルカ或ハ外國ノ政府ニシテ我邦民ヲ放逐シタル爲メニ我ニ於キテモ亦彼ノ邦民ヲ我カ邦内ヨリ放逐スルノ返報ニ出テタル者ナルカ何レニシテモ必ス相當ノ理由アルヲ要ス

○公安秩序ヲ保スルカ爲メニスル場合ハ千八百六十八年四月十六日バイエルン法律第五十條千八百七十年五月五日バーテン法律第四節ニ記スルカ如シ又外國人ノ濟貧救助ニ關スル者ハ千八百七十年六月六日ノ聯法法律第六十節ヲ參照スヘシ
○重輕罪犯ノ裁判宣告ヲ受ケ又ハ法律上ノ理由ヨリ都邑内ヨリ放逐

セラレタル外國人ハ之レヲ内國ヨリ放逐スルヲ得ヘシ
 國家ノ利害ニ關係アルノ理由ヨリ外國人ヲ放逐スルノ權ハ只々國家
 最高ノ官衙ニ屬ス然レモ場合々々ト人トニ由リテ放逐ヲ爲スニアラ
 ス外國人タランモノハ一般ニ之レヲ國外ニ放逐スルノ場合設令ヘハ
 戰時ニ於キテカハル處置ヲ爲スカ如キハ社會法律ノ原理ニ反スル者
 ナルニ似タリ千八百六十八年四月十六日バイエルン法律第五十條千
 八百五十二年十一月五日普國達千八百七十年刑法第三十九節第二百
 八十四節第三百六十一節第三百六十二節リヨンネー氏著普國國法論
 第二卷第三百三十五節ペーツル氏著バイエルン行政法第八十九節參
 照)

放逐ヲ爲スニ必要ナル場合人多クハ諸國條約ヲ以テ之レヲ定ム千八
 百七十一年帝國憲法第三條千八百五十一年七月十五日ノコーテール
 條約及同上普佛魯三國ノ關係ハリヨンネー氏著同上第三百三十五節

參照

放逐シ得ヘキ外國人ハ只々其ノ外國人ハ何國民タルヤ否確明ニシテ
 疑ナキ者ノミニ限ルペーツル氏著同上第八十九節第九十三節參照)
 外國人ヲ放逐シ得ヘキ國家ノ權利ヲ以テ本則トナシ國家ハ隨意ニ外
 國人居住ノ權利ヲ許否シ得ヘキモノト誤解スルコトアルヘカラス要ス
 ルニ居住ノ權利ハ本來社會法上ニ屬シテ全ク國家ト分離シテ獨立ス
 ヘキ者ナレモ只々此ノ權利ノ使用ニ至リテハ國家ノ利害ノ爲メニ服
 從セラルヘコトアルノミ(本書第三節第十五節及ブロック氏政治字典第二
 卷中ヘリエー氏ノ所論ニ係レルドローアド、セジュールト題スル項ヲ參照
 スヘシ)而シテ佛國ニ於キテハ外國人ハ國家元首ノ允許ヲ受ケテ初メ
 テ後居住ノ權利ヲ得且ツ諸般ノ民權ヲ享有スルコトヲ得ルモノトシ共
 ノ他ノ事項ニ關シテハ凡テ彼我ノ權衡ヲ以テ法律ノ原則トセリ(佛國
 民法第十一條及第十三條及ヒ行政上ノ理由ヨリ外國人ヲ放逐スル權

利ヲ以テ行政政府ニ委ネタル千八百四十九年十二月三日ノ法律ヲ參照スヘシ)

犯罪人逮捕刑罰執行若クハ兵役服務ノ目的ヲ以テ外國政府ヨリ本國在留ノ外國人ノ引渡ヲ請求シタル場合ニハ特別ノ條約アルニアラサレハ其ノ請求ニ應スルト否トハ各國政府ノ自由ナリトス

内國人ハ勿論在留外國人ト雖其ノ本國政府ノ請求アルニアラサレハ之レヲ外國政府ニ引渡スヲナシ(千八百七十年二月九日北獨聯邦ト白耳義トノ條約千八百五十二年六月十六日合衆國トノ條約及ヒ千八百七十年二月二十二日ノ同上條約第三條ベーツル氏著同上第九十二節リヨンネー氏著同上第二卷第五百三十二節參照)

第五十八節 脫籍移住ノ自由

各聯邦民タル者ニシテ單ニ外國ニ居住スルハ全ク其ノ

自由ニシテ豫メ許可若クハ旅行券ヲ携帶スルヲ要セス
(千八百六十七年十二月十二日旅行券ニ關スル聯邦法律第一條及第二條千八百六十七年十二月二十一日澳國々憲第四條及千八百五十七年二月九日澳國達第三節參照)

然レ凡外國寄留ノ爲メニ本國ニ盡スヘキ義務就中兵役ヲ免ル、トヲ得ス又戰時若クハ開戰ノ情況アル時ニ際シテ外國在留ノ本國人ニ向テ其ノ歸國ヲ命スルモ之レニ應セサルモノハ其ノ國民タル資格ヲ剝クトヲ得ル

千八百七十年六月一日ノ聯邦法律第二十節及第二十二節リヨンネー氏著同上第一卷第二章第二十六條ヒエールメンツェル氏北獨逸憲法第二卷第百五十條參照)

國籍ヲ脫スヘキ外國移住ハ全ク各人ノ自由權ニシテ只々國家ノ權力ニ由リ兵役義務ヲ完了セサル事由ヲ以テ

之レヲ制限スルノ外アルヘカラス

(千八百五十年ノ普國憲法第十一條千八百十八年ノバイエルン憲法第四篇第十四條千八百六十七年十二月廿一日ノ澳國憲法第四條リヨンネー氏著同上第九十一節參照)

昔日ニ在リテハ脱籍ノ權利ハ法律上充分ニ之レヲ認了セサリシト雖
但宗教自由ヲ許サ、リシ諸邦ニ於キテハ或ハ此ノ權利ヲ確認セルヲ
ナキニアラス然レモ已ニ千八百十五年ノ聯邦法律第十八條ヲ以テ聯
邦中ニ在リテハ彼我ノ間相互ニ移住スルノ自由ヲ許容セリ(宗教平和
ノ條款第十一條ウエストフアリアノ平和條款第五條第三十節リヨンネー
氏著同上第一卷第九十一節參照)

私法上ノ故障設令ヘハ夫婦ノ權父母ノ權後見人ノ權債主ノ負債主ニ
對スル權等ヨリ生スル障碍又ハ在監未決已決ノ囚徒ニ關スル制限等
アル場合ニハ事實上脱籍移住ノ自由權ヲ行フコト能ハス故ニ後見人ニ

附セラレタル幼者ノ如キニ在リテハ豫メ後見人タル者ノ承諾アルヲ
要ス(普國千八百五十三年十一月七日及十月三日達リヨンネー氏著同
上第一卷第二章第二十五葉及第七十五葉參照)

脱籍移住セントスル者ハ敢テ脱籍ノ許可ヲ要セスト雖
モ其ノ住所ノ在ル地ノ警察官衙ニ於キテ先ツ其ノ籍ヲ
除却セサルヘカラス然ル片ハ官衙ヨリ脱籍移住者ノア
ル旨ヲ公告シ移住者ノ債主等ヲシテ定期ノ時限内ニ之
レニ對スル故障ヲ申立ツルノ便ヲ與フ

(リヨンネー氏著同上第九十一節ベール氏著バイエルン憲法第三十
一節及第三十二節千八百〇三年十二月十六日バーデン法律千八百六
十七年七月十九日同上達參照)

故ニ不合格ノ移住者ハ素リ稀少ナレモ昔日ニ於ケルカ
如キ刑罰ハ今日已ニ之レヲ執行セス只タ移住ニ由リテ

兵役ノ義務ヲ逃レタル者ノミ刑法ヲ以テ之レヲ問フ丁
アルノミ

(千八百七十年刑法第四百十節千八百七十一年帝國憲法第五十九條參
照)

移住金ハ一切之レヲ上納スルヲ要セス

(千八百〇九年十月九日ノバーデン法律普國千八百五十年ノ憲法第十
一條參照千八百六十七年十二月廿一日ノ澳國々憲ニ於キテハ移住金
ノ徵收如何ハ彼我ノ權衡ニ由ルモトセリ尙リヨンネー氏著同上第
一卷第二章第七十七條及第七十八條參照)

獨逸國外ノ植民及移住ハ帝國法律及ヒ管督ニ從フ

(千八百七十一年帝國憲法第四條參照)

第五十九節 移住民ノ保護

移住志願ノ人民ハ其ノ移住セントスル地ノ言語事情等

ニ通曉セサル者多ク自ラ其ノ移住ニ必要ナル事務ヲ結
了スル事能ハサルカ故ニ此等移住民ノ爲メ移住諸般ノ
事務就中渡航衣服給料等ニ關スル契約ヲ取扱フヘキ特
別ノ事務引受所ヲ設置スル丁アリ而シテ此ノ事務引受
所ハ多ハ之レヲ外國ニ置キ移住民發途ノ地ニハ移住事
務引受所ノ全權ヲ有シタル代理所ヲ置クヲ常トス〇此
ノ政務所及其ノ代理所ノ主務ハ移住民ヲ保護シテ詐偽
ノ計ニ陥リ危難ニ遭遇スル丁ナカラシムルニ在リ而シ
テ此等ノ事務所ハ一般營業規則ニ由ラス特別ナル警察
上ノ管督ヲ受ケ左ノ條規ニ從ハシム

(千八百六十九年聯邦營業規則第六節普國千八百五十三年九月九日ノ
規則及ヒ同年五月七日ノ法律バイエルン千八百六十二年六月七日ノ
達及同年同月十二日ノ告示千八百六十一年違警罪則第五十一條バ―

デン千八百六十五年十一月七日達千八百六十三年違警罪則第三百三十三節及第三百三十四節ハンプルヒ千八百六十五年二月二十日ノ達リヨ
ンネー氏著普國々法論第二卷第二章第四百〇二節スタイン氏著行政
法及行政學必携第七十八葉モール氏著警察學第一卷第二十節參照
外國ノ意ニ由リ移住民ト契約ヲ取結ハントスル者ハ其
ノ本人ノ名義ニ於キテスルト代理者ノ名義ヲ以テスル
トニ關セス凡テ官衙ノ許可ヲ得サルヘカラス

(普國千八百五十三年五月七日ノ法律第一節及第七節パーデン千八百
六十五年十一月七日達第一節及第二節參照)

何時ニテモ取消シ得ヘキ契約ハ一定ノ期日內(一ケ年)ヲ
限り不評判ナキ確カナル内國人ノミニ之レヲ許可ス且
ツ又其ノ代理人タル場合ニハ其ノ住居ノ地ノ法律ニ從
ヒ移住ニ關スル全權ヲ有スルノ證ヲ示サ、ルヘカラス

(普國同上法律第二節第三節及第七節パーデン同上達第十三節參照)
右移住事務引受人ノ許可ハ豫メ保證金ヲ拂ハシメテ後
初メテ之レヲ與フルトヲ得ル此ノ保證金ハ法律ニ定メ
タル成規ヲ執行セシメ且ツ移住民ノ衣服給料等救助ノ
用ニ供フ

(普國千八百五十三年ノ法律第五節同年規則第八節ヨリ第十四節迄バ
ーデン千八百六十五年ノ達第四節メクレンブルヒ、シュハリン千八百六
十四年達第三節參照)

メクレンブルヒ、シュハリン同上ニテハ移住事務引受人ニハ各々一萬タ
ーレルノ保證金ヲ收メシメ事務結了又ハ允許ヲ取消シタル場合ニハ
之レヲ返却ス

各移住引受人又ハ其ノ代理人ハ移住ノ條件就中出立ノ
月日場所ニ移住スヘキ地、船賃及ヒ拂渡シノ金額等ヲ記

シタル證書ヲ移住契約ヲ取結ヒタル對手人ニ渡サ、ル
ヘカラス

(普國千八百五十三年ノ規則第二節バーデン千八百六十五年達第八節
及第九節メクレンブルヒ、シユハリン千八百六十四年達第五節參照)

移住契約ハ其ノ移住セントスル者ニ就キ法律上ノ故障
ナキ旨豫メ官衙ヨリ附與シタル證據アルニアラサレハ
結了スルヲ得ス

(豫メ官衙ノ移住免許及ヒ通行免狀ノ制ハ今日ニ於キテハ甚タ必要ナ
リトセズ千八百六十七年十月十二日ノ聯邦法律參照)

第七章 本籍

第六十節 本籍權ノ本性

本籍トハ何人ヲ問ハス其ノ天然上ニ於ケル形體ノ存在

ニ屬スル事爲(出產婚姻及ヒ居住若クハ人爲ニ係レル適
法ノ行爲(人籍ノ許可等)ニ由リ人々各々屬スル所ノ地ヲ
云ヒ本籍權トハ此ノ所屬地ニ固有ナル各人有スル所ノ
諸權利ヲ包括ス而シテ此ノ本籍權ノ有無ハ住居權ニ基
キタル一種ノ權利即チ各人其ノ飢寒切迫ノ場合ニ臨ミ
テハ其本籍地ニ居住シテ相當ノ救恤ヲ受クルノ權利ト
重大ノ關係ヲ有ス

(バイエルン千八百二十五年九月十一日ノ本籍條例第五節クル、サク
セン千八百三十四年十一月廿六日ノ本籍條例ウルテンブルヒ千八百
三十三年十二月四日ノ民權ニ關スル改正條例ヒツ、エル氏著濟貧法
及移住法論第七節參照)

獨逸ノ本籍法ニ於キテハ各人必ス一ツノ本籍ヲ有スル
ヲ即チ必ス一地方組合ニ屬セサルヘカラサルヲ以テ

其ノ一大原則トナシ各人ハ如何ナル事情アリトモ自ラ
其ノ本籍地内ニ居住スルノ權ヲ有シ地方組合ハ其切迫
ノ場合ニ於キテハ其本籍内ニ居住スル人民ノ飢渴ヲ救
育保護スルノ責ニ任ス故ニ本籍權ハ單ニ居住若クハ寄
留ノ權ト異ナレト二者素リ相密着スルアルヘキハ必
然ナリ

ピツ、エル氏ハ單純ナル居住ノ地ト住所トヲ區別シ從ツテ又其ノ權
利ヲモ區別シテ住所權ノミ獨リ本籍權ト一致密合スヘキモノトセリ
然レモ住所權ハ寧ロ之レヲ一般社會上ヨリスルモノト町村團結上ヨ
リスル者トニ區分シ其ノ町村團上ヨリスル者ノミ其ノ原則ヲ古代ノ
本籍法ニ取ルヘキ者トスルヲ常トス

本籍權ニ關スル事項ヲ規定スヘキ法則ハ左ノ二場合ニ
從ツテ之レヲ區別セサルヘカラス

(第一) 本籍ト固着シタル特權アルカ爲メニ本籍權及本
籍權中ニ含有スル本籍内居住ノ權利ヲ許容スルハ只タ
一定シタル制限ノ條件ヲ具ヘタル者ノミニ限ル場合

(第二) 自由ナル居住權ノ原理ニ基キタル場合

右二様ノ場合中第一ノ場合ニ於キテハ所謂其本籍權ナ
ル者ハ著ルシク一地方ニ固有ナル性質ヲ帶ヒ本籍權ノ
有無ハ町村團結ニ屬スルト否トニ一大關係ヲ有スレト
第二ノ場合ニ於キテハ本籍權ノ有無ハ自由ナル居住權
ト密着シテ町村團結ト關係ナキカ故ニ所謂其ノ本籍權
ナル者ハ之レヲ第二ノ場合ニ比スレハ一層廣濶ナル一
般ノ社會ニ共通スヘキ性質ヲ帶フ故ニ第二ノ場合ハ一
種特別ナル本籍組合(即チ救育團結)ノ制度ヲ發生ス
第一ノ場合ハ如何ナル地方ヲ問ハス其ノ地方所屬ノ人民ハ其ノ地方

ニ於キテ之レヲ救助養育セサルヘカラストスル古代ノ法理ニ基キタルモノニシテ其ノ地方所屬民タル資格ノ得喪ハ社會法上ノ自由ナル居住權ノ原理ニ據ラス全ク人ト人トノ關係ニ成リタル世襲ノ組合員タル權利ニ基ケリ而シテ此ノ組合員タル權利ハ明許出產婚姻若クハ讓與ニ由リテ之レヲ得ヘク移住若クハ他ノ町村ニ屬スル組合員ニ加入スルコトニ由リテ之レヲ失ヘリ(千五百七十七年帝國警察規則第二十七款第一節及第二節千八百三十三年十二月四日ウラムブルヒ改正町村法ヲ參照スヘシ)又タバイエルン千八百二十五年ノ本籍法ニ於キテハ契約、定住、婚姻等外部ノ手段ニ由リテ得有シタル本籍ト本來固有若クハ讓受ケタル本籍トヲ區分セリ(ビッツェル氏著救貧及移住法第十六條ヲ參照スヘシ)

第二ノ場合ニ屬スル者ハ町村若クハ地方救助組合ニシテ往々廣大ノ區域ヲ有スルニアリ(千八百七十年七月六日發布ノ救貧住所ニ關スル

聯邦法律第三節及第五節參照)

上來論述シタル第一ノ場合ニ於ケル原理ハ盛ニ古代ノ本籍法ニ行ハレ町村ハ常ニ本籍團結ノ地ニシテ其ノ所屬ノ人民ヲ救助スルノ責任アリシカ故ニ各町村ハ其ノ組合加入許可ノ方法制限ヲ設ケテ可成丈町村加入ノ數ヲ減少センコトヲ計畫シ遂ニ各町村閉鎖ノ制ヲ成スニ至レリ

此ノ制度ノ結果タル遂ニ一町村内ニ定住シ及ヒ結婚ヲ爲スノ權利ハ民權ヲ有スル者又ハ特別ノ條件ヲ充タシタル者ニ限り且ツ其ノ町村ニ出產シタル人ト他ノ人トノ區別ヲ爲スニ至レリ(パーデン千八百三十一年十二月三十一日千八百五十一年二月十五日千八百六十二年十月四日ノ法律第一節第六節第十八節バイエルン千八百三十四年七月一日ノ法律第一節及第二節ビッツェル氏著救貧及移住法第八十二條ヲ

参照スヘシ

之レニ反シテ近世ノ立法ニ於キテハ充分ニ移住自由ノ
權利ヲ實行シ(第六章參看)貧困切迫ノ場合ニ際シテ救助
ヲ受クルノ權利ハ人々自由ニ定メタル住所ト必ス相密
着シテ併行スヘキモノトセリ

町村市府團結ハ其ノ所屬民併ニ住民ヲ救助スルノ義務ヲ有ス(救助住
所ニ關スル千八百七十年六月六日ノ聯邦法律新住民ノ認可ニ關スル
千八百四十二年十二月三十一日普國法律參照)

古代本籍法ノ原理ハ尙ホバイエルンニ於キテ其ノ跡ヲ存スル者アリ
即チ同邦千八百六十八年四月十六日發布ノ本籍婚姻及移住ニ關スル
法律ニ依ルキハ本籍權ハ出產地地位婚姻民權ノ享有及明許ニ由リテ之
レヲ得有スルコトヲ得ヘキモノトナシ且ツ其ノ明許ニ由リテ本籍權ヲ
得ントスルニ八十年間以上引續キ其ノ町村ニ居住シ嘗テ救助ヲ受ケ

タルコトヲ要ス

故ニ近世ノ法律ニ於キテハ實際上本籍トハ單ニ救助ヲ
受クヘキ住所ノ意ニシテ自由ナル移住權ニ基キ人々各
々該住所ニ於キテ救助ヲ得ヘキ權利ヲ生スヘキモノト
見做シ得ヘシ

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第十節參照)

佛國ニ於キテハ救助本籍ハ一ケ年間其ノ地ニ居住スルコトヲ以テ之レ
ヲ得ヘシト雖町村ニ對シテ救護ヲ請求スヘキ法律上ノ權利ヲ生スル
コトナシブロック氏著政法字典中「ドミシル」ト題スル項參照)

○英國ニ於キテハ千八百三十四年救貧修正條例ヲ以テ甚々狹隘ナル
定住法ヲ定メタリ(ブロック氏著政治字典中大英國ト題スル項第千百
四十四葉參照)

斯ク救助住所ノ思想ハ社會法上ノ結果ニ基キタル者ナ

レ氏本籍ノ思想ハ各人各個ヲ以テ町村團結ノ組合員ト
スル古代法ノ原理ニ據リタル者タルヲ知ルヘシ

獨逸本籍法ノ起源ハ古代日耳曼ノ地主統轄ニ發生シ人々各々其ノ本
籍ヲ有セサルヘカラサルヲ以テ其ノ原則トセリ而シテ此ノ古代ノ
日耳曼法ニ於キテハ地主ハ各々其ノ配下ノ人民ヲ救護スルノ責ニ任
シ低價ニ穀類ヲ買取リ危急ノ秋ニ際シテ其ノ配下ノ人民ヲ救助養育
ス然レ乞食無宿ノ徒ニ至リテハ何レノ地方ト雖レ之レヲ救護スルコ
ナク其ノ只タ能ク勞役ニ服スル者ノミ地主之レヲ照顧セリ故ニ各地
主タル者ハ可成斯カル救護ノ義務ヲ免レンカ爲メニ其ノ配下ノ人民
ヲ獎勵シテ他ハ地方就中他ノ市府ニ移住セシメントテ勉メタリモ
レル氏著獨逸作地法沿革史第一卷第三百十四葉ヲ參照スヘシ○又右
古代ノ制度ハ配下人民ノ移住婚姻ヲ制限シタルモ亦前同様ノ主意ニ
出テタレレ後世ニ至リテモ尙町村ニ於キテ此ノ制ヲ存スル者アリキ

第六十一節 救助住所權ノ得喪

今日ノ聯邦法律ニ於キテハ救助住所(即チ救助ヲ受クル
ノ權タル意ニ於ケル本籍權)ノ得有ハ町村ニ於キテ民權
ヲ得ル丁狹隘ナル町村組合ニ屬スル丁及ヒ町村ノ明許
ヲ得ル丁ノ諸條件ト更ニ相ヒ關スル丁ナシ蓋シ此ノ救
助住所ヲ得有スルノ權ハ公ケノ權力ニ由リテ規定セラ
レタル一般社會ノ發達進化ノ諸關係ニ基キタル各人各
個自身及各人各個ノ生活ヨリ發生セル權利ナリ

千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律ハ特ニ救助住所ニ社會法上ノ
性質ヲ附與シ各邦ノミニ限リタル狹隘ノ區域ヲ解キナレバ全國民共通ノ基
礎上ニ其ノ法律制度ヲ置ケリ故ニ同法律第一節ニ於キテハ其ノ法律
ヲ以テ聯邦民ニ通シテ適用スヘキ旨ヲ明言シ從來行ハレタル各地方
特別ナル制規ヲ廢シタリ

救助住所ハ左ノ條件ニ由リテ得有セラルヘシ

第一、相續、正統ノ子若クハ正統ノ子ト同視スヘキ子ハ其ノ父若クハ往々其ノ母(寡婦)ノ救助住所ヲ得有シ私生ノ子ハ其ノ母ノ救助住所ヲ得有ス又々父母離婚シタルノ場合ニハ其ノ母ニシテ若シ其ノ子ノ教育權ヲ有スル片ハ正統ノ子ハ其ノ母ノ救助住所ヲ得有ス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第九節及第十八節ヨリ第二十節ニ至ル迄參照)

父ノ死亡シタル場合ニハ其ノ子タル者ハ其ノ父ノ救助住所ヲ得有ス但シ其ノ子ニシテ此ノ住所權ヲ失ヒ又ハ他ノ救助住所權ヲ得有シタル時ハ此ノ限ニアラス

第二、婚姻、婦タル者ハ結婚シタル期日ヨリ其ノ夫ノ救助住所ヲ得有ス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第九節及第十八節ヨリ第二十一節迄參照)

寡婦及法律上正當ニ離婚シタル婦ハ自ラ其ノ救助住所權ヲ失ヒ又ハ他ノ救助住所ヲ得有スルニ至ル迄ハ其ノ婚姻中ニ得有シタル救助住所ニ屬スヘキモノトス又夫婦ノ關係尙ホ存スルモ婦ニシテ故意ニ其ノ夫ヲ追ヒ或ハ其ノ夫ニシテ監獄内ニ禁錮セラレ或ハ夫ノ承諾若クハ法庭裁判ノ爲メニ夫婦各々分居シテ夫ノ救助ヲ受ケサル場合ト雖婦タル者ノ救助住所ノ得喪如何ニ影響スル所ナシ

第三、二十四歳以上ニシテ自ラ自由ニ其ノ住所ヲ撰定シ地方救貧團結内ニ於キテ二ケ年間以上引續キ住居シタル者ハ其ノ地ニ救助住所ヲ得有ス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第九節ヨリ第十二節迄參照) 二ケ年間ノ時期中ニ人々自ラ其ノ住所ヲ撰定スルノ自由ヲ拒絶セラ

ルヘキ事情ノ生スルキハ其ノ時間ハ之レヲ二ケ年間ニ算入セス即チ
僧正教師若クハ公私ノ役員トナリ或ハ之レヲ罷メ又ハ陸海軍々役ニ
服スル等凡テ各自自由ナル住所ノ撰定ヲ妨クル者ナリ(同上法律第二
十六節參照)

二ケ年ノ期限ハ通常住居ヲ初メタル日ヨリ起算シ奴僕職人雇人小作
人等ニ在リテハ法律又ハ地方ノ慣例ニ由リテ定マリタル期限ヲ以テ
住居ノ年限ヲ起算ス但シ斯ク習慣又ハ法律ニ由リテ定メタル期限ハ
現ニ居住ヲ初メタル日トノ間七日間以上ヲ超過スヘカラス且ツ病院
攝生院等ニ入院シタルノミニテハ居住ヲ始メタルモノトシテ起算ス
ルコトアルヘカラス(同上法律第十一節參照)

右二ケ年ノ期限中ニハ救貧團結ヨリ公ケノ救助ヲ受ケ
タル時日ヲ算入セス又救貧義務ヲ負擔スルノ責任アル
ヘキ旨ヲ以テ救貧團結ヨリ法律上ノ起訴ヲ受ケタル并

ハ右ノ期限ヲ中斷セララルヘシ但シ此ノ起訴ニシテ無効
ニ歸シ又ハ二ケ月ヲ經テ尙ホ其ノ訴訟ヲ繼續セサル場
合ハ此ノ限りニアラス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第十四節參照)

救助住所ハ左ノ條件ニヨリテ消滅ス

第一、 他ノ救助住所ヲ得有シタル事

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十二節參照)

第二、 二十四歳以上ノ者ニシテ自ラ其ノ自由ニ一任シ

テ他ノ地方ニ居住シ二ケ年以上引續キ歸住セサル事

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十二節第二十四節及ヒ第
二十六節參照)

此ノ期限ノ計算及ヒ各人自由ナル撰定ヲ要スルコトハ前條及ヒ其ノ附
論ニ論述シタル成規ト異ナルコトナシ其官吏陸海軍人等ニ關スル制限

然レ右第二ノ場合ニ於キテ設令へ一時歸住スルトアルモ其ノ地ニ永住スルノ目的ナキト明白ナルモノハ期限ヲ中斷スルノ効力ナシ

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十五節參照)

右二ケ年間ノ期限ノ中斷並ニ除算ノ方法ハ救助住所得有ノ場合ト同様ナリ

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十七節參照)

其ノ他救助住所ハ聯邦民タル資格ノ消滅ト共ニ喪失ス如何トナレハ此ノ法律ハ其ノ第一節ノ明文ニ由リテ只聯邦民タル者ノミニ適用シ得ヘキ者ナレハナリ但シバイエルン千八百六十八年四月十六日ノ本籍法第十四條ニ由ルキハ本籍權ノ消滅スル場合ハ只タバイエルン邦内他ノ町村ニ本籍ヲ得有シタルキノミニ限り他ノ地方ニ移リテ歸住

セサルトハ此ノ權ヲ消滅セシムルノ効力ナキモノトセリ

救助ヲ要スヘキ人ニシテ救助住所ヲ有セサル者ト雖救助ヲ受クヘキ社會法上ノ權利アルヘキモノナレハ其ノ適宜ノ本籍アルヘキハ喋々ノ辨ヲ待タス且ツ此ノ本籍權ヲ得有スルカ爲メニハ更ニ金錢ノ上納ヲ要セサルモ亦勿論ナリ

故ニ千八百六十八年四月十六日發布ノバイエルン本籍法第十一條及第十五條ハ救助住所ニ關スル聯邦法律ノ精神ニ反シタル者ナリ

第六十二節 救助ノ行政

公ケノ救助ハ左ノ例規ニ照シテ之レヲ執行スヘキモノトス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二節參照)

第一、一町村若クハ數町村ノ聯合ニ成リタル地方救貧

團結ニ於キテ其ノ所屬ノ貧困者ヲ救恤スルヲ以テ普通ノ常トス

○附屬ノ貧困者トハ第一救助住所ノ得有ヨリ救助ヲ受クルノ權利アル者第二、奴僕雇人等第三、此ノ救貧團結ノ町村内ニ於キテ一時救助ヲ要スル者はレナリ(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十八節千八百四十二年十二月三十一日發布ノ普國法律第二節參照)

○此ノ救貧團結ニ於キテ救助ノ義務アルコトニ就キテハ千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三節第四節及第六節千八百七十一年五月八日發布ノ普國法律第二節ヨリ第八節迄參照スヘシ

數町村聯合ノ地方救貧團結ハ其ノ法律上ニ規定セラレタル救助ヲ爲スニ就キテハ一体タルノ資格ヲ帶ヒ數町村分擔ノ責任アルヘキモノニアラス然レモ其ノ特別ナル宗教ノ信仰ニ基キ聯合シタル町村ヨリ成リタル救貧團結ハ一個ノ救貧團結タル資格ニ於キテ法律上ノ權利

義務ナキモノトス

バイエルンニ於キテハ千八百六十九年四月廿九日ノ法律ヲ以テ行政區畫ニ成リタル町村郡州ニ公ケノ救助及治療事務ヲ負擔セシメ政府モ亦臨時ノ補助トシテ此ノ義務ヲ負フヘキ者トセリ然レモ數町村聯合シテ一個ノ救貧區域ヲ成スハ妨ケナシトス(同上法律第十七條參照)又々重大ナル工業ヲ起シテ多數ノ職工ヲ使用スル者ハ其ノ職工ニシテ病疴ニ係リタル場合ニハ尙ホ特別ナル救助ノ義務ヲ負擔セシム(千八百六十九年四月二十九日發布ノバイエルン救貧法第二十一條千八百六十九年六月二十一日發布ノ聯邦營業規則第六節及第四百一節千八百五十四年四月三日發布ノ營業ニ關スル普國法律千八百五十四年四月十日ノ同上法律參照)

第二、數多ノ地方救貧團結ノ聯合ヨリ成リタル府縣救貧團結ニ於キテハ各地方救貧團結ニ於キテ救助ノ義務

ナキ者即チ救助住所ヲ有セサル者ヲ救護ス之レヲ通常ノ例規ト異ナリタル補助救護ノ方法トス

(千八百七十年七月六日發布ノ聯邦法律第五節及第三十節參照)

各聯邦ハ各聯邦タル資格ニ於キテ府縣救貧團結ノ作用ヲ行フコトヲ得ル而シテ此ノ場合ニ於キテハ各聯邦ハ救貧ニ關スル一般ノ權利義務ヲ有スヘキモノトス(千八百七十一年五月八日發布ノ普國法律第二十節千八百四十二年十二月三十一日發布ノ同上法律第九節ヨリ第十節迄千八百七十一年二月二十日發布ノメクレンブルヒシユハイン

達參照)

斯ク各市邑ノ區域ヲ超過シテ救貧團結ノ區域ノ擴張スルコトヲ許容シタルノ目的ハ各人其ノ移住自由ノ權利ヲ實行スルモ其ノ市邑ノ利害ト抵觸スルコトナカラシメ且ツ救貧制度ヲシテ各地方ニ固有ナル差異ヨリ生スヘキ

困難ヲ避ケシメントスルニ在リ

然レモ實際地方救貧團結ハ町村ノ區域ヲ出テサルモノ最モ多數ヲ占ムルカ如シ(千八百七十一年五月八日發布ノ普國法律第二節ヒミンクハウス)ノ歐洲諸國救貧法第六十四葉參照)

已ニ千五百三十年十一月十九日發布ノ帝國警察規則ニ於キテモ各邑ニ於ケル救貧法ノ原則ヲ明示セリ勿論此ノ原則ハ嚴ニ之レヲ實行セサリント雖モ現ニ立法上國民邑民(永住ノ者及ヒ外國人(住居ノ一定セサル者)ノ區別ヲ爲スニ至レリ(マリア、ラレサ女王ノ發布セル千七百五十四年十一月二十二日ノ乞食及救貧令及ヒ「エミンク」ハウス同上第四百二十六葉參照)

故ニ各地方ニ固有ナル特例事項ハ詳細ニ之レヲ考察セサルヘカラス今マ其ノ綱目ヲ舉クレハ左ノ如シ
第一、地方救貧團結及ヒ府縣救貧團結併ニ救貧事務官

衙ノ合同及制度

普國ニ於キテハ救貧事務ノ行政ハ町村ニ於キテハ町村ノ官衙ニ委任
 シ府縣救貧團結ハ一般重大ナル公ケノ救助事務ヲ掌ル設令ヘハ瘋癲
 白痴聾啞盲目者等ニ關スル事項ノ類ノ如シ(千八百七十一年五月八日
 發布ノ普國法律第二節及第三十一節千八百六十九年四月廿九日發布
 ノバイエルン救貧法第四十一條參照)

第二、公ケニ給與スル救助ノ種類及數量

第三、救助費用ノ仕拂ニ必要ナル方法ノ制度

地方救貧費用ハ一般地方救貧資金慈善食社及ヒ法律上ニ定メタル收
 入ヨリ支出ヲ爲シ特別ナル救貧金庫ニ於キテ之ヲ司ル(千八百六十九
 年四月廿九日發布ノバイエルン法律第十八條千八百四十年ノクール
 サクセン法律第九節ヨリ第二十二節ニ至ル迄千八百七十一年二月二
 十日發布ノメクレンブルヒシユワリン布達第五節千八百七十一年五

月八日ノ普國法律第八節第二十九節及ヒ第七十節參照)

第四、地方救貧團結ニ保護ヲ與フル事

此ノ保護ハ之レヲ充分救助ノ義務ヲ盡シ能ハサル地方救貧團結ニ與
 ヘサルヘカラス(千八百六十九年四月廿九日ノバイエルン救貧法第三
 十八條及第四十一條千八百七十一年五月八日ノ普國法律第三十六節
 參照)

第五、地方救貧團結ヲ以テ府縣救貧團結ノ機關トシテ 之レヲ利用スル事

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第八節千八百七十一年二月二
 十日發布ノスリレンブルヒシユワリン達千八百七十一年五月八日普國
 法律及ヒ同年四月十日同上法律ニ關スル指令參照)

第六十三節 一時ノ救恤

救助ヲ要スヘキ者アリタル片ハ先ツ其ノ所在地ノ地方

救貧團結ニ於キテ一時ノ救助ヲ行フ

千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十八節千八百四十二年十二月三十一日發布ノ普國法律第二十六節及ヒ第二十九節千八百六十九年四月二十九日發布ノバイエルン救貧法第十條及第十二條千八百四十年クルールサクセン同上達第七節及第三十九節參照)

或ル場合ニ於キテハ現ニ窮困者ヲ他地方ニ放逐スルコトヲ得ル然レモ重大ナル理由アラハ此ノ放逐ノ權利ハ諸團結相互ノ契約若クハ行政裁判ニ由リテ廢止スルコトヲ得ル(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三十四節千八百六十七年十一月十一日發布ノ移住自由ニ關スル聯邦法律第五節及第六節參照)

家族雇人等ノ關係、契約組合等ヨリ生スル救助ノ義務ハ公ケノ救助ヲ爲スノ義務トハ更ニ抵觸スル所ナシ(千八百七十年六月六日聯邦法律第六十一節及第六十二節千八百六十九年四月廿九日バイエルン法律

第五條第十七條千八百十年十一月八日普國雇人規則第八十六、八十七、九十四、九十五條參照)

然レモ一時ノ救護ヲ爲シタル地方救貧團結ハ其ノ救護ヲ爲スヘキ義務ト共ニ左ノ權利ヲ有ス

第一、適當ニ救護ノ義務アル地方救貧團結若クハ府縣救貧團結ヨリ救護ノ爲メ一時立換ヘタル費用ノ償却ヲ受クルノ權アリ而シテ此ノ償却スヘキ費用ハ法律ニ從ヒ其ノ地方ヨリ徵收スレモ一般行政ノ費用及團結所屬醫員ノ費用ハ之レヲ負擔セシムルナシ

○普國ニ於キテハ內務卿府縣會及町村會ノ議決ヲ經テ右ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得ル(千八百七十一年五月八日發布ノ普國法律第三十五節參照其ノ他ノ場合ニハ罪囚送致費警備費等地方費目ト流用スルコトヲ得ル(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三十節參照)

○(一) 般行政費用ニ就キテハ千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第二十八節ヨリ第三十節迄千八百四十二年十二月三十一日發布ノ普國法律第二十五節千八百六十九年四月二十九日發布ノバイエルン救貧法第十三條千八百四十年クルールサクセン同上第七節參照)

第二、救助費用ヲ支辨スヘキ責任ヲ有スル救貧團結ヲシテ一時救助シタル困究者ヲ受理セシムルノ權アリ但シ右困究者ニシテ其ノ勞役ニ堪ヘサル不能力ノ原因暫時ノ者ニシテ永續セサル性質ナル片ハ此ノ限ニアラス
(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三十一節千八百六十九年四月廿九日バイエルン法律第十一條參照)

救助住所ヲ有セサル困究者即チ外邦ヨリ來リタル者ヲ救助スルノ義務ハ右困究者カ前營テ有シタリシ救助住所ノ聯邦ニ於キテ負擔スヘキモノトス(千八百七十年聯邦法律第三十三節參照)又各困究者ヲ受

理スルノ義務アル救貧團結ニ對シテハ其ノ適當ナル護送費用ヲ請求スルコトヲ得ル(同上法律第三十二節參照)

一時ノ救護ヲ爲シタル地方團結ハ斯ク二様ノ權利ヲ有スルカ故ニ救助ヲ要スヘキ者アル片ハ直ニ其ノ本籍家族住所ヲ審査シ右權利ヲ有スル救貧團結ハ六ヶ月内其ノ旨ヲ公報シテ法律上之レニ關スル裁判及其ノ執行ノ請求ヲ爲スコトヲ得ル

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三十四節ヨリ第三十五節迄千八百六十九年四月二十九日發布ノバイエルン救貧法第三十一條參照)

公ケノ救助ヲ爲スヘキ義務ノ有無如何ニ就キ救貧諸團結彼是ノ間ニ於キテ爭議ヲ生シタル片ハ各法律ニ於キテ規定シタル行政訴訟手續ニ從ヒ救助事件ニ關シテ其

ノ權利ヲ請求スル救貧團結ノ地ノ豫定セラレタル上等官衙ニ於キテ書類審理ノ上之レカ理由ヲ説明シテ其ノ判決ヲ下スヘキモノトス

○此ノ訴訟裁判ヲ爲スヘキ者ハ普國ニ於キテハ本籍事務委員之レニ任シ(千八百七十一年五月八日ノ法律第四十節參照) バエールンニ於キテハ各區初審行政官衙ト各邑控訴施政官衙トヲ區分シ尙ホ至高行政裁判所ノ裁決ヲ得ヘキモノトセリ(千八百六十九年四月二十九日ノ法律第四十三條參照)

○(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第三十七節ヨリ第四十一節ニ至ル)千八百六十九年四月廿九日發布ノ バエールン 法律第四十三條千八百四十二年十二月三十一日普國救貧法第三十三條及第三十四條參照)

右行政官衙ノ判決ハ本籍事務ノ主管タル聯邦官衙即チ

高等行政官衙ニ上訴スルコトヲ得ル但シ此ノ上訴ハ一般官衙ノ原裁判執行ヲ中止スルノ効力ナシ

○此ノ高等官衙ノ何物タルニ就キテハ千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第五節ヲ參照スヘシ

○上訴ノ效力及ヒ此等官衙ノ性質關係及ヒ起訴手續等ニ就キテハ千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第四十一節ヨリ第五十二節迄參照)

聯邦官衙ノ審理手續ハ其ノ官衙ニ於キテ起草シ聯邦議會ニ於キテ許容セル規則ヲ以テ定ム(千八百六十九年四月二十九日發布ノ バエールン 救貧法第四十三條千八百四十二年十二月三十一日普國法律第三十四條千八百四十年 クールサクセン 救貧令第九十八節千八百三十五年一月三十日同上ノ法律第十四節參照)
費用償却ノ義務アル救貧團結ニシテ到底其ノ義務ヲ盡

ス丁能ハサル片ハ其ノ全額ナルト否トヲ問ハス其ノ救貧團結所屬ノ聯邦ニ於キテ直接又ハ間接ニ之レカ代償ヲ爲サ、ルヘカラス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第五十三節及第五十七節參照) 外國人ニシテ救助ヲ要スヘキモノアリタル片ハ其ノ所在地ノ地方救貧團結ニ於キテ之ヲ救助セサルヘカラス而シテ此ノ場合ニ於キテハ救助費用ノ償却外國人ノ受理ニ關スル事務ハ其ノ關係アル聯邦ニ於キテ之レヲ受理スヘキモノトス

(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第六十節、千八百六十九年四月廿九日發布ノバエールン法律第十五條參照)

外國人ニ關スル救助費用償却ノ許否如何ハ各國條約ノ如何ニ由ル

第六拾四節 救恤品

公ケノ救助ヲ給與スルハ特定シタル理由アル者ニ限ル而シテ此ノ救助ヲ受クルノ權利ハ公法上ニ成立シ事物自身ノ本性ニ於キテハ決シテ之ヲ私法上ヨリ論述スヘキモノニアラス

故ニ公ケノ制度ニ由リ救助ヲ受クルノ權利ハ行政上ヨリ論述スヘキモノトス(千八百四十二年十二月三十一日普國救貧法第三十三條及千八百七十一年五月八日ノ同國法律第六十三節、千八百六十九年四月廿九日バエールン救貧法第四十三條參照)

一般ノ政規上ヨリスレハ此ノ救助ヲ受クヘキ者ハ勞役ニ堪ユルノ能力ナキ者ノミトス但婦女、寡婦及幼者ヲ包括ス

救助ヲ與フヘキハ只タ本人若クハ其家族ニシテ適當ノ方法及ヒ能力ヲ欠キ又ハ特別ナル切迫ノ事情ヨリ其ノ生命若クハ健康ヲ保全スル

ノ資力ナキ者ニ限ル(千八百六十九年四百廿九日バエールン救貧法第三條參照)

勞力ニ堪ヘ得ヘキ者ト雖モ其ノ危急切迫ノ場合ニ於キテ公ケノ安寧風俗ニ利害ヲ及ホスヘキ者ト認メタルキハ必要ナル救助ヲ與フ(バエールン同上法律第十條參照)而レモ此ノ場合ニ於キテハ適當ナル強制ヲ用ヒテ勞役ニ就カシメ或ハ必要ナル場合ニ於キテハ之レニ懲戒ノ處分ヲ施スヲ得ル(千八百四十年クールサクセン救貧法第二十七節ヨリ第三十一節千八百四十二年十二月三十一日普國法律第十七節ヨリ第二十四節千八百六十九年四月廿九日バエールン法律第四條及第十條參照)

救助ノ爲メ給與スヘキ物件ハ生活ニ必要ナル物及ヒ其ノ他ノ欠クヘカラサル需用物ニ限ルヘキモノトス即チ左ノ如シ

第一、衣、食、住

第二、醫藥

第三、埋葬

第四、貧困ナル幼兒ノ教育

(千八百六十九年四月二十九日バエールン救貧法第六條第十條第十二條千八百七十一年五月八日普國法律第一節千八百四十年クールサクセン救貧令第三十三節參照)

右ノ四種ノ給附ハ之レヲ究困者ニ贈與シタルモノニアラス後日財産ヲ有スルノ時ニハ之レヲ返償セシムヘキ貸與ニ過キス且ツ適當ナル内外ノ勞役ニ服スルノ義務ヲ負ハシム

(千八百六十九年四月廿九日バエールン法律第五條ヨリ第七條迄千八百四十年クールサクセン救貧令第六十五節ヨリ第六十九節迄千八百

五十五年五月二日ウルテンブルヒノ法律第五條參照

其ノ他救貧制度ハ貧困飢渴ノ豫防ヲ包括ス就中幼兒ニ在リテハ尤モ然リトス

貧困飢渴ノ豫防ハ間接ニハ一般ノ行政就中職業及營業規則ニ依リ之レヲ處理ス即チ公立病院病者救護資金預所貯金銀行貸金所質屋就役所等ノ諸制度ハ皆テ貧困豫防ノ結果ヲ有スヘキ者タリ(ロー氏著經濟學第二卷第三百三十三葉モール氏著警察學第一卷第五十六節參照)

○就中幼兒ノ教育ニ關スル者ハ孤兒院棄兒院養育院職業學校等ノ制度ノ類トス(モール氏著警察學第一卷第六十五節參照)

然レ凡乞食怠惰及無宿ノ徒ハ一切之レヲ禁制シ且ツ法律ニ由リ之レヲ處罰ス

(千八百七十年刑法第三百六十一條千八百十六年十一月廿八日バエールン命令千八百六十一年同上違警罪則第七十七條第八十七條ヨリ第

九十四條迄千八百五十六年四月十二日バーデン法律千八百六十三年同上違警罪則第六十五節ヨリ第六十七節迄リヨンジ氏著普國々法論第二卷第三百三十七葉モール氏著警察學第一卷第三百八十七葉スタイン氏著行政必携第四百十九葉參照)

救貧事務ハ特別ナル官衙ヨリ一定ノ規則ニ從ヒ之レヲ執行スレ凡此ノ官衙ハ市邑及國家ノ諸官衙ト共同シ且ツ國家ノ監督ヲ受ケテ中央政府ノ管轄ニ屬ス

(千八百五十三年五月三十日及千八百五十六年三月十九日發布ノ普國邑法千八百七十一年三月八日ノ法律第三節ヨリ第六節迄千八百六十九年四月廿九日ノバエールン法律千八百四十年クールサクセン救貧法第七十三節千八百七十一年普國法律第四節及第五節千八百七十一年四月一日ノ訓示參照)

○國家ノ管督ニ付キテハ千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第四

十一節千八百六十九年四月廿九日バエールン法律第四十二、四十三條
千八百七十一年三月八日普國法律第二十五節千八百四十年十月廿二
日クール、サクセン救貧令第一節參照)

右救貧官衙ハ公ケノ費用ヲ以テ之レヲ維持シ其ノ費用
ハ特別ナル行政ニ由リテ之レヲ收出シ費目ノ流用ヲ許
サス

(千八百六十九年四月廿九日バエールン法律第十八、十九條千八百四十
年クール、サクセン救貧令第九節千八百七十一年三月八日ノ普國法律
第八節及第二十九節參照)

法律ニ從ヒ救助ヲ要スヘキ者ハ何人ト雖モ其ノ救助ニ
漏ル、トナカルヘシ

救助ヲ要スル場合ニハ何人ト雖モ適當ノ救助ヲ受ケ得ヘキ者ナルカ
故ニ各人必ス一個ノ地方若クハ府縣救貧團結ニ屬シ彈丸ノ地ト雖モ

必ス地方救貧團結ノ區域ニ包括セラレサルヘカラス(千八百四十二年
十二月三十一日普國法律千八百七十年六月七日發布ノ聯邦法律第四
節參照)

外國人ハ其ノ救助ヲ要スルニ至リタル地ニ於キテ救助ヲ受クヘキモ
ノトス(千八百七十年六月六日發布ノ聯邦法律第六十節參照)

私人若クハ教會ノ惠與ニ屬スル救助併ニ慈惠會ハ公ケ
ノ救助ニ關スル制度中ニ包括セスト雖モ公ケノ救貧制
度ニ關スル大本ノ原理ヲ破ル、トアルヘカラス

(モール氏著警察學第一卷第三百五十六葉ラツィンゲル氏教會救貧法沿
草史第四百十三葉參照)

第八章 出版

第六十五節 出版自由ノ本性

出版トハ就中印刷シテ思想及所見ヲ増植流布スヘキ器械的ノ手段 (The press is the mechanical means by which thoughts and opinions, especially by means of printing, are multiplied and diffused: La press est une moyen mechnique, par laquelle pensées et opinions, specialment d'un voie d'impression, sont multiplies et rependues.) ニシテ法律ノ意義ニ於キテハ器械的ノ方法ニ於ケル思想ノ發顯ヲ云フ

口頭ノ言語ハ其ノ二人間私シノ談話ニ關スル者ハ敢テ之レヲ特別ナル規則ニ據ラシメスト雖_レ凡_レ結社集會ニ於キテスルモノ、如キ公ケニシテ且ツ實跡ノ結果ヲ生スル場合ニハ一派ノ法律條例ヲ以テ之ヲ整理セサルヘカラス(第九章ニ詳論ス)而シテ器械的ノ増植流布(即チ出版)ニ於キテハ只々之レヲ公ケナル性質ノミニ屬スル者ト云フヘキモノナルカ故ニ出版ノ自由權トハ自由ニ思想

所見ヲ發言スヘキ毫末ノ制限ナキ權利ノ謂ニアラサルナリ然_レ凡_レ出版自由ノ權タル其ノ本性ニ於キテハ必然存在スヘキモノニシテ全ク之ヲ消滅シ得ヘキモノニアラストス如何トナレハ人類活動交通ノ千差萬別ナル之レヲ壓抑制限セントスルモ到底公力干涉ノ及フ所ニアラサレハナリ

壓制ヲ旨トシタル「シーザリヤム」ノ時代及ヒ慘酷ノ手段ヲ以テ政府ヲ顛覆シタル最モ不幸ナル時代ニ於キテモ漸ク緩緩ノ方法ニ由リ近世ニ於キテハ警察ノ制度及ヒ問者アレンノロボチユルノ制ヲ以テ僅カニ出版ノ自由ヲ制限シ私人ノ活動ヲシテ公ケノ管督ヲ受ケシムルヲ得タリ要スルニ此等ノ方法ハ公ケノ權力ヲ濫用シ社會ト國家トノ關係ニ醜毒ヲ流シテ國家社會ヲ合セテ之レ殺害スル者タリ

出版ノ自由ハ公ケニ所見ヲ發露シ得ヘキ自由權中ニ屬

シ只々之レヲ器械的ノ方法ニ由リテスル者ナルノミ故ニ出版ノ自由ハ本來社會法上ノ權利ニシテ其ノ本性ニ至リテハ文化ノ社會ヲ以テ言聞ノ共通體ト見做セリ(The freedom of press has to the supposition, the civilised society as a community of speaking and hearing; La liberté de la presse suppose la société civilisée comme communication de parler et entendre.)

○千八百十四年六月四日發布ノ佛國法令第八條ニ曰ク「各佛蘭西人ハ出版自由ノ濫用ヲ防制スル法律ニ從フ以上ハ其ノ所見ヲ公ケニシ且ツ之レヲ印刷ニ附スルノ權アリ」ト又千八百四十九年獨逸帝國憲法第四條ニ曰ク「各獨逸人ハ言語、文章、印刷其ノ他形象ヲ顯ハスヘキ方法ニ由リ自由ニ其ノ所見ヲ發露スルノ權アリ」ト(リーンバツヘル氏著出版自由論第七葉ヨリ第十二葉ニ至ル參照)

○出版自由權ノ本性ハ文化ノ社會ヲ以テ言聞ノ共通體トスルモノナ

ルカ故ニ出版ニ由リテ他人ノ私事ヲ論述公布スルハ決シテ之レヲ許スヘキモノニアラサルノミナラス尙之レヲ處罰スルヲ得ル(佛國千八百六十八年五月十一日ノ法律第十一條參照)

故ニ出版ハ音ニ人類ノ交通智識及ヒ政治思想ヲ増進擴張スヘキ最モ効驗ノ著大ナル文化發達ノ方便タルノミナラス從來行ハレタリシ各州ノ閉鎖團結瓦解ニ及テヨリハ實ニ人類共合ノ「セメント」社會身體ノ神經系ニシテ社會生活ノ必需物タルヘキモノナレハ出版自由ノ權利ハ當サニ社會法上重要ノ制度ニ屬スヘキ者ナルヤ明カナリ

出版ハ斯ク社會一般共通ノ性質ヲ有シ一國內ニ限リテ特種ナル目的ヲ有セス當サニ社會生活ニ屬スル萬般ノ利益ヲ包括スヘキ者ナルヲ以テ之レヲ公ケナル交通ノ媒介社會中各人各個ノ人身ニ屬スル活

動事項中ノ一種トシテ論究セサルヘカラス是レ出版ノ自由權ハ人身ノ自由權等ト等シク人ニ屬スル社會法律制度中ニ屬スヘキ所以ナリ故ニ出版ハ決シテ職業者クハ營業ニ屬スル作用ニ出ツルモノニアラス全ク職業者クハ營業ト獨立シ此等ノ事項ト更ニ重大ノ關係ヲ有スルモノニアラス

由是觀之實際上ニ於キテハ一般ノ自由ト出版ノ自由トハ殆ント同一物ニシテ出版ノ自由モ亦何レノ邦國ヲ問ハス凡テ文化ノ人民ニ共通スヘキ必要ナル諸權中ノ一種ナルヲ知ルヘシ

(普國千八百五十年ノ憲法第二十七條及第二十八條、バエールン千八百十八年ノ憲法第四款第十一節、澳國千八百六十七年十二月廿一日ノ國憲第十三條、スダイン氏著行政學第四卷第二章第七十三葉、佛國千八百三十年憲法第七節、西班牙千八百三十七年憲法第二節、葡萄牙千八百

二十年憲法第百十四節、白耳義憲法第十節、威憲法第百節、希臘憲法第十節、英人 ゾラックス トーン 氏著英國法律註解第四卷第十一葉、英人 ラッセル 氏著英國憲法史第十三章、ブルンチ リ 氏著國法汎論第四百九拾六葉參照)

出版ノ自由ハ之ヲ濫用シ得ヘク又々現ニ之レヲ濫用セルノミナラス間々其ノ腐爛弊害ノ大ナル者アリ然レモ出版ハ財産、婚姻、思想ノ自由、移住ノ自由等ト等シク文化活動ノ原理ニ據ルモノナレハ其ノ之レヲ濫用スルノ故ヲ以テ此ノ自由ヲ奪フ丁能ハスト雖モ其ノ弊害濫用ノ極度ニ達スルニ至ラハ宜シク之ヲシテ正路ニ由ラシメサルヘカラサルノ必要ヲ生スヘシ

出版濫用ノ弊ヲ防クニハ通常三様ノ方法アリ第一ハ出版ノ改良ヲ謀ル事第二ハ家族、教會、學術、教育等ニ於キテ出版ノ勢力ニ反對セシムル